

REPORTS OF SUMMER EXCHANGE PROGRAM AT 3 VETERINARY SCHOOLS IN THE USA 2018

米国三大学獣医学部夏季研修レポート 2018



はじめに

1993年、獣医学科における教育研究への効果を期待して国際交流の活性化のために国際交流検討委員会が設立された。その後2年の間に米国5大学を現地訪問する等、交渉を重ね検討を行った。最終的には米国三大学（パデュー大学、テネシー大学、ジョージア大学）と学術交流協定を締結し、1995年8月に1回目の学生・教員の派遣が行われた。協定には1) 獣医学科の学生に米国の臨床教育を体験する機会を設ける（参加学生には単位認定が与えられる）。2) 教員を招聘し、学生・教員に講義やセミナーをして頂く。3) 北里大学の教員の海外研修の機会を増やす。の主たる目的がある。これまでの積み重ねが今ある姿であると思いますが、受け入れ先がさらなる発展を示されていることに感謝しております。

24年目を迎える研修も無事に終わり、同行された3人の先生（パデュー大学：筏井宏美先生、テネシー大学：中村和市先生、ジョージア大学：安藤亮先生）には大変ご足労をおかけしました。今年度で三大学に研修された16人の学生（パデュー大学：6名、テネシー大学：5名、ジョージア大学：5名）を加えると延べ524名の研修生となった。無論長い

歴史の中で各人の体験は個々のものであるが、この歴史を肌で感じることもあったのではなかろうか。研修の目的は米国での臨床現場を体験することであるが、多くの方々のもてなしを受け、感謝の心を持ち続けることであらう。

今年度は招聘教員が来られていないが、11月にパデュー大から、国際交流担当者のWilliam Smith II氏が来里される予定である。招聘教員や研修学生には学生や教員との交流ばかりでなく、少しばかり日本の文化にも親しんで頂きたいと願う。

この報告書は24回目を迎えることになるが、学生一人ひとりの貴重な体験ばかりでなく、この交流の歴史を紡ぐ一助になって欲しいと切に願います。最後になりますが、学生諸君の今後の発展を願うと共に、この交流が今後も学生達に大きな「夢」と「希望」を与え続けることができることを期待して巻頭の言葉とさせていただきます。

2018年9月20日

獣医学科国際交流委員長 折野宏一

これまでの米国 3 大学からの招聘教員および交換留学生

Purdue University

招聘年・月	氏名 Name	職位 Status	専門 Specialty
1996. 6	Dr. Ralph Richardson	Professor	Veterinary Internal Medicine
1997. 6	Dr. John Van Vleet	Associate Dean and Professor	Veterinary Pathology
1998. 6	Dr. James P. Toombs	Professor	Small Animal Orthopedics and Neurosurgery
1999. 9	Dr. Alan H. Rebar	Dean	Veterinary Clinical Pathology
2000. 6	Dr. Paul Robinson	Professor	Immunopharmacology and Biomedical Engineering
2001. 10	Dr. David J. Waters	Professor	Oncology
	(Cancelled due to 9.11 terror)		
2002. 11	Dr. David J. Waters	Professor	Oncology
2003. 11	Dr. Allan Beck	Professor	Animal Ecology
2004. 6	Dr. Harm Hogen Esch	Professor	Head of Department of Veterinary Pathobiology
2005. 11	Dr. Sophie A. Lelièvre	Associate Professor (2010)	Basic Medical Sciences
	Amanda Cole(2005.7)	Student	
2006.5	Maria Littles	Student	
2007. 10	Dr. Henry W. Green	Associate Professor	Cardiology
2008. 11	Dr. Abdelfattah Nour	Professor	Basic Medical Sciences
			Director of International Program
	Dr. Shulma I Mohammed	Associate Professor	Cancer Biology
2009. 5	Dr. Willie Reed	Dean and Professor	Veterinary Pathology
2009. 10	Dr. Steve Thompson	Associate Professor	Pet Primary Care
2010. 7	Dr. Brenda Austin	Assistant Professor	Small Animal Surgery
2011.11	Dr. Sophie Lelievre	Associate Director	Discovery Groups
	Joshua Taylor(2011.7)	Student	
2012. 10	Dr. Daniel Hogan	Associate Professor	Cardiology
2012. 10	Dr. Norie Parnell	Clinical Associate Professor	Small Animal Internal Medicine
2013. 11	Dr. Annette Lister	Associate Professor	Veterinary Clinical Science
2014. 11	Dr. Tomohito Inoue	Clinical Associate Professor	Anesthesiology
2015. 6	Dr. Joanne Messick	Professor	Veterinary Clinical Pathology
2016.10	Dr. Paula Johnson	Clinical Assistant Professor	Emergency Clinical Care
2017.6	Kristi M Crow	Student	
2017.11	Dr. Jan F Hawkins	Professor	Large Animal Surgery

The University of Tennessee

招聘年・月	氏名 Name	職位 Status	専門 Specialty
1995. 9	Dr. Michael Shires	Dean and Professor	Veterinary Surgery
1996. 11	Dr. Robert Toal	Associate Professor	Veterinary Radiology
1997. 11	Dr. Robert C. DeNovo	Associate Professor	Veterinary Internal Medicine
1998. 6	Dr. Dan Ward	Associate Professor	Veterinary Ophthalmology
1999. 6	Dr. Michael Shires	Dean and Professor	Veterinary Surgery
2000. 6	Dr. James Brace	Associate Dean and Professor	Internal Medicine
2001. 6	Dr. Karen Tobias	Associate Professor	Veterinary Surgery
2003. 1	Dr. Frank Andrews	Professor	Large Animal Medicine
2003. 4	Dr. Michael J. Blackwell	Dean	Public Health and Epidemiology
	(Cancelled due to Iraq war)		
2004. 4	Dr. Michael J. Blackwell	Dean	Public Health and Epidemiology
2005.11	Dr. Sarel R Van Amstel	Professor	
2010. 6	Dr. Michael M. Fry	Associate Professor	Clinical Pathology
2011.10	Dr. Edward Ramsay	Professor	Avian & Zoological Medicine
2017. 6	Dr. Juergen Schumacher	Professor, Head(Small Animal Clinical Sciences)	Avian & Zoological Medicine
			Emergency Clinical Care
2017.5	Hana Mariko Henry	Student	

The University of Georgia

招聘年・月	氏名 Name	職位 Status	専門 Specialty
1996. 6	Dr. Charles Martin	Professor	Veterinary Ophthalmology
1997. 5	Dr. Jean Sander	Associate Professor	Poultry Disease
1999. 1	Dr. Corrie Brown	Professor	Head of Department of Pathology
2000. 11	Dr. Margarethe Hoenig	Professor	Physiology and Pharmacology
2001. 12	Dr. Raghubir Shama	Professor	Physiology and Pharmacology
2003. 1	Dr. Duncan Ferguson	Professor	Physiology/Pharmacology and Small Animal Medicine
2004. 1	Dr. Thomas F. Murray	Distinguished Professor	Head of Physiology and Pharmacology
2005. 1	Dr. Mary Ann Radlinsky	Assistant Professor	General Surgery
2006. 6	Dr. Patrick Hensel	Assistant Professor	Dermatology
2006. 6	Dr. Ursula Dietrich	Associate Professor	Small Animal Medicine and Surgery
2007. 9	Dr. Suzan White	Professor	Large Animal Medicine
2008. 9	Dr. Amie Koenig	Associate Professor	General Internal Medicine +CE
2008. 11	Dr. Patrick Hensel	Assistant Professor	Dermatology
2009. 10	Dr. Simon Platt	Associate Professor	Neurology +CE
2010. 2	Mrs. Malorie D. Franks	Student	Class of 2011
			+CE: Continuing Education (卒後教育セミナー含む)
2014. 7	Dr. Mary Hondalus	Associate Professor	Infectious Disease

米国三大学研修参加者および同行教員

年度	Purdue			Tennessee			Georgia		
	Students		Faculty	Students		Faculty	Students		Faculty
	男 M	女 F		男 M	女 F		男 M	女 F	
1995	2	3	I. Hashimoto	5	5	K. Watanabe	3	0	K. Temma
1996	0	6	T. Ogasawara	3	11	Y. Hikasa	0	5	K. Takehara
1997	1	4	To. Oyamada	0	7	Y. Ohnami	3	2	H. Madarame
1998	2	4	S. Ueno	2	6	Nobu. Itoh	2	4	S. Okano
1999	2	5	H. Itoh	1	7	S. Kawamura	3	4	S. Kurusu
2000	1	8	Y. Hara	3	5	M. Uechi	3	4	N. Maehara
2001	7	5	F. Hoshi	4	4	N. Susa	2	5	K. Mutoh
2002	2	8	I. Sakonju	2	2	S. Takai	2	5	K. Orino
2003	3	6	N. Hoshi	2	5	S. Higuchi	1	4	M. Kawaminami
2004	3	5	U. Fukushima	3	4	M. Natsuhori	2	5	H. Ikadai
2005	6	3	K. Taniguchi	4	5	T. Sano	2	5	O. Hashimoto
2006	6	3	K. Watanabe	1	6	C. Baku	3	5	T. Andoh
2007	3	4	M. Oikawa	0	8	T. Kakuda	0	8	M. Okamura
2008	3	4	Nao. Itoh	2	4	Y. Hara	3	3	K. Takehara
2009	4	3	T. Yonezawa	5	3	To. Oyamada	3	5	Y. Ohnami
2010	2	4	Y. Yoshikawa	4	3	T. Kashimoto	0	8	T. Kakizaki
2011	3	4	T. Taoda	3	5	T. Takano	4	4	T. Tanabe
2012	5	3	Y. Shimamoto	5	2	Y. Hori	6	2	K. Yoshioka
2013	4	5	M. Okada	4	3	S. Kurusu	3	5	K. Orino
2014	3	2	S. Iwai	2	4	S. Chikazawa	2	2	M. Natsuhori
2015	6	2	K. Maeda	4	4	Y. Maeda	7	2	N. Sasaki
2016	4	4	R. Terashima	3	4	R. Kamata	3	6	S. Wada
2017	5	5	M. Tomioka	3	4	T. Kakuda	1	5	H. Ishino
2018	3	3	H. Ikadai	0	5	K. Nakamura	4	1	R. Ando

Purdue University
College of Veterinary Medicine
11 Aug. – 26 Aug. 2018



Ms. Wakayama, Mr. Heishima, Ms. Fukui, Mr. Yamamoto, Ms. Koyama, Mr. Niikura,

参加者一覧

同行教員：筏井 宏実 Hiromi IKADAI

氏名	Name	所属研究室
兒山 千歌	Chika KOYAMA	獣医解剖学
新倉 勇貴	Yuuki NIIKURA	実験動物学
福井 あみ	Ami FUKUI	小動物第1 外科学
平島 達也	Tatsuya HEISHIMA	小動物第2 外科学
山本親一郎	Shinichiro YAMAMOTO	小動物第2 内科学
若山 夢歩	Yumeho WAKAYAMA	獣医伝染病学

パデュー大学 海外研修報告書

兒山 千歌 Chika KOYAMA

8/11(土)

空港で Wi-Fi を借りて換金し、集合時間に集まりチェックインして荷物を預けた。飛行機では時差ぼけしないように出来るだけ起きておき、1 時間半ぐらい寝てあとは映画を見て過ごした。

シカゴに到着してから入国審査で 1 時間弱並んだ。入国審査では、日本での職業と勉強していることを聞かれ答えると、「うちの犬、どんどん太るんだけどどうすればいい？」と質問された(笑) 審査で並んだため次の搭乗までの時間がなくなり、シカゴの空港を走ってなんとか間に合った。

インディアナの空港で Will と Tomo 先生が出迎えてくれ、私たちが 2 週間過ごす家に車で送ってくださった。先生と生徒 6 人でシェアハウスだが、すごく大きな家で日用品や食品も沢山用意してくださっていた。

その後用意してくださったサンドイッチをみんなで食べて就寝した。

8/12(日)

朝先生が迎えに来てくださり、翌日からの研修の予定や流れを確認したあと、近くのコンビニまでみんなで歩いて行って場所を教えてもらった。

その後大学に行き大学の売店や施設を案内してくれた。大学はとても広く大学全体が街になっていて、各部活のスタジアムやジム、ゲームセンターやボウリング場まであった。もちろんマクドナルドやスタバも入っていた。

売店を周って教えてもらい、そのあと学内のピザ屋さんでランチを食べた。

その後 Columbian park Zoo に行ったら色々な動物を見てから食料や服など色々なものが売ってあるターゲットに行き、今後必要な食材を買った。個人的には化粧品なども安く買い物ができた。

ディナーはステーキのお店で学部長や大学の先生方が何人かいらっしやり、自己紹介をして色々な話を聞いた。ステーキは小さいのを頼んだが、付け合わせのポテトや野菜やチキンなどが沢山あって、すごくお腹いっぱいになって半分ぐらい持ち帰った。「Welcome to PVM」と書いた大きなケーキも用意してくださっていた。

8/13(月)

各科でローテーションの実習が始まった。みんなでバスで学校まで行き、MRI のビデオなどを見て書類にサインした。その後、3 年生のデニーが獣医

学部の校舎のツアーに連れて行ってくれた。個人的には解剖の部屋を見学できたのが嬉しかった。

スクラブや白衣を借りて 1 人ずつ各科に分かれてローテーションが始まった。

私は麻酔科の予定だったので、部屋に案内してもらった。パデューも一番上の学年の生徒が数人ずつ各科を周っていて、それに参加させてもらう感じだった。日本人 1 人でその場に入るのですごく緊張していたが、麻酔科には日本人の女の先生がいらっしやり、いきなり日本語で挨拶してくださって緊張が一気に溶けた。

日本から歌舞伎揚げと抹茶のオレオのお土産を持って行っていたので、みなさんに挨拶するときに渡して説明すると、すごく喜んでおいしいと言って食べてくれた。

その後麻酔をかけているところやオペが始まる場所を見させてもらった。

まず感じたのはこちらから話しかけないと向こうからはほとんど何も話してくれないということ。でもこちらから質問するとなんでもすごく丁寧に答えてくれる。1 聞くと 10 答えてくれるが 1 聞かないと 0 だと思い、これから沢山話しかけようと思った。

この日は豚の耳そうじなどのスパ、腫瘍の生検、CT、歯科の麻酔の予定があることを教えてくれた。豚のスパが気になっていたが時間になっても始まらず、尋ねると「なかなか来ないから今日はないかもね!」と言われ、日本との感覚の違いに驚いた(笑) お昼は学内のカフェで食べた。

この日は緊急で 39g の小さなインコの腫瘍のオペが入ってきたので見せてもらった。電気メスで腫瘍を取り、気管挿管をしていて、こんなに小さいのに小動物と同じ機械や麻酔を使ってオペしていることに驚いた。

心音をスピーカーに繋いで聞いていて、そのシステムは今まで見たことがなかった。

また、ジャーマンシェパードの右大動脈弓遺残症の CT を撮るための麻酔も見た。

英語が聞き取れないときは何回も聞き直すと言葉を変えて教えてくれ、また Google 翻訳が役に立った。

夕方からキャンパスツアーに行って、夜ご飯は近くの韓国料理のお店で食べた。

8/14(火)

7:00 に家を出て自分たちでバスに乗って学校まで行った。この日も麻酔科に行った。学生の女の子がすごく親切にしてくれて、麻酔のことなど色々教えてくれた。

朝から昨日 CT を撮った右大動脈弓遺残のオペを見た。肋間開胸など習ったことばかりだったので面

白かった。心音をスピーカーで聞いたり足にも留置を取ったり日本と違うところがあって驚いた。

午後からは猫の皮下尿管バイパスのオペを見た。外から覗いていたが、隣にいた学生の子がレントゲン写真を見せながらわかりやすく説明してくれ、こちらから質問したことはみんな丁寧に答えてくれた。夕方は時差ボケで立っていても眠気が来てしまい、目覚ましに外を歩いたりして頑張った（笑）

夜は学校の近くの **Five Guys** というハンバーガー屋さんで食べたがすごく美味しかった。

8/15(水)

この日も麻酔科に行き、午前中は警察犬の肺動脈弁形成術を見た。

先生が手本を見せたあと学生に実際にやらせていて、学生でもオペを経験できることが衝撃だった。また、アメリカでは獣医とテクニシャン(VT)の違いは執刀できるかどうか程度で、そこまで違いがないように思った。

お昼は **Thompson** 先生のエキゾチックアニマルについての講義を受けた。英語をゆっくり話してくださりすごく面白い内容だった。

午後はゴールデンレトリバーの去勢手術を見た後に、ラウンドといって学生数人で先生から講義を受けた。日本で習った内容だったのでなんとか理解することができた。先生が「あなたも発言していいからね」と言ってくれたが、日本語で考えた後英語に直して発言するのがついていけず結局発言できなかった。

アメリカでは先生が質問したらみんな答えが合っているように間違っているようにととりあえず考えを即答し、先生もそれに対してフォローし説明する環境でいい環境だと思った。

この日は麻酔科最終日だったので先生と学生にお礼を言い、その学生とはその後もうすぐ仲良くなった。

夜はお昼に講義をしてくださった **Thompson** 先生宅でホームパーティーがあり、研究室の学生と一緒にハンバーガーなど食べたりゲームをしたりして過ごした。ゲームでは国境を超えて盛り上がった感じがして嬉しかった。

8/16(木)

この日から大動物外科に行かせてもらった。前日のホームパーティーで知り合ったテクニシャンの **Pat** が1日のスケジュールを教えてくれた。

最初に脛骨のプレート除去のオペを見た。執刀の先生が最初にレントゲン写真を見せながら説明をしてくれた。少し見にくかったが、テクニシャンが踏み台を用意してくれそこに立って見させてもらっ

た。オペは、シニアクリニシャンが見本を見せた後レジデントに教えながら執刀していた。縫合は学生がやらせてもらっていて驚いたが羨ましかった。

その後、角膜扁平上皮癌の疑いをもつ馬の検査を見させてもらった。

白と茶色の珍しい柄の馬で、眼の周りは白い皮膚だったので、太陽光を浴びて癌になりやすいという説明をしてくれた。眼底検査やフルオレセインなど、日本で犬の眼科の実習でやっていたことをそのまま馬でも行なっていて驚いた。

好酸球性肉腫か扁平上皮癌の2択で迷っていたため検査をしたらしく、検査後結果を聞くと、おそらく扁平上皮癌だがこれから病理検査に出すと言っていた。

午後は **OCD** の馬の関節鏡挿入のオペを見させてもらった。大きな機械でモニターに映しながら関節鏡で除去していった。これも片足はシニアクリニシャンがやって手本を見せ、もう片足をレジデントがやり、縫合は学生という流れだった。シニアクリニシャンの面倒見がよく、レジデントに丁寧に教えているのを見て教育体制が整っていることを感じた。

オペのあとは、テクニシャンや学生が歯のことなど教えてくれ、馬の入院室を周って実際にガルベイン溝などを見せてくれた。8年大学に通っていることもあるが、こちらの学生の知識の豊富さには毎回驚いた。

夜はパピーというハンバーガー屋さんで男性陣が肉5枚のハンバーガーを頑張って食べ（笑）その後は留学生や学生と学校のボウリング場でボウリングをした。

スコットランドからの留学生はボウリング初挑戦だったらしいが、ストライクをバンバン出していて驚いた（笑）

8/17(金)

この日も大動物外科の予定だったが、往診に行きたいと伝えたら先生がコンタクトしてくださり往診に行かせてもらうことになった。

午前中は先生2人とパデュエの薬学部の学生1人と一緒に往診用のトラックに乗って向かった。薬学部の学生は同い年で、道中はお互いの学校のことや学部のことなどを話した。

馬を4頭飼っている家に着き、削蹄のための鎮静でメデトミジンを投与した。

削蹄は授業で習っていたので、こちらの削蹄師さんの削蹄を見るのも面白かった。

日本の授業で牛で削蹄したときは牛がかなり暴れたが、こちらの馬はおとなしく、尋ねるとやはり馬の方が明らかにおとなしいらしい。今回見た馬は4

頭の中でも特におとなしい馬だと言っていた。

午後は先生と2人きりで往診に向かった。

助手席に座って往復約2時間だったので会話ができるか緊張したが、こちらから話しかけるようにすると向こうからも話してくれるようになり、お互いの国の文化や大学のことなど楽しく色々な話をしながら車内を過ごした。

先生は小中学生の子供が3人いるお母さんで、家のこともしながらバリバリ働いていて尊敬した。学生もオペに参加できるのかと尋ねると、こちらの学校では学生は先生の元ならば縫合などもできるということを教えてくれた。

乗馬場に着き、妊娠診断の超音波検査を見せてもらった。

病院に帰ってからは山羊の膀胱結石のオペを見た。保定や器具を渡すのを手伝わせてもらい、すごく近くで見ることができた。

夜はWill宅でホームパーティーがあり、Willの奥さんやTomo先生の料理をご馳走になった。Willの可愛い2歳の娘さんやTomo先生の小学生の子供さんとも一緒に遊び、とても楽しい時間を過ごすことができた。

8/18(土)

朝から州のお祭りへ向かった。馬や豚などの展示を見たりして、そのあと自由行動でお昼ご飯を食べた。インディアナはとうもろこしの名産地なのでとうもろこしを食べたが、すごく甘くて美味しかった。午後からはお祭りに来ている移動遊園地に行き、絶叫好きのメンバーで沢山乗った。

アメリカはとりあえず遠心力系のアトラクションが沢山あって楽しかったが酔ってしまった(笑)

帰宅後は私は留守番をしていたが他のメンバーがアジアンショップに行き日本食を色々買って来てくれ、夕飯はうどんを食べた。毎日ジャンクフードだったので、久々のうどんはすごく安心した。

その後、留学生がOUTfestというLGBTAのお祭りに誘ってくれ、向かうことにした。Lyftというアプリで個人タクシーのようなものを利用して向かった。このアプリは運転手と電話しなければいけないが、私を含めほぼみんなWi-Fiの利用だったので電話が使えず、唯一1人SIMカードに変更していた山本くんのスマホを使わせてもらった。北里の学生のみで向かったので少し緊張していたが運転手さんがいい人で安心した。

OUTfestではドラッグクイーンのショーを見た。観客の歓声もすごくステージも面白くて楽しかった。帰りもLyftを使って帰った。

8/19(日)

この日はWill一家とTomo先生一家と一緒にIndianapolis Zooへ向かった。

最初に動物園の病院に入り、オペ室やレントゲン室など見させてもらった。吸入麻酔のマスクのサイズが動物によって様々で、カテーテルにキャップを付けたような小さなものから、洗剤のボトルの底を切って作ったようなすごく大きなものまであって驚いた。他にも大きな体重計など、動物園ならではのものが沢山見れた。

その後はサイの飼育場所に裏側から入り、獣医さんに説明してもらってサイの皮膚に触らせてもらい、象の飼育場所では近くで象に触らせてもらった。象の耳は太い血管が沢山あって体温調節をしているらしく、実際に触ると分厚いゴムのような丈夫さで驚いた。

その後は通常のお客さんと同じように動物園を楽しんだ。自由行動ではTomo先生の子供さんのKaiとNamiが完璧なガイドをしてくれた。

夕飯はBasilというタイ料理のお店に行きトムヤムクンヌードルを食べた。アメリカのスパイシーな料理はレベル1でも結構辛いですが、辛いのが好きなのでレベル2を頼んだ。想像していたよりかなり辛かったがすごく美味しかった。

8/20(月)

この日は大学の生徒が新学期の初日だったので、スクールバスがすごく混んでいた。

この日は眼科に行かせてもらった。パデューの学生も丁度ローテーションの科が変わった日だったので、最初に眼の検査の説明を学生と一緒に一通り受けた。最初に挨拶はしたものの聞いているだけでは説明が淡々と進んで行くので、眼底検査のときに勇気を出して「やってみてもいいですか?」と一言言うと、先生も「勿論!」と快くやらせてくれ色々教えてくれた。やっぱりアメリカでは自分から発信しないといけないと実感した。

その後馬の扁平上皮癌の診察が入っていたので見させてもらい、真菌感染の馬の薬の投与方法なども見させてもらった。薬の種類など分からない時は質問すると丁寧に教えてくれた。発音がうまく聞き取れない時はメモにスペルを書いてももらった。

午後からは診察が沢山入っていたので見させてもらった。こちらの病院は学生が問診してから裏で先生と治療法を相談してカルテを書いていて、初日なのにみんな堂々と問診していて驚いた。学生が診察のときは「一緒に来る?」と声をかけてくれた。レジデントの先生も質問はあるか尋ねてくれたり、検査の前は声をかけてくれたりした。飼い主さんも「頑張っ

た。

夜はなんと先生がサプライズでアメフトの試合観戦に連れて行ってくださった。Tomo 先生一家と Will と "Colts" という地元のチームの試合を観戦した。初めてのアメフト観戦だったがすごく盛り上がり、本場の空気も感じながら楽しむことができた。

8/21(火)

この日は小動物外科の予定だったが、眼科のオペを見たかったので眼科に変更した。レジデントの先生も向こうから話してくれるようになり、「あら今日も来たのね！今日は白内障のオペがあるわよ？」と教えてくれた。前日渡したお土産のばかうけが好評だったらしく、お菓子の名前を尋ねられた。2 日間でファミリーパックが空になった。歌舞伎揚げやばかうけなど醤油系のお菓子が美味しいみたいだ。

朝から白内障の超音波水晶体乳化吸引術のオペを見させてもらった。眼科のオペを見るのが初めてだったが、こちらから質問をすると、術者ではない先生が隣に座って向こうからも色々解説してくれるようになり理解することができた。オペはシニアクリニシャンがレジデントに教えながらやっていた。

午後からは診察を見させてもらった。まず学生が問診と軽い検査をし、そのあと診察室の裏でレジデントに問診での情報を伝える。レジデントがそれに対するアドバイスを言ったあと実際にもう一度検査して状況を説明し、最後にシニアクリニシャンが検査して方針を決めるという方法で行っていて、学生が患者と密に関わり実際に治療も考えられるいい方法だと思った。

翌日オペを受ける子の診察では飼い主に麻酔の説明をしたり、もし心臓が止まったときの対処法を選んでもらったりしていた。飼い主が不安そうになっていたが、先生が安心させていて飼い主の精神的ケアも必要だと感じた。

その後は山羊の眼の検査を見たり、馬の腫瘍の超音波検査を見たりした。

眼科は眼に特化しているため全ての動物が対象であり、幅広く深い知識が必要なのですごく大変だがその分面白そうだと感じた。

夜はハンバーガー屋さんをはしごしてみんなで乾杯し帰宅した。

8/22(水)

前日眼科の先生にお礼を言うと「明日は来ないの？」と言ってくれ、昨日預かった子の白内障のオペも気になっていたので結局この日も眼科に変更した。オペは昨日と同じ方法だったが、今回は両目だった。ハイスピードで進んでいき、午前中で両目すぐ

に終了して驚いた。先生が手術だけに集中できるように、麻酔科医の存在は本当に大きいと感じた。

午後は診察を見させてもらった。診察では先生が検査をする際にライトを点けたり消したりするのを頼まれ、手伝わせてもらった。よく動く犬は検査を素早く行わないといけないため、テクニックと飼い主とのコミュニケーション力が必要だと実感した。レジデントの先生が診察が終わるたびに質問があるか尋ねてくれ、質問すると丁寧に教えてくれた。

前日オペした子の ICU での管理、当日オペする子の麻酔のチェック、オペ、オペ後はすぐに診察で小動物と大動物の病院を行ったり来たり、その間も ICU での術後管理をしなければならず、先生や学生は本当に忙しそうだった。

翌日からは内科の予定だったのでレジデントの先生に眼科での最終日だということを伝えお礼を言って少し話した。「小動物に進むのね？素敵な獣医さんになるように祈っているからね。」と言われたことがすごく嬉しく心に残っている。

夕方からは学内のバーベキュー場で学生や日本人の先生方や学部長と夕飯を食べた。

ハンバーガーを食べたり、日本から持って行った水風船でゲームをしたりした。こちらで働かれている日本人の先生に海外で働くことについてなど色々お話を聞けてためになった。

8/23(木)

この日は小動物内科に行った。朝は診療の説明があり、先生が場所やタイムテーブルなど一通り説明してくれた。麻酔科で仲良くなった学生が丁度内科のローテーションだったのでその子につかせてもらった。

こちらでは生徒が患者の担当を持ち、ICU など全部自分で管理を行う。自分の作業もしつつ、1 時間ごとに様子を見にきて薬の投与をしなければならない。その子の担当の犬は、高齢で体の臓器がほとんど悪く、治療や薬の選択が難しそうだった。でも自分の担当の犬のことは自分で調べて自分で治療法を考えないといけなくて、先生に何度も再提出と言われていて大変そうだった。

午後は眼科で馬の扁平上皮癌のバイオペシーがあると聞いたので、見たくて結局また眼科にお邪魔した(笑)先生も「今日から内科行くとって言ってなかったっけ？笑」と言いながら笑って迎えてくれた。術者ではない先生が隣で説明してくれ、最後に凍結壊死させるクライオペシーというものは初めて見た。

夕方からは Tippecanoe Mall というショッピングモールに行き、ステーキを食べお土産や服を買った。

帰宅後は Lyft を使い Cactus というダンスクラ

ブに向かった。木曜日は学生が沢山集まるそうで、入るのに1時間ほど並んだ。すごい人で最初は緊張していたが、アメリカ人はみんな踊るのが好きで初対面の人ともみんなで盛り上がり、リズムにのるだけでも楽しくて、ダンスは言語なんて関係ないということを改めて実感した。本当に楽しくて先週も行けばよかったと後悔するほどだった。

8/24(金)

ローテーション最終日。8:00から病院の先生たち向けの整形のセミナーに参加させてもらった。珍しい動物のレントゲン写真なども見ることができて面白かった。ローテーションの予定は内科だったが、最終日だったので行ってみたかった他の色々な部屋にも行かせてもらった。

まず腫瘍学の部屋に行きCT検査を見させてもらった。CT画像内に大きな脂肪腫を確認することができた。その後は大動物で脚先に痛みがある馬の神経を切る手術を見た。CO₂レーザーを使い、どんどん神経が切れていくのが衝撃的だった。

修了式の時間になりそうだったので、仲良くなった学生のところや特にお世話になった眼科の部屋に挨拶に回り写真を撮ったりした。修了式では、事前にみんなで考えたスピーチを代表で山本くんが読んでくれ、修了書をもらった。そのあとは先生方や来てくれた学生と喋ったり写真を撮ったりした。

修了式のあとはモールやパデューグッズのお店に行ってお土産を買い足した。

夜はTomo先生宅でホームパーティーがあり、Tomo先生一家、Will一家やスタッフの方々が来てくれてタコスを食べたり、KaiやNamiと広い庭で遊んだりした。Tomo先生とWillには6人からの寄せ書きをプレゼントした。Tomo先生とWill以外はこのパーティーでお別れだったので、解散の時はすごく名残惜しく寂しかった。

帰ってからは部屋を片付け、お土産など荷造りして就寝した。

8/25(土)

朝からキッチンやリビングの片付けをし、Tomo先生とWillが迎えに来てくれ空港に向かった。空港で少しお土産など買う時間があり、そのあと検査をして搭乗手続きをした。Tomo先生とWillには本当にお世話になったので、お別れはすごくつらかった。

この日は雨と雷がすごく、乗るはずの便がキャンセルになってしまった。すぐにTomo先生に電話をしてどうすればいいか確認をとった。この後シカゴに行けたところでもう乗り換えは間に合わないので、インディアナかシカゴにもう一泊する覚悟でカ

ウンターに交渉に行くと、今日はとりあえずニューアークというところに行って一泊すれば、翌日の朝一の便で成田に帰れると言われた。しかしニューアークでの宿代は自腹と言われ、Tomo先生に伝えるとそれはおかしいと電話で訴えてくれ、なんとかシカゴ経由で羽田着の便で今日中に帰れるチケットに変更してもらえた。Tomo先生には感謝してもしきれない。

その後は大きなトラブルなく日本に着くことができた。どうなることかと思ったが、無事帰国できて本当によかった。

研修を通じて、日本とアメリカの大学や病院の違い、アメリカならではの沢山の良さ、生活、英語、様々なことを学ぶことができた。もっと専門英語を勉強していけばよかったと後悔もあるが、分からないときは英語でどんどん話しかける大切さも学ぶことができた。

Tomo先生、Willはじめこの研修に関わってくださった全ての方々に感謝します。本当に有難うございました。

新倉 勇貴 Yuuki NIIKURA

僕はパデュー大学では大動物臨床を中心に勉強しました。大学のあるインディアナ州ではペットとして馬を飼うことが一般的であり、患者も牛より馬の方が多かったです。歩行不良で来院することが大半でしたが、どれも見ていて勉強になり非常に面白かったです。その中でも特に興味深かった症例を選んで紹介します。

馬の疝痛で、前の週に小腸の一部を取り除いた症例です。今回の手術では、ほかの小腸の状態を確認し、場合によっては処置を行うものでした。腹部切開し、巨大な結腸と長い小腸を取り出して観察しました。結腸が解剖学で習ったものよりも大きく、あまりに大きいので一旦、別の台に置いていたのが印象的です。小腸の状態ですが、酸欠による青紫のような色を呈して少し膨らんだ壊死部が多く、結果としてはもう助からないという判断でした。縫合をする際には皮膚にメスで切り込みを入れ、そこに幅2cmほどのひもを通して縫い付けていました。

ほかに、歩行不良および蹄部の痛みを訴える症例ではCO₂レーザーを用いた神経切除術を見学できました。侵襲が少なく、時間がかからないというメリットがあります。手術室にいる全員がサングラスをかけました。馬にはサングラスをかけられないので、人口涙のオイルを点眼して目を保護しました。術後も歩行に支障はなく、痛覚刺激も遮断できるそ

うなので設備があると治療の選択肢も広がり、より良い処置が行えることを痛感しました。術部をメスで切開し、神経を筋肉から剥離したのちに木製のヘラをくぐらせます。この木製ヘラが下敷きとなることでレーザーからほかの組織を守り、神経のみを切断することができます。レーザーの照射中には、レーザー自体は見えませんが術者の手元からは煙が一筋立っており、すこし焦げ臭さも感じました。

アメリカの獣医大学では、通常の理系の四年制大学を卒業後に獣医大学へ入学ができ、獣医大学は四年で卒業になります。つまり、八年かけて獣医師免許を取得するのです。

実習中に接する獣医学生のほとんどが四年生でした。テクニシャンと呼ばれる動物看護師の学生は三年生もいましたが、どの生徒も僕より年上だったり、なかには結婚している学生もいました。

そして、四年生になると学生一人につき一つの症例を担当でき、飼い主への問診から入院時の体調管理など、その症例の一部始終を見る、あるいは行うことができます。また、週に一度か二度あるラウンドという、学生同士による症例発表があり、そこで自分の担当していた症例について、他の学生や先生たちに病態から原因、現在の体調や今後の治療方針などを説明、あるいは話し合いをします。

このように学生自身が、各々の症例を受け持つことで、よりその症例に対し深く学ぶことができ、治療法などの手技が身につくようになります。また、症例発表があるため、より病態を理解しようとし、治療プランを練ることで臨床的な獣医学知識の拡充と応用ができます。

学生たちは一週間ごとにローテーションで違う科に行きます。今週は腫瘍科で、次の週は眼科に行く、というような感じです。

非常に充実した二週間を過ごせたと思います。先進的な獣医療技術はもちろん、文化の違いや考え方など様々な点で勉強になることが多く、興味深かったです。大学の周りを上半身裸で走っている学生の集団を見かけることが何回かありましたが、それもきっとパデュー大学の文化なのでしょう。英語でのコミュニケーションは難しい反面、意思疎通ができたときの達成感は素晴らしく、パデュー大学の学生たちと交流することはとても楽しかったです。話す言葉が違うというだけの自分たちと同じ学生なので、笑うツボは似ていました。

僕が一番仲が良い Edris は頑張って 1 から 10 の数字を日本語で言えるように練習していました。指を折りながら必死に繰り返す姿が可愛かったですね。ディスコに連れていってくれたのも Edris で、お酒を入れた自分のカップから目を離すな、盗まれるぞ、と教えてくれたり、トイレに行く時も案内し

てくれたり、ボディーガードさながらでした。ディスコでは Edris のほかにも Kristal や Micah が連れてきた友達もいて、大勢で踊りました。最高に熱い夜でした。

彼らとは今後も連絡を取り、また一緒に遊びたいと思います。コミュニケーションにおいて重要なことは **Never Give up** だと教わりました。

動物園やフットボールの試合観戦、ショッピングモールなど、たくさん連れて行って頂きました。これだけよくしてもらえたのはパデュー大学の井上先生と William Smith さんの尽力によるものです。

今回の研修において大変お世話になりました、井上先生と William Smith さんの二人をはじめとした関係者のみなさまに感謝いたします。貴重な体験をありがとうございました。

福井 あみ Ami FUKUI

8/11 (土)

成田からシカゴへ行き、乗り換えてインディアナポリスへ向かった。計 13 時間ほどのフライトでとても疲れた。幸いにも飛行機に乗り遅れることも、ロストバゲージすることもなく無事に着けて安心した。インディアナポリスの空港にトモ先生と Will 先生が迎えに来てくださり、家へ向かった。家は一軒家でとても広く、綺麗で 2 週間の生活がとても楽しみのになった。

8/12 (日)

今日は朝食を食べた後にトモ先生と Will 先生に近所のコンビニやカフェを案内してもらい、Colombia Park Zoo へ行った。学内は小さな街のようで本屋さんや日用品を売っているお店、ボーリング場などもあった。動物園は日曜日ということもあって子供づれの家族で賑わっていた。続いて Target という大きなスーパーで食材の買い出しをした。どの商品もアメリカサイズで見ているだけでとても楽しかった。

夕食は学部長の先生や病院の先生方が食事会を企画してくださり、大きなステーキを食べた。ステーキが出てくる前の前菜だけでも結構お腹がいっぱいになった。

8/13 (月)

今日からクリニカルローテーションが始まった。はじめてのローテーションは Small Animal Surgery で、緊張しながら自己紹介をした。この日は予約が入っていなかったため、ラウンドという授業のようなものが行われた。内容は骨折に関するも

ので、モニターに映された文や図などは理解できたが、先生や学生が話していることはほとんど理解できなかった。事前にトモ先生や Will さんにわからないことがあればすぐに聞くように、と念を押されていたが勇気が湧かず実践できなかった。

Small Animal Surgery は午後は何もなかったため、Anesthesia に行くことになった。そこではちょうどインコの腫瘍のオペが行われおり、腫瘍は摘出できたがインコは亡くなってしまった。インコのオペはこの病院でも珍しいらしい。

8/14(火)

昨日に引き続き Small Animal Surgery を見学した。部屋に向かうとその日に新患で来る肘突起癒合不全についてのラウンドが行われた。その後学生について診察を見学した。パデューでは4年生の学生が問診を行い、一度預かって身体検査を行い、状態をレジデントに報告して再び飼い主と話し合うという流れだった。同じ学生とは思えないくらい、スムーズに問診を行なっていてとてもびっくりした。身体検査も一通り自分でやり、レジデントと再び教えてもらいながら行なっているのが印象的であった。また、カルテの記入も学生がしており、病院実習が実践的で日本とは大きく異なっていると感じた。

8/15(水)

今日は Small Animal Surgery でオペの見学をした。今日だけで4件もオペが入っていて驚いた。オペはレジデントが主体で行われ、教授が様子を見ながらアドバイスをしていた。この病院で最も驚いたことは、失敗しても周りの人があなたなら出来るよと声をかけてくれ何度でもチャレンジ出来ることだった。オペも早く終わらせることよりも、教えることに重きを置いていて誰もせかせかせしておらず、とてもいい雰囲気だった。

夜はトンプソン先生のお宅で community practice の学生たちと食事をして一緒にゲームをした。先生の飼っているダーラとカーリーという犬がとても可愛かった。

8/16(木)

今日から新しいローテーションになり、Small Animal Community Practice へ行った。学生とは昨日すでに会っていたので、みんな声をかけてくれ、あまり緊張しなかった。午前は歯科のオペを見学した。ここでも学生が執刀しているのが印象的だった。午後は行動学の診察を見学させてもらった。普段は行動の診察を見る機会がないのでとても勉強になった。夕飯はユニオンにある puppinator というハンバーガー屋さんに行き、男子勢はお店で一番大きい

ハンバーガーを完食するタイムを競っていた。残念ながら去年の記録は超えられなかった笑。その後にボーリングをしたが、あまりいい記録は出なかった。

8/17(金)

今日も Community Practice に行き、診察を見学した。今日はローテーションの最後の日だったらしく、学生たちがみんな食べ物を持ち寄っていた。

8/18(土)

今日は State Fair というインディアナ州のお祭りに行ってきた。State Fair は農業や酪農に関するイベントで豚や馬などの品評会を行ったり、農業に関する様々な展示、出店や移動遊園地などがあった。最初に品評会を見学した。そこで賞を取った家畜は商品価値が上がるため、農家はこの日のために動物を育てているのだと教えてもらった。また、様々なイベントや展示が子供達の教育に役買っているらしい。屋台で食べた焼きとうもろこしがとても甘くて美味しかった。とうもろこしはインディアナ州の名産品らしい。その後に移動遊園地に行き、乗り物に乗って楽しんだ。

8/19(日)

今日はインディアナポリス動物園に行った。最初に動物園の病院を見学させてもらった。大きな動物から小さな動物の治療に対応できるように様々な工夫がされていた。次にシロサイの飼育場所のバックヤードへ連れて行ってもらい、初めてサイを触った。皮膚がとても硬かった。続いてゾウのバックヤードへも連れて行ってもらった。飼育員さんの指示に従って様々なポーズを取っていて本当に利口なんだなあと感動した。動物園内には小さな水族館も併設されていてとても広く、見応えがあって楽しかった。

8/20(月)

今日は予定を変更して cardiology へ行った。今日から学生のローテーションが変わるらしく、自己紹介などもあって少し緊張したが、みんな優しく、安心した。今日は初日ということもあって患者は少なめだったが心エコーや心雑音の聴取など普段なかなかできないことを見学できてとても楽しかった。循環器は前期のテスト範囲で勉強したのでとてもいい復習になった。

夜は blue and white day という予定があった。Will やトモ先生に聞いてもサプライズだと言って教えてもらえず、現地に連れていかれたらアメリカンフットボールの試合だった。アメフトは初めて見るのでルールを理解するのが難しかったがなんとなくわかってくるととても楽しんで見れた。この時期

はシーズン前でインディアナポリスで試合があるのはとても珍しいらしく、ラッキーだと言われた。

8/22(水)

昨日に引き続き Anesthesia に行った。今日は整形外科のオペが多く、最初に股関節置換術が行われていた。私たちの病院ではあまり行われない手術なのでとても興味深く、見学していてとても勉強になった。その他では椎骨固定術などが行われていた。ローテーションが変わったばかりなのでベテランの看護師さんが学生に指導している姿が印象的だった。また、初めて食道聴診をして思っていた以上に聞こえたので感動した。

ローテーションが終わってから、先生方や PVM の学生達と BBQ を行なったが、日本の BBQ とは異なっていた。肉を焼くのではなく外でハンバーガーやホットドッグをみんなで食べ、ゲームをした。

8/23(木)

今日から Ophthalmology に行った。今日は診察と馬の間質性膿瘍のオペが行われた。眼の中にはすでにドレーンが入れられており、術前に投薬の処置が行われていた。オペの内容としては眼を切開し、溜まっている膿瘍を掻き出していた。大動物では、ペットとして飼われている馬が多くて驚いた。

8/24(金)

今日も眼科行った。今日はオペがなく、診察のみだった。診察は再診患者さんで投薬処置の結果、経過は順調なようだった。今日は最終日のため、ローテーションは午前までで、お世話になった先生や学生たちに挨拶をして修了セレモニーへ向かった。セレモニーには先生方や仲良くなった学生たちが集まってくれ、終了のスピーチや写真撮影をして軽食を取りながら話をして楽しんだ。この日は夕方からトモ先生のお宅へお邪魔してみんなで食事をしたり、遊んだりしてとても楽しい時間を過ごした。

8/25(土)

朝から天気が悪く、乗る予定だった飛行機が欠航となってしまった。トモ先生や Will がなんとか航空会社の人に交渉してくれ、6 時間遅れで無事に日本に着くことができた。普段自分たちがいる環境とは大きく異なり、有意義な時間を過ごすことができた。

平島 達也 Tatsuya HEISHIMA

今回のアメリカ、パデュー大学の研修を通して、

獣医と社会の関係性における日本とアメリカの違いを学ぶことができました。

パデュー大学はアメリカ、インディアナ州のウェストラファイエットに創立された総合大学で様々な学部が生徒が 10.01km²の広いキャンパスの中で共に切磋琢磨しています。キャンパス内には 65,000 人収容できるフットボール・スタジアムや大学が運営する本格的な飛行場など日本の大学とは規模が違うなど感銘を受けるものばかりでした。いつもは 3 学科のみのキャンパス内で過ごしているので、このような様々な学部、学科の人達と刺激しあいながら大学生活を送れることは素晴らしいことだと感じました。獣医学部の校舎は広いキャンパスの中でも一番南に位置しています。獣医学部の校舎は動物病院と実習室、講義室が全て同じ校舎にあり、動物病院は大動物と小動物の診療エリアが繋がっているといったものでした。

アメリカの獣医学部は 4 年制ですが、獣医学部への入学条件としてある一定の必須単位を取得する必要があります。つまり、獣医学部に入学する前に、他の学部を卒業する必要があるため、高校を卒業してから獣医師になるまでに 8 年かかります。しかし、獣医の分野を学ぶ期間は 4 年間なので、私たちよりも過酷な状況で学んでいます。また、カリキュラムとして 3 年間講義、実習を行ったのち、最後の 1 年間は病院で実践的に実習を行います。日本獣医のような研究室制度はなく、どちらかというと医学部に近いカリキュラムで行なっていました。そして、今回の研修では 4 年生の方達にサポートして頂きながら研修に取り組みました。4 年生の実習はとても実践に近く、例えば問診から検査、診断まで一人で行います。先生はそれぞれの項目ごとに最終的な判断と助言をし、生徒はそれを踏まえて飼い主に診断を伝えます。とても実践的であり、生徒自身で考え、言葉にすることはとてもレベルが高いことだと思います。また、生徒が治療を進めていくことができる環境を作り出せるのは飼い主の理解が必要不可欠なことであるので、アメリカにおける大学の動物病院に対する認識が日本と大きく異なっていると感じた点でもありました。また、学生を支えるのは先生だけでなく、インターンやレジデント、テクニシャンといった人達の助けが大きい事に気付きました。アメリカでは大学を卒業してからもインターンやレジデントとして大学でさらに獣医学を学ぶ人も多く、そのための体制も整っています。テクニシャンは日本で言う動物看護師に当たる人で、アメリカでは国家資格があり、採血などの医療行為を獣医師の指導無しで行うことができます。そのため、テクニシャンはより幅広く獣医師をサポートすることができ、獣医師は診断により一層集中して取り組むことがで

きます。つまり、先生以外にも多くの人達が医療現場に携っているため、学生が実践的に学ぶ環境を作り出せているのです。

現在日本の獣医では CBT や OSCE などより獣医学生が実践的に学ぶための環境を整えようとしている最中です。今回の研修を通して、実践的な実習を実際に見ることができ、今日本の獣医学教育が目指しているものはどういった物なのかを間近で見ることができたのではないかと思います。しかし、それを実際に実現していく為には多くのことを変えていく必要があります。大学が獣医師を作るための教育だけでなく、卒業してからの教育機関としての部分もより一層強化する必要性があること。また、獣医医療に携わる獣医以外の役職の人達の環境を整えることも必要です。大学の動物病院のあり方を社会に認識してもらうことも、実現する為にはしていかなければならないと思います。獣医学教育の現場が変化していく中で、今後卒業して自分はその変化をどのように捉えるのか、この研修で経験したことは必ずそれを考える上で役に立つものであったことは間違いありません。今回の研修を通して今後起こりうる様々な変化を日本の中だけの視点ではなく、世界と見比べてどうなのか、今後どのようにするのか、広い視点で物事を捉えることができるようになりたいです。

また、今回の研修では様々な症例を見せていただきました。今回の研修で私は 7 の専科を見学させて頂きました。

最初に、研修したのは小動物のコミュニケーションプラクティスというところで、主に小動物の一般内科やエキゾチック動物を取り扱う現場でした。ここでは、インコの腫瘍の手術や、スカンクの問診などを行っていました。また、この大学の動物病院ではとても多くの専科が存在するため違う科と合同で治療を行うことも多々ありました。コミュニティープラクティスでは行動学と共同で治療を行うことがありました。その時の患者は、知らない人が家を訪れるとその人に噛み付いてしまうという症例でした。治療方針としては訪問者が来た場合は別室でトリーツを与えることで、訪問者が来たら別室に行くという行動を慣らせるというもので、次第にトリーツがなくてもできるように躡けるという方法でした。

次に研修したのは、外科でした。外科では PSS やサルコーマ、胃腹壁固定、去勢、短頭種症候群における外鼻孔拡張術、軟口蓋切除術、うさぎの骨折を見学することができました。今回の見学ではアメリカの滅菌の雑さに驚きました。手術の前の消毒や、器具を出すところなど心配になる点が多々ありました。また、日本でもやられているところはあると思

いますが、去勢や避妊、胃腹壁固定などは腹腔鏡を用いて行っていました。うさぎの骨折では創外固定を行っていました。しかし、ロッドやクランプは重いのでうさぎには使用できないため、石膏を使って行っていました。

循環器科に研修した際には、救急科と合同で心室頻拍の猫の治療に参加しました。モニター上では心拍 200 前後で、P 波は消失、波形延長、心室期外収縮が連続して出現していました。このままでは、心室細動に移行する危険な状況でした。β ブロッカーの投与により状態は徐々に回復し、一命を取り留めました。後で先生に聞いた話では、肥大型心筋症の猫であったことが分かりました。また違う症例では、心房細動からペースメーカーを設置する手術が行われていました。頸静脈からカテーテルで心臓にペースメーカーのコードを伸ばし頸部に本体を埋め込むというものでした。初めてペースメーカーを埋め込むところを見たので、とても感動しました。パデューには神経科と併設で PT というリハビリテーション専門の専科があります。そこではレーザー治療や、鍼治療、ウォーターバスなど様々なことが行われていました。私が見学したのは関節炎のラブラドルのリハビリテーションでした。

大動物での研修では馬の跛行、羊の寄生虫疾患、豚の避妊、蹄葉炎の治療を見ることができました。馬の跛行の治療では歩行テストを行います。左前肢に痛みを生じている症例では、左前肢を地面につけると首を上げるそうです。治療は鍼治療が行われていました。羊の寄生虫疾患では貧血と脱水を起こしており、輸血が必要な状況でした。目に寄生した症例では抗生剤の投与を行っていました。蹄葉炎では蹄そのものを切断する手術が行われていました。レントゲン像で骨が溶けている像が観察されたため、骨にまで感染が生じていると判断されたためでした。

今回の実習では様々な症例を見ることができ、そしてアメリカの大学病院における治療の進め方を体感することができとても良い経験になりました。

今回の研修では、休日に動物園内にある動物病院の見学や、ステイトフェアという地元の農業祭、アメリカンフットボールの観戦などさせて頂きました。どれも貴重な体験で、アメリカの文化を身近に感じることでできる良い経験をすることができました。動物園では象やサイに触ったり、特別サイズの医療器具を見ることができ驚きが沢山ありました。

8/13

10時から眼科の診療を見て回りました。英語での会話に苦戦し、アプリの翻訳機能を駆使しながら理解しようとしていました。レジデント2人に学生が3人いて、そのうちの1人について診療を見て回りました。まず最初に馬の眼の検査を見ました。基本的には北里大学と同じようにスリットランプ、フルオロ、眼底検査などを行っていました。そして最後に病理学検査にだすための採材を行なった。

2件目は眼圧が上がっている犬の診療を見ました。眼のエコー検査をして他に異常がないかを確認し、飼い主に説明していた。

初日ということもあり、非常に緊張をしていたが、どうにか学生とコミュニケーションをとりながら頑張った。

8/14

2日目は眼科のオペを見ました。午前中にしたオペは白内障でした。両目を行い、かかった時間は2時間ほどでした。出血がほとんどなかったことが驚きでした。丁寧でありながらスピーディーにオペを行ない、さらにレジデントに教えながら行っていた。客観的に見てすごい雰囲気の良い空間でオペを行なっているなど感じました。麻酔は麻酔科が担当し、器具出しは看護師がやっていたので無駄のない連携がとれたオペだと思いました。

学生は手伝うことはほとんどなく、見ながらメモを取っていた。

8/15

眼科を見て回る最後の日でした。真菌による角膜潰瘍の馬を見た。馬の留置針は頸部のとこに刺してあり、学生が二種類の薬剤を注入していた。入院したしている馬であり、もう少し様子を見るとのことであった。

午後からは内科を見て回った。尿結石で来院している犬であり、まずは学生が問診を行なって情報を聞き出していた。その次にレジデントの人にその内容を伝え、どういう方針で検査や治療を行なっていくかを話し合いやる項目を決定してから、先生にその旨を伝え大丈夫のようであれば、飼い主に学生とレジデントが内容を伝えていた。1人の患者に対してものすごく時間をかけていたのに驚いた。飼い主はそれを理解しているのかと学生に尋ねると、大学は学生を育てる場所であることを飼い主が理解をしたうえで来院していると言っていた。日本の大学との違いを感じた1日であった。

8/16

内科を見て回った。9時からのラウンドに参加し、その時の議題はクッシング症候群についてであった。学生が積極的に質問をしていてすごい驚いた。ヨーロッパや日本での診療を例に出しながら説明していて有意義な1時間だと思った。

また今日も学生について問診をまわった。最初の症例は慢性の咳での主訴で来院していたオーストラリアシェパードであった。学生の問診はすごい慣れている感じであり、非常に勉強になった。内視鏡でバイオプシーを試みて診断を行なった。後日それはマイコプラズマであることが判明した。内視鏡を生で見るのは初めてであり、色んな質問をしたがすごく丁寧に教えてくれた。

8/17

今日は大動物の往診に行った。日本のイメージだと牛がたくさんいる牧場に行くイメージであるがアメリカでは、馬を飼っている牧場が多く、馬の往診がほとんどであった。1件目は斜歯の馬の治療を行った。学生も歯を削るのを手伝っていたが、すごい大雑把に見えた。でもしっかりと治療を行っていて、すごいなと感心した。ついでにヤギの角を削り取るのも行っていた。往診用のトラックはキャンピングカーのようになっており、道具が充実しており、様々な治療を行えるようになっていた。テクニシャンという男の人が車を運転し、保定などをしていて。やはり女の獣医さんということもあり、テクニシャンは男の人である方がいいんだと思った。

2件目はロバの左前脚の感染症の具合をチェックしていた。三件目は馬の骨折の具合を確認し新たなバンテージを巻いていた。

昼ごはんは新しくオープンしたカフェで先生がおごってくれた。アメリカらしさを感じた1日であった。

8/18

インディアナ州のstate fairに行った。州をあげた祭りということもあり、人であふれかえっていた。馬や犬、豚の品評会が行われていて、日本ではなかなか見れないなと思った。出店が多数でっており、ここでしか食べないラム肉やドーナツハンバーガーなどがあり、どれを食べようか迷うほどであった。移動式遊園地で3時間遊んだ。回る系のアトラクションが多く最終的に酔った感じになり気持ち悪くなった。アメリカの雰囲気を感じるお祭りであった。

8/19

インディアナポリスにある動物園に見学に行っ

た。裏側を見ることができ、診療の充実さに驚きました。人慣れをしているサイやゾウともふれあい、初めて触ったがとても硬く不思議な感覚だった。午後は自由に動物園を見てまわりました。日本では見られないような動物もいた。イルカショーも見ましたが、日本と違って一緒に泳いでの演技はなかった。この日はとても暑く、歩くだけで疲れました。

8/20

今日は腫瘍科をみてまわった。かなり末期の患者が来ることもあり何かと忙しい印象でした。抗がん剤治療はVTさんが行っていた。1日を通して寿命を延ばす治療が多く、いかにQOLを上げるかを考えているとおっしゃっていた。腫瘍科にいたVTさんがすごい親切でとても居やすい場所だった。採血の仕方など学生に教える時もすごく丁寧に学生ができるまで根強く教えていた。良い環境だなーと思った。夜はアメリカンフットボールを見に行った。

どこに行くのか日程には書いてはなかった、青い服か白い服を着てこいとしか言われなかった。どこに行くのだろうと思っていたが、まさかアメリカンフットボールの試合を見に行くとは想像してなかった。初めて試合を見てすごい興奮した。またいつか見る機会があれば見たいなと思った。

8/21

今日は行動科をみてまわった。行動科の先生は日本人の先生だったので日本語で説明してもらったので、とてもわかりやすく理解できた。助手のイスラエル人の方も親切で、どういう風に問診をとっているのかなど丁寧に教えてくれた。この日は診察はなく症例の説明だけだった。日本で習ったことと同じようなことを症例の説明で先生が話していたので英語であったが理解はかなりしやすかった。症例の説明が終わった後、日本人の先生と1時間近く話しました。とてもためになる話だったので、刺激を受けました。

8/22

今日の午前中は循環器科を見学した。診察はなく症例検討を学生も含めて行っていた。心電図を見ながら学生が話し合い最後に先生が説明するという形で進めていた。専門英語がすごく難しく、理解が追いつけなかったが、最後に先生がGoogle翻訳を使ってわかりやすく説明してくれた。午後は内視鏡をみた。マイコプラズマの疑いがある犬でその確定診断を行うための採材として気管支洗浄を行うとのことでした。はじめて気管支を見ましたが、すごい複雑な構造をしており面白かった。学生も手伝っていたが、操作がとても難しそうだった。いつか内

視鏡をやってみたいなと思った。

8/23

今日は腫瘍科や外科をみてまわった。スコットランドから研修に来ていた学生について診察を行った。英語もペラペラだったので何となく診察をしているのをみて改めて英語を勉強しなきゃなという気持ちになった。担当した犬は脂肪腫で来院しており、精密検査をいろいろと行なってどういう治療をして行くのかを飼い主の人と先生が話し合っており、手術をすることが決定した。今日の腫瘍科はなぜか脂肪腫での来院が多かった。最後に見た犬は骨髄腫と甲状腺腫を患っている犬でとても苦しそうな顔をしていた。このケースは珍しく、色んな先生がCTを見に集まっていた。この犬は寿命がもっても3ヶ月程度だと先生はおっしゃっていた。

8/24

今日は最終日でどこの科を見て回ろうかなと考えていましたが、やはりいつも親切にしてくれていたVTさんがいる腫瘍科に行くことにした。今日が最終日なんだというとても悲しそうな顔で別れを惜しんでくれた。午前中だけクリニカルローテーションだったので、あまり症例を見ることはできなかった。スコットランド人と話す機会がありBSAVA Small Animal Formularyという本がとても腫瘍の治療には役立つからおすすめだと言っていた。

将来買おうかなと思った。午後は表彰式が行われた。代表としてスピーチしましたが、英語の発音がいまいちだったので通じていたのがすごく不安でした。賞状をもらえたことはとても嬉しかった。

8/25

今日帰国した。帰りの飛行機はトラブルがあり、急遽ニュージャージー州に行くことになりそうでしたが、なんとか羽田空港行きの便がとれその日に帰ることができた。飛行機の中ではこの2週間を振り返りながらぐっすり寝た。この研修を通していろんな人と英語で会話をし、同じ獣医学生の友達も増えお互い切磋琢磨していけたらなと思った。この繋がりを大切にしていきたい。

総括

この2週間を通して感じたことは、英語力がまだまだだということを思い知らされました。もっと英語を理解する力があればと思う場面が何度もありました。英語を勉強しなければという気持ちにさせてくれました。また、パデュー大学の学生の質の高さと熱心に勉学に励む姿には感化させられました。仲良くなった学生と将来獣医師としてまた会う機会

があれば、いろんなことを話してみたいなと思いました。このつながりは大切にしていきたいです。そして、VTさんや獣医師の人たちが学生にできるまで教えていたことにも感動しました。学生が何度失敗しても丁寧に教えている姿は、自分の大学ではなかなか見られない光景でした。学生が成功すると「great!!beautiful!!」といって褒めていました。このような場面はアメリカならではだなど感じました。BBQやホームパーティーに来てくれた学生はとても親切で楽しい人ばかりで、ゲームなどをするととても盛り上がりました。学生の1人が誘ってくれたDiscoにみんなで行ったときは、楽しすぎて踊りまくり飲みまくりました。LGBT祭にも行き、日本ではなかなか見ることでできないお祭りで刺激を受けました。クリニカルローテーション以外にもこのような楽しいイベントがありアメリカを堪能できました。スケジュール管理や休みの日にいろんなところに連れて行ってくれたトモ先生やWillにはとても感謝しています。本当にお世話になりました。この研修を自分の将来に生かせればと思います。

若山 夢歩 Yumeho WAKAYAMA

8月11日(1日目) 出発日

見送りに来てくれた双子の妹と一緒に成田空港に向かい、最後の日本食を食べてみんなと集合した。飛行機ではたくさんの映画が見られたが、気づいたら寝てしまっていて軽食のサンドイッチを食べそびれてしまった。夕食はチキンかパスタを選ぶことができ、チキンを選択したらまさかの鳥井で、ここでも日本食を食べることができた。インディアナポリス空港に着くとトモ先生とウィル先生が出迎えにきてくれていた。とても面白い方達だった。学校まで車で送っていただき家に着き、部屋を案内してもらった。リビングが2つあり寝室もとても広かった。夜ご飯にチーズが沢山入ったサンドイッチが用意されており、チーズ好きの私にはとても嬉しかった。明日の動物園がとても楽しみだ。

8月12日(2日目)

朝食を食べ、トモ先生とウィル先生から2週間のオリエンテーションを受けた。パドゥー大学の学生と同じようなIDカードと大学の名前入りのTシャツをいただいた。大学の周辺のお店やフードコートを紹介してもらった。食べ物や飲み物のサイズは、日本とは比べ物にならないくらい大きいものばかりでたくさんの発見があった。お昼はピザを食べた。チーズがたっぷりだったが、生地が薄かったため思ったよりも食べることができた。昼食後はラファ

イエットにある動物園を訪れた。たくさんの蝶々が展示されていたり、ヤギとのふれあいコーナーもあった。カワウソのコーナーでは、水中トンネルがあり泳いでる姿を観察できた。想像していたよりも体長が大きくて驚いた。動物園のあとはターゲットという、大きなスーパーマーケットに連れてってもらった。日本の洗濯洗剤のような形をした牛乳やオレンジジュース、バケツに入ったアイスクリームなどアメリカな食材を沢山買った。夕食はウェルカムパーティを開いていただき、パドゥー大学の先生方とステーキを食べた。日本のステーキとは違い、とても肉肉しかった。お肉よりも付け合わせの野菜とベイクドポテトの方がボリュームがあり、完食することが出来なかった。食後には先生方からのケーキも用意されていたが、バタークリームの重さと甘さにやられてしまった。

8月13日(3日目)

今日からいよいよ病院研修が始まった。初めに病院内を案内してもらった。とても広く、沢山の科に分かれており迷路のような造りになっていた。今日は腫瘍科を見学した。お腹に腫瘤があるかなり重症の猫の検査を行った。首から採血をし白血球数を測定する機械で白血病ではないかの検査をしていた。結果は正常だったため、他の原因を探るためこれから精密検査を行うとの事だった。次の患者は新患者で、簡単な診察は待合室で行われた。目が白く、白内障が疑われるが、腫瘍の可能性もあるため腫瘍科を受診していた。

次にほかの犬に噛まれた犬が来院した。エコーで全身を検査し、噛まれたことによって骨が折れていないかレントゲン撮った、特に異常はなく、傷口を洗浄していた。腫瘍科だけではなく、心臓内科の患者を見ることができた。心房ブロックを発症している犬で、ペースメーカーを心臓に入れており、そのペースメーカーの動きが良好か検査、浮き輪型の機械を首に当てて検査していた。ローテーションの後は学校から案内してもらった。大学が1つの町のように広がった。夜はyummy martという日本と韓国の料理屋さんに行った。スンドゥブを食べたがとても辛くて美味しかった。英語を喋れるか、聞き取れるかの不安と時差ぼけで1日目は疲れがどっと出た。

8月14日(4日目)

今日は腫瘍科のローテーションを行った。朝はセミナー室で今日の予約の患者情報を獣医師、看護師、学生皆で確認した後、肥満細胞腫についての講義が行われた。英語が早く、あまり理解することができなかった。

予約の患者から診察を開始していた。一件目はリンパ腫のため抗がん剤治療を続けていたが、飼い主の希望で最後の抗がん剤治療に来ていた。抗がん剤はビンクリスチンを使っていた。二件目は抗がん剤治療のために来ていた犬の診察だった。気絶してしまったため神経に異常が出ていないか、神経検査を行っていた。内容は日本の検査方法とほぼ同じだった。三件目は再検査のため来院したリンパ腫を患った患者だった。好中球が減少しb細胞リンパ腫であるため、身体検査をした後抗がん剤治療を行った。四件目は咳や熱などの、風邪の様な症状を示していた患者だったがエコー検査で腫瘍が疑われた。手術はせず、内科的治療を飼い主が希望していたため、抗がん剤治療を継続していたという。治療後エコー検査によって腫瘍は小さくなってたことがわかった。五件目は後脚に腫瘍を患った大きなラブラドルが来たかなり大きい腫瘍で大きさをcc.dv.mlの三方向から測定していた。転移してしまったため、鼠径リンパ節も大きくなっていて。見つかった時には既にグレード2で今はグレード4に進行してしまっていた。肝臓や脾臓にも転移が見られ、完治は厳しいため内科的治療を継続するとの事だった。飼い主への説明を特別な部屋で行っていた。一般的に安楽死を行う部屋だと言っていた。ソファなどがあり犬の写真などがたくさん飾られていた。

8月15日(5日目)

本来は腫瘍科のローテーションだったが、理学療法と神経科を見学したく、変更させてもらった。このように、興味のある方があれば見学する科を変えさせてもらえた。左後肢の膝を骨折したラブラドルがリハビリのため来院した。15分間ほど水中の中でウォーキングし、3分歩いて休憩とりまたウォーキングを繰り返していた。たまに疲れてしまっただけで歩くのをやめてしまうことがあった。聴診器などで興味を引いて歩かせていた。ジェットバスを使う事で負荷をかけることができるという。二件目は椎間板ヘルニアのリハビリ来たダックスフンドだった。コーンを立てて、そこをクロスするように歩かせていた。お菓子の匂いを嗅がせてついて来ようようにしていた。うまくできたらたくさん褒めて、おやつをあげていた。三件目の患者もダックスだった。首を損傷しており痛み止めで治療していたが、ベントラルスロット（頸椎腹側減圧法）という手術を行うことになった。飼い主に説明をして、その日は入院した。次の日に手術だったため、見学させてもらったが手術室の無菌エリアには入れないため、術野は見ることができなかった。診察が全て終わってしまったため、午後は内科を見学した。腹部内視鏡を用いて生検を行っていた。十二指腸

はとても腫れていた。最初胃に毛玉がたくさん見られそれが原因かと思ったが、それは関係なかった。猫のグルーミングによるものだった。鉗子で空腸、十二指腸、胃を生検、先生が内視鏡を操作し、学生が鉗子を操作していた。2年前に嘔吐が見られアレルギーかと思って食事を改善したが、再発したため再検査のため生検を行っていた。今のところIBDやリンパ腫が疑われるとの事だった。これから採取した組織を検査して結果を待つと言っていた。夜はトンプソン先生のお家でホームパーティを開いていただいた。みんなでハンバーガーを作ったり、色々なゲームをして学生の方々と仲良くなることができた。とても楽しい夜だった。

8月16日(6日目)

今日は麻酔科のローテーションを行った。日本では術者や助手が麻酔管理をするが、アメリカでは手術の際、麻酔者が必ず1人つくようになっていた。これにより術者はより手術に集中することができるという。麻酔係は体温、血圧測定し、心拍やパルスパソコンに入力して折れ線グラフにしていた。手術中、食道聴診器というものを使用していた。術野が有菌の麻酔領域と無菌の手術領域にセパレートされているため、無菌的な場所で直接心臓に聴診器を当てて聴診することができない。そのため食道聴診器を使用すると無菌的に心拍数を測定することが出来るという。また、ドップラーが聞き取れない患者に対しても有効であると言う。二件目の手術は麻酔科の学生の犬だった。避妊手術と胃固定を行っていた。胃固定とは、胃を腹壁に固定する事で胃捻転を防ぐために行う手術である。開腹はせず、お腹に小さな穴を開けそこから内視鏡を挿入して手術を行っていた。もう一方の穴から鉗子を挿入し腸管を腹壁に押し当てて、外側の腹壁から針を通して胃を壁に縫い付けていた。その後、同様に鉗子を用いて卵巣を把持し糸を用いて腹壁に引っ掛けておき卵巣を血管、卵管から剥離していた。初めて見る方法だったので、とても驚いた。内視鏡を用いることで、患者に対する痛みも軽減できる良い方法だと思った。

8月17日(7日目)

今日は麻酔科のローテーションを行った。一件目は腕関節固定法を行う患者に対して神経ブロックとしてプビバカインをブロック注射していた。ブロック注射とは、痛む部分の神経付近に麻酔薬を注射することで痛みを取る方法である。二件目は2つの手術を同時に行うブルドッグだった。短頭種症候群である外鼻孔狭窄症、軟口蓋過長、喉頭小囊外転を発症しており、軟口蓋過長に対し軟口蓋に糸をかけて、牽引し一部を切り取り軟口蓋を短くした。

次に鼻にメスを入れて外鼻孔を大きくして、糸を用いて縫合した。次に尻尾にできた扁平上皮癌の摘出を行った。円形の癌に対し、大きく皮膚にメスを入れて癌との間を鉗子を用いて切開し、根元から癌を摘出していた。こうすることで、癌の部分と正常部が両方取れて、病理診断した際に完全に癌が取りきれたことが確認できる。摘出した腫瘍の方向を色をつけることで区別 dorsal(背側)は緑、ventral(腹側)は青、右側を黄色に染色し病理検査に回していた。三件目は整形の手術で上腕骨離断性骨軟骨症に対して、関節をスムーズに動かせるようにインプラントを入れたが、感染の原因になるとめ取り除く手術を行った。手術は午前で全て終了していたため、午後は色々な科を回った。小動物内科にいき、AIHA 疑いの患者に対して骨髓生検を行っていた。麻酔をかけ、上腕骨に対して針を刺入して骨髓を採取し、検査に回していた。次に救急に行った。P 波消失、QRS 延長、心拍数の上昇が見られ、貧血を示している猫が来院していた。心臓病を患っており心室頻拍を生じていた。そのため、心臓内科に移動し、心エコーを撮影し始めた。動物を横臥位にさせた状態で、下から心臓を触ることができるように穴が空いた心エコー用の診察台があり驚いた。抗不整脈薬である 2% リドカインを投与して、改善を図っていた。しかし、心停止が起これば心臓マッサージを開始した。緊急事態になっても、とても落ち着いた対応しており、冷静に対応することの大切さを学んだ。獣医師の先生たちの的確な判断により、患者は回復し安心した。治療後、心臓内科のグリーン先生に肥大型心筋症についてボードを使って分かりやすく説明していただいた。

8 月 18 日 (8 日目)

Indiana state fair に行った。お祭りでは馬の品評会やドックコンテストが行われていた。市のお祭りであって、とても規模が大きく迷子になってしまいそうなくらいの広さだった。インディアナポリスはトウモロコシがとても有名で、屋台で食べた茹でトウモロコシがとても甘くて美味しかった。会場には遊園地があり、ジェットコースターなど絶叫系の乗り物にたくさん乗ることができた。ジェットコースターは得意な方だったが、あまりの激しさに気持ち悪くなってしまった。お祭りから帰り、夕飯を済ませた後隣街で開かれていたダンスイベントを見に行った。ニューハーフの方々やダンスが行われており、とても綺麗でモデルのようなスタイルの方や迫力のあるダンスを見ることができた。久々の休日はお祭りにダンスイベントと、濃い 1 日となり時間があっという間に過ぎてしまった。

8 月 19 日 (9 日目)

Indiana 州の動物園に行き、病院の裏側を見学させていただいた。象や大型の動物用の酸素マスクや気管チューブ、酸素バックは通常のものとは比べると非常に大きく、動物の大きさに合わせて手作りしているものもあった。また、様々な動物種のレントゲン写真を見せていただき、亀やタツノオトシゴ、コウモリのレントゲン写真を見ることができた。病院内を案内していただいた後、象やシロサイと触れ合うことができた。象には実際に餌をあげることができ、鼻で食べ物を吸収する引力がすごかった。シロサイの肌は想像していたよりもザラザラと固かった。園内では、イルカショーを見ることができた。イルカはとても大好きだったが、まさか動物園で会えるとは思っていなかったのもとても嬉しかった。

8 月 20 日 (10 日目)

整形外科を見学した。人工股関節置換法を行っていた。大腿骨頭を骨切りし吸引して骨片をきれいに除去した後、大腿骨ステムを入れる穴を大腿骨に開けて、ステムを挿入し次に大腿骨頭の代わりを果たすボール、寛骨臼カップを取り付けていた。術野は無菌的なため、あまり近くで見ることができなかったが、使ってる器具などを詳しく教えていただいた。

病院研修の後はシークレットイベントが待っていた。服装の指定があり、青と白の洋服を着るとのことだったので、私は 18 番の背番号が書かれたサッカー日本代表のポロシャツを着て行った。目的地に着くと、そこはアメフトの試合会場だった。まさか本場アメリカでアメフトの試合を見られるとは思わなかったため、とても興奮した。青と白の意味はチームカラーだった。私はアメリカで JAPAN と大きく書かれた服を着ていることとても恥ずかしさを感じてしまった。また、18 番はマニング選手という引退したとても有名なクォーターバックの選手だった。ルールがあまりわからなかったが、その場で先生方に教えていただいた。

次の日もあるため、2 試合しか見られなかったが、また本場でみたいと思った。

8 月 21 日 (11 日目)

麻酔科を見学した。今日初めての患者はうさぎだった。うさぎは体が小さいため、とても体温が下がりやすく徐脈や無呼吸を生じやすい。そのため麻酔はとても難しいと言っていた。左橈骨を斜骨折しており、創外固定を行っていた。骨幅が 2.3mm ととても細く通常用いるロッドを使用すると、骨に大きな負担がかかってしまう為、ロットの代わりにチューブに樹脂を入れ軽くしたものを使用してい

た。患者個人個人の特徴に合わせた最善の治療方法を用いていると改めて感じた。失禁を起こしている子犬が来院した。TPRや体重を測定したがそれは正常であり、尿検査をし原因を探ると言っていた。次の患者は尿排泄が見られない犬だった。脳卒中により、尿が排泄できないためステントを設置して尿を排泄させる手術を既に受けていた。今日はもともと設置していた古いステントを取り除き、新しいステントを設置する手術を行うとのことだった。その手術も実際に見学することができた。ステントの設置は術中にレントゲンを撮影しながら場所を確認して行なっていた。また、膀胱から尿を採取し培地にまき細菌検査も同時に行っていた。術後管理では鎮痛薬であるフェンタニルを与えていた。診察を担当した生徒が、術後管理も行うようになっており実践的なことが学べる環境だと感じた。午後は内視鏡検査を見学した。CO₂分圧は48mm Hgで、呼吸障害を示していたため、気管支洗浄を行いその洗浄液を用いてマイコプラズマやバクテリア、肺炎の可能性を調べると言っていた。温めた生理食塩水を内視鏡の鉗子を挿入する部分からフラッシュすることで洗浄を行っていた。気管支支脈を内視鏡を通して見るのは初めてだったため、とても貴重な体験となった。

8月22日(12日目)

今日は内科のローテーションだった。ミーティングの後、血液性状が記された紙が配られ、どのような症状が考えられるかをみんなでディスカッションした。今回の症例は肝硬変が疑われる患者のものであった。その後予約の患者の診察についた。学生が1人で診察を行っており、とても驚いた。卒業後すぐに一人前の獣医師として診察におられるようにこのような実践的な取り組みをしていると言っていた。夜ご飯は先生方や学生と近くの公園でハンバーガーやホットドッグを作って食べた。パドゥー大学病院で働いている日本人の先生方ともたくさんお話しすることができた。

8月23日(13日目)

外科のローテーション1日目だった。まず腸管吻合についてのセミナーに参加した。先生がホワイトボードに腸管とその切除部位、周囲の血管の走行を示し、生徒にどの血管を結紮すべきかを質問形式にして議論していた。このように先生が一方的に教えるのではなく、生徒とコミュニケーションをとりながら教えるのはとても良いことだと感じた。

この後は、犬の鼓腸症の手術を見学した。まず腹壁に小さな穴を開けそこから内視鏡を挿入し胃のガスを抜いていた。その後は胃固定を行っており、

先日見た方法と同様の方法が用いられていた。合間の時間を利用し、歯科も見学した。歯科の専門医が常駐しており麻酔下でのスクレーピングやプラークを除去する作業を見ることができた。歯科の治療でも麻酔科医が1人付いていた。

8月24日(14日目)

今日は病院見学最後の日だった。午前中は心臓内科の手術を見学した。房室ブロックを発症している犬に対して、ペースメーカーを取り付ける手術を行っていた。心房から心室へ刺激が伝わらないために、鬱血性心不全や頸静脈の怒張を示していた。電気刺激を伝えるための導線を頸静脈、次に上大静脈に通して右心室へと到達させていた。正しい血管を走行しているかは、レントゲンを同時に取りながら確認していた。次に電気刺激発生装置であるペースメーカーを埋め込む作業を行うところだったが、修了式の時間が迫っていたため、手術を途中までしか見学することができなかった。しかし、ペースメーカー植込み術のような高度な手術はなかなか見ることができないので、とても勉強になった。修了式では、修了証やマグカップ、素敵なメモ帳などの記念品をいただいた。その後サンドイッチなどの軽食を食べて沢山の先生とお話することができた。昨日クラブで知り合った生徒とも話すことができて嬉しかった。夜はトモ先生のお家でホームパーティを開いていただいた。私の大好きなタコスが用意されていた。今日でもうお別れだと思うととても悲しい気持ちになった。

8月25、26日(15.16日目)

いよいよお別れの日がやってきた。2週間はとてもあっという間に過ぎてしまった。病院研修1日目はどうなる事かと不安でいっぱいだったが、トモ先生とウィル先生のお陰で、充実した2週間を過ごすことができた。朝早くから迎えにきていただき、2時間ほどかけ空港まで送って下さった。車の中ではたくさんの思い出話があった。お別れする実感が全然湧かなかったが、空港の搭乗口に着くと急に寂しさが込み上げてきた。最後にハグをし、たくさん手を振ってお別れした。シカゴ行きの飛行機に乗る予定だったが、天候の影響で飛ばず便が変更になった。無事に日本に到着した。今回の研修でアメリカと日本の獣医制度の違いや治療、手術方法の違いを身をもって感じる事ができた。

同行教員

獣医寄生虫学研究室 准教授

筏井 宏実 Hiromi IKADAI

2週間は短い時間でしたが、宿舎に帰ってくる学生たちの顔の雰囲気や会話などが日々変化し、成長しているのを感じました。本研修は学生たちにとって非常に刺激的で有意義であったように思います。学生みなさん、今回の研修の経験を忘れずに、これから活かしていただければと思います。You can do it !

Purdue 大学のスタッフによる手厚いサポートにより無事学生の研修が修了できたことに感謝いたします。特に、Inoue 先生および Smith 先生には動物病院の研修ばかりでなく、観光や日々の生活に関するサポートなど様々な面でお世話をいただき、深く感謝申し上げます。また、本研修にご尽力いただきました北里大学関係者各位には、この場を借りて御礼を申し上げます。

最後に、今後も Purdue 大学と国際交流が継続していくことを願います。

今回の研修スケジュールの概要について、以下に示しておきます。

Saturday, August 11th

Arriving at Indianapolis airport at 8:40 pm

Sunday, August 12th

9:30 am Breakfast & Orientation

11:00 am Downtown Lafayette or Chauncey Hill exploration

12:00 pm Lunch (on your own)

1:00 pm Visit Colombian Park Zoo

3:30 pm Walmart trip (Grocery Shopping)

5:30 pm Leave for 'Welcome Dinner' at Walt' Pub and Grill

6:00-8:00 pm Dinner Together

9:00 pm Return to the rooms

Monday, August 13th

7:30 am Meet Will Smith and walk to Purdue University Veterinary Teaching Hospital (PUVTH)

8:30-9:30 am Clinical Orientation meeting

8:30 am Dr. Inoue, will welcome students to the clinic and provide a brief overview of the two week clinical externship program

9:30-10:30 am Clinic tour by Purdue Students (get white coats)

10:30 -12:00pm Clinical rotation begins

12:00-1:00 pm Lunch on your own

1:00-3:00 pm Clinical rotation resumes

3:30-4:30 pm Tour of Purdue Campus

6:00 pm Dinner on your own & FREE time

Tuesday, August 14th

7:30 am Walk to PUVTH

8:00-12:00 pm Clinical rotation

12:00 -1:00 pm Lunch on your own

1:00 - 5:00 pm Clinical rotation

Weds, August 15th

7:30 am Walk to PUVTH

8:00-12:00 pm Clinical rotation

12:00-1:30 pm Lunch lecture with Dr. Thompson on Wildlife Conservation and Medicine

1:40 -5:00 pm Clinical rotation

6:00 pm Dinner with Dr. Thompson and family

Thurs, August 16th

7:30 am Walk to PUVTH

8:00-12:00 pm Clinical rotation

12:00-1:00 pm Lunch on your own

1:00 -5:00 pm Clinical rotation

6:30 pm Bowling within Purdue Union (with Purdue Vet Med Students)

Friday, August 17th

7:30 am Walk to PUVTH

8:00-12:00 pm Clinical rotation

12:00-1:00 pm Lunch on your own

1:40 -5:00 pm Clinical rotation

6:00 pm Dinner with Will Smith and family

Saturday, August 18th

9:00 pm Depart for Indiana State Fair

2:30- 4:30 pm Explore and Have Fun

5:30 pm Dinner on your own

6:00 pm Return to House

Sunday, August 19th

8:00 am Leave for Indianapolis Zoo

8:30 am-4:00 pm Indianapolis Zoo trip

12:00 Lunch on Your Own

4:00 pm Depart Indianapolis Zoo

5:30 pm Dinner on your own

Monday, August 20th

7:30 am Walk to PUVTH

8:00 am -12:00 pm Clinical rotation

12:00 -1:00 pm Lunch on your own
1:00 -5:00 pm Clinical rotation
5:30 pm Leave for Special Event-Wear Blue and White.

Tuesday, August 21st

7:30 am Walk to PUVTH
8:00-12:00 pm Clinical rotation
12:00-1:00 pm Lunch on your own
1:00 -5:00 pm Clinical rotation
6:00 pm Dinner on Your Own

Weds, August 22nd

7:30 am Walk to PUVTH
8:00-12:00 pm Clinical rotation
12:00 pm-1:00 pm Lunch/SCAVMA Shopping
1:00-5:00 pm Clinical rotations
5:00 pm Back to House
6:00 pm Purdue Village BBQ Cookout with students and faculty

Thursday, August 23rd

7:30 am Walk to PUVTH
8:00-12:00 pm Clinical rotation
12:00 -1:00 pm Lunch on your own
1:00 - 5:00 pm Clinical rotation
5:30 pm Tippecanoe Mall Shopping Trip

Friday, August 24th

7:30 am Walk to PUVTH.
8:00 am Check out of Purdue Village Cost
9:00 am-12:00 pm Clinical rotation
12:00-2:00 pm Farwell Ceremony
2:30 pm Return to House to pack and prepare for the journey home Leave
5:00 pm Dinner with Dr. Inoue and family
9:00 pm Return to House

Saturday, August 25th

Leave for the Indianapolis airport at 6:45 am
Escorted by Will Smith and Tomo

Acknowledgement

Thank you so much for two weeks, I want to thank all of the people who involved with us in this program.

There were a lot of things I never seen. I could

see many surgical operations and accompany a doctor who made a house call.

And I also enjoyed American culture and lifestyles.

It was fulfilling that I made plenty of things I could not usually experience.

I want to make use of this experience from now on.

Chika Koyama

My first visit to the United States has been very good thank to you. The 2weeks are unforgettable. I learned not only veterinary medicine but also a lot of things. For example, it is difficult for me to talk in English, but I noticed that I can communicate together without speaking good English. Because they are English specialist who understand my words. I was excited for the first time seeing the game of American football, and Will taught us the rule of football. I shouted as "First down !! ". It was very nice time. Thank you for driving to us late at night. Indianapolis zoo was very big zoo. We could see places I can not see usually. It was fantastic experience. Thank you Dr.Tomo and Will. I will go U.S.A to see you again. Take care !

Yuuki Niikura

Thank you very much for 2weeks! I enjoyed a lot of things that I can't experience in Japan. I wish I could have to stay longer.

I was very nerves for the first time because I'm not good at speaking and listening English. But, everyone in the hospital were kind to me, so I was relax and able to actively participate in rotation.

Especially, I would like to Thank Dr. Tomo, Mr. Will, their families, Chelsi and Danni ! Thanks to them ,I have lots of memories that I'll never forget in this visit. Also, I would like to thank everyone at Purdue University to give me precious opportunity to study. I hope I'll be able to go back .See you!

Ami Fukui

In this American training I was able to do such wonderful training thanks to Dr. Tomohito Inoue and Director Mr. William Smith II. Thanks to the support of the Pady University people, I was able to realize what I wanted to do freely. In this training, I learned various things including not only veterinary medicine but also things in America and learning in the world. I wanted to make efforts so that I could connect to the future in the future so that I could make use of what I gained from this training in the future.

Tatsuya Heishima

Throughout the past two weeks I felt that my English skill was still too much. There were times when I thought that I could have more ability to understand English. They made me feel like I had to study English. In addition, I was inspired by the high quality of students at Purdue University and the enthusiasm for studying. I thought that I would like to talk about various things if I have the opportunity to meet again as a student I became friends with as a future veterinarian. I would like to cherish this connection. And I was touched by what I was taught until VT and the veterinarians were able to become students. The way teachers taught carefully no matter how many times a student failed was a sight that can hardly be seen at my university. When the student succeeded, he said "great !! beautiful !!" and praised it. I felt that such scenes were unique in America. Students who came to BBQ and home patties were very kind and fun people, and playing games was very exciting. When everyone went to Disco invited by one of the students, we enjoyed dancing and dancing too much. I also went to the LGBT Festival and I was inspired by a festival that I could hardly see in Japan. Besides the clinical rotation, there was such a fun event so that I could enjoy the United States. I am very thankful to Dr Tomo and Will who took me to various places on schedule management and day off. I am indebted to you. I hope to make this training available to my future.

Shinichiro Yamamoto

Thank you fo 2 weeks. I could got a very valuable experience. Teachers, students, technicians were very kind and helped me understand , so I was able to learn various things . I was fun to see the game of American football and eat together after the hospital training. On holidays I went to zoos and festivals and I was able to enjoy American life . Thank you for making our training better. I would like to make use of what I learned and felt in the past two weeks. I want train at Purdue University in the future.

Yumeho Wakayama

Dear all the members of PUVTH

We appreciate for your support and hospitality. We being able to have had great experiences in PUVTH. I believe that our students never forget this wonderful everything.

We wish that things are go well for PUVTH.

Thank you.

Hiromi Ikadai













University of Georgia
College of Veterinary Medicine
11 Aug. – 26 Aug. 2018



Dr. Ishikawa, Dr. Nagata, Mr. Kawasaki, Mrs. Gogal, Ms. Aratani,

Ms. Uchiyama, Dr. Ando, Mr. Ogawa, Dr. Harvey

Mr. Oba, Mr. Fujioka, Mr. Yamamoto, Mr. Komatsu, Ms. Takenaka, Mr. Sanders

参加者一覧

同行教員：安藤 亮 Ryo ANDO

氏名	Name	所属研究室
荒谷 桃子	Momoko ARATANI	獣医薬理学
大場 裕輔	Yusuke OBA	獣医寄生虫学
川崎 歩	Ayumu KAWASAKI	実験動物学
小松 誠高	Masataka KOMATSU	小動物第2内科学
藤岡 友星	Yusei FUJIOKA	獣医薬理学

荒谷 桃子 Momoko ARATANI

出国の前日、成田空港の近くのホテルに泊まって、朝 9 時過ぎにホテルを出た。空港では、現地でお世話になる方々へのお土産をみんなで選んだ。出国前最後のご飯は、安藤先生がご馳走してくださったお寿司だった。とても美味しくて、しばらく和食が食べられないと思うと少し寂しい。長いフライトだったが、機内ではなかなか寝られないまま向こうに着した。大学は空港から少し離れており、バスで 2 時間程かかった。道路や家などバスからの車窓が日本とは異なっており、アメリカに来たのだと実感した。ジョージア大学に研修へ行った先輩から大学が広すぎて一つの街のようだったと聞いていたが、たしかにバスで走っていてもどこまでが敷地なのかわからないほど広かった。大学に着いた時には夕方になっていた。私たちは今日から約 2 週間、この学内にあるホテルに宿泊する。チェックインを済ませ、すぐに夜ご飯を食べに行くことにした。お店はホテルから歩いて 10 分程の Cali N Tito's というラテン料理屋にした。メニューを見てもどんな物が出てくるのかわからず、ドキドキしながら注文した。日本では食べたことないスパイシーな味でとても美味しかった。一緒に研修に参加している鹿児島大学と山口大学の先生や生徒も一緒にお店に行ったのだが、別々のテーブルに座ってしまいあまり話ができなかったので残念だった。明日からもっと交流したい。

翌日。朝はのんびり支度をして、10 時にホテルを出た。あまりよく眠れなかったが、わくわくしているため疲れや時差ボケは気にならなかった。私たちが宿泊するホテルには千愛さんという日本人の女性のスタッフさんが働いており、朝食は彼女おすすめの Mama's boy というお店で食べた。地元でも有名なようでとても混んでおり、少し並んだ。待っている間、隣のお店を覗いたり、周りの人の様子を眺めているだけで楽しかった。私はサーモンに半熟卵がのったのとマフィンのついたワンプレートご飯とストロベリーレモネードを注文した。どれも美味しかったのだが、やはり量は多かった。午後にジョージア大学の学生さん二人が車を出してくれ、スーパーへ買い物に行くことができた。気さくでとてもフレンドリーな学生さんだったが、照れてしまって積極的に話しかけられず後悔した。二人にはまた会えるチャンスがあるようなので次は頑張ろうと心に決めた。病院での研修が始まると朝早くホテルを出なければならないので、スーパーで朝食用のチーズやスープを買うことにした。ホテルへ戻ると、鹿児

島大学と山口大学の生徒さんから誘いがあったので夜ご飯をご一緒することになった。レストランでは、鹿児島大学の石川先生をはじめ、他の大学の人と話をすることができた。先生は北里大学出身ということがわかり、十和田での生活の話題で盛り上がった。

8 月 13 日。朝食は昨日スーパーで買った物で適当に済まし、9 時にホテルのロビーに集合した。今日はアトランタにある動物園と博物館に行くことになっており、とてもわくわくしていた。昨夜調べたら、Uber というタクシーのようなものがあるということで、それを利用してアトランタまで移動しようと思っていた。Uber は一般の人が空き時間に自家用車で送迎してくれるというものらしい。しかし、遠距離であるためかアトランタまで送ってくれるという運転手がなかなか見つからず、焦っていた。あきらめて近場で遊ぼうかと相談していると、千愛さんが Uber の運転手に知り合いがいるということで個人に連絡を取り、交渉をしてくれた。往復乗せてもらえることになり、二人にはとても感謝した。車に乗せてもらい動物園へ向かった。動物の種類も多く、久しぶりの動物園にわくわくしていた。来客数もそれほど多くなかったのも、パンダも間近で見ることができて嬉しかった。壁にもたれかかって笹を食べている姿はとても可愛らしかった。次に向かったのは、ファーンバンク自然史博物館。おしゃれな吹き抜けに写真には収まらないほど大きな恐竜の化石が展示されていて圧倒された。館内には大きな 3D シアターがあり、BBC のオーシャンズを観ることができた。とても楽しみにしていたのに、なんと上映中みんな揃って眠ってしまったのだ。帰りも 2 時間かけてホテルに戻り、夜はホテル近くの中華料理屋さんに行くことにした。日本で食べているものとは違う、創作料理のようなものが多かったが、味はとても美味しかった。

8 月 14 日。今日は病院見学の日。学内専用のバスで移動して、20 分ほどで大学病院に着いた。ラウンジで先生方を待っていると、ジョージア大学の病院で放射線治療を行っている永田先生にお会いすることができた。その後、学部長や数名の先生に挨拶をして、一緒にランチをした。隣に座った先生と話をするチャンスがあったが、言いたいことが言えず、とてももどかしかった。なかなか言葉が出てこない私であったが、笑顔で大丈夫だよと待ってくれた。明日からのローテーションでコミュニケーションがちゃんと取れるのか少しだけ不安になった。病院の案内は、3 年生の Madisonさんと 2 年生の Julietさんがしてくれた。大学病院は細かく専門に分けられており、整形外科、神経科、麻酔科、循環器科などがあり、それぞれの科に診察室、検査室、ミーティングルームがあって、規模の大きさに驚い

た。餌専用の部屋があり、何十種類ものフードがキャンディーボックスのように並んでいた。大動物の病院棟もかなり広く、手術室がいくつもあった。案内をしていた Madison さんも初めて病院見学に来た時に、施設内でほとんど臭いがしないことに驚いたと言っていた。たしかに、大動物の病院とは思えないほど綺麗に管理されていた。期待はしていたが、想像以上に素晴らしい病院で明日からのローテーションがますます楽しみになった。夜は、永田先生とジョージア大学の学生さん3人とステーキ屋さんに行った。先輩からの評判のいいお店でお肉が柔らかくとても美味しかった。同じテーブルに座った Bridget さんという女性の学生の方がとても明るい人で、うまく英語が話せない私でもとても楽しく会話できた。

8月15日、今日からいよいよ病院のローテーションが始まる。私は繁殖科、救急医療、エキゾチックアニマルの順で見学することになっていた。しかし、初日は繁殖科の担当の先生がすでに牧場へ向かっていたため眼科を見学させてもらうことになった。眼科の部屋へ向かったが、教授たちは会議があるらしく廊下でしばらく待つことになった。初めてのローテーションの日ということでとてもドキドキしていたが、同じく眼科の病院実習に来ている3年生の Amit さんという生徒が話しかけてきてくれて、会話をしているうちに緊張がほぐれてきた。診察が開始し、私も診察室に入れてもらえることになった。問診を行っていたのは教授ではなく、病院実習中の学生であった。飼い主さんとのやり取りもスムーズで私はてっきり先生だと思っていたので、後から生徒であるとわかったときはとても驚いた。診察でみた犬は6ヶ月ほど前から眼瞼に腫瘍があり、腫瘍ではないかということであった。担当した学生は診察で得た情報を教授に伝えていた。この犬は、検査のため一度預かることになった。その後、しばらくミーティングルームで待機しているとエキゾチックアニマルに連れてこられたフクロウの眼を見て欲しいという依頼が入った。先生とともにエキゾチックアニマルへ移動し、検査を見学させてもらった。フクロウの眼の検査というなかなかない体験ができてとても面白かった。

次の日は繁殖科を見学することができた。朝、ミーティングルームに向かったが最初の検診まで時間があつたので、先生や学生と話をすることができた。出身地などの話で盛り上がっていたら時間になったので入院棟へ向かった。今日最初の仕事は馬の妊娠検査だった。まず、学生の一人がお腹から超音波プローブを当てたが判断できず、先生が直腸から超音波を当てることになった。私にははっきりと分からなかったが、胎子の脚が二本見えたということだっ

た。馬の直腸検査は初めてだったのでとても新鮮だった。次の検査のため、学校から車で20分程の牧場へ移動することになった。BSEの牛がいると聞かされたときは驚いたが、Breeding Soundness Examの略で繁殖能試験のことであった。精子の回収はelectrojacという機械を用いて行っていた。学校の実習では見たことのない方法で驚いていた。顕微鏡で観察すると異常な精子の割合が高くなっていることがわかった。後日詳しく検査するらしい。午後は、症例と論文に関する話し合いだった。専門英語は難しく、話すスピードも早いためほとんど聞き取ることができず悔しかった。論文ゼミは先生が生徒に対して何を思ったか尋ね、自由に発言して、話し合うというスタイルだった。学生のたくさん発言する姿に、一人驚いていた。繁殖科2日目。今日最初の患者は、繁殖に使いたいという雌のジャーマンシェパードだった。プロジェステロン濃度を測定するために、採血を行なった。こちらの大学では採血などの処置は基本的に学生が行っており、学生のレベルの高さに驚かされることが多かった。それが終わると、今日も牧場へ向かうことになった。この牧場は学生の実習に協力しており、今日は学生二人に馬の直腸検査の練習させるために来たらしい。先生が一对一で生徒に熱心に説明していた。繁殖科だけでなく他の科も同様であるが、先生に対する生徒数が少ないため、先生と学生の距離が近く、詳しく教えてもらえるという印象を受けた。アメリカの獣医の教育制度を羨ましく感じた。その日の昼休み、学生の一人の Emily さんが家にペットを見にこないかと誘ってくれた。彼女は3人でシェアしている一軒家に住んでいた。愛犬のラブラドルの他に、馬と山羊も飼っていてとても驚いた。馬に餌をあげたり、犬と遊んだり、短い時間だったがとても楽しく過ごすことができた。病院に戻り、午後からはゴールデンレトリバーの内視鏡を用いた人工授精を見学した。犬の人工授精を見るのは初めてだったので、人工受精をよく行うのか聞いてみると週に1回ほどの頻度であると教えてくれた。大学の周りには学校のマスコットキャラでもあるブルドックが多く飼育されており、人工授精させにやってくるのは主にブルドックだと言っていた。処置中、何度も暴れたが無事に終えることができた。

2度目の週末。今日は、永田先生にアトランタへ連れて行っていただくことになっている。朝ホテルを出て、まず射撃場へ向かった。射撃は人生初の経験だった。小さなハンドガンでも、撃った時の衝撃が大きくてびっくりした。ふと隣の部屋を覗くと、10歳ほどの男の子が射撃していてとても驚いた。文化の違いを感じる光景だった。お昼は、永田先生おすすめのラーメンを食べた。とても美味しく、

アメリカで本格的な味のラーメンが食べられるとは思ってなかったので嬉しかった。午後は、ストーンマウンテンへ。世界最大の花崗岩であり、1つの岩なのだが、本当に山のような大きさであった。周囲は小さなテーマパークのようにになっており、ガラス工房などもあって素敵な場所だった。その後、モールへ連れて行ってもらった。広すぎて車で走っていても、全体を把握できないほどであった。有名なお店が多く、中を歩いているだけで楽しかった。夜は韓国料理屋さんへ。アトランタは韓国人が多く住んでいるらしく、そのお店も韓国人の方が作っていて、とても美味しかった。私たちを色々な場所に連れていってくれた永田先生には本当に感謝したい。先生のおかげで休みの日も満喫することができた。

今日は、繁殖科で出会った Emilyさんから教会に行かないかと誘われたので見学させてもらうことになった。映画やドラマで見たことのある教会をイメージしていたが、到着したのはジョージアシアターという劇場だった。満席で来ていたのは、ほとんどが学生だった。説教はスクリーンを利用したりして、まるでプレゼンのようだった。音楽もギターやドラムを使った現代的な曲でとても驚いた。想像とは全く異なっていたが、向こうのリアルな日常を体験できて面白かった。午後からは、Gogal先生の家でパーティーがあった。裏庭には、プールやバレーコートがあって、みんなで思いっきり楽しんだ。先生は鉄道好きらしく、地下には模型がいくつもあった。鉄道だけでなく町も再現してあって、私も子供と一緒にってはしゃいで見ていた。一日中遊んでいられる夢のような家だった。

今日からは救急医療（イマージェンシー）を見学する。ローテーション3つ目の科であったが、やはり初日は緊張する。院内の場所がわからなかったのも、事務の方に案内してもらい、イマージェンシーへ向かうと女性の先生と2人の生徒がいた。10時になるとさらに生徒が2人やって来た。シフトが組んであり、自分の担当の時間に来院患者を受け持つことになると言っていた。救急と聞いて、重篤な患者ばかりが運ばれてくるのかと思っていたが、一次診療のような基本的な検査が多かった。一通り基本的な検査を終えた後、整形外科や皮膚科などそれぞれの症例に合わせて紹介するのがほとんどであった。ここでも基本的に学生が処置を行っていた。気胸のボクサーに対して肋間からカテーテルを挿入し、空気を抜くという処置までも学生に行わせていたのには驚いた。2日目の朝、救急らしい患者が運ばれてきた。短頭種気道症候群で呼吸困難に陥ったフレンチブルドッグだった。それまでアットホームな雰囲気であった部屋に緊張感が走ったが、皆落ち着いて作業を進めていた。体温調節ができないというこ

とで、氷や扇風機を使って冷やし、気管挿管を行うとしばらくして落ち着いた様子であった。この時、どの学生も戸惑うことなく行動している姿に驚かされた。このフレンチブルドッグはMRIとヘミラミネクトミーを行う予定であったため、イマージェンシーから運び出されていった。15時頃戻ってきて、術後管理はイマージェンシーで行うことになった。かなり落ち着いていたので安心した。今日はこの他に左腋窩に腫瘤が見つかったイングリッシュブルドッグが来た。このブルドッグを担当することになった学生がFNAを行った。病院の2階は検査室になっており、病理診断を専門に行っている人の元へサンプルを持って行った。イマージェンシーに戻る際に学生が、この後皮膚科の先生と相談して方針を決めるのだと教えてくれた。病理診断から良性であることがわかり、明日手術で取り除くことが決まった。この他、印象的だったのはラブラドルの鍼治療である。この犬は学生の犬で、左前肢の動きが悪いため治療を続けているらしい。イマージェンシーで鍼治療まで行っていることにとっても驚いた。夜は、Hondulus先生宅でパーティーを開いてもらった。レトロでとてもおしゃれな家だった。8時間かけて作ったという豚肉の料理は絶品だった。庭でバトミントンやゲームをして、とても楽しかった。病院見学も残りわずかだが、明日からのローテーションも頑張ろうと思う。

最後に見学したのは、1番楽しみにしていたエキゾチックアニマルである。部屋に向かうと、おととい手術したという鷹の橈骨の創外固定の洗浄を行っているところであった。いきなりエキゾチックアニマルらしい症例を見ることができて面白かった。後からレントゲン写真を見せてもらったが骨はとても細く、創外固定ができることに驚いた。NSAIDsであるメロキシカムをこの鷹に対して現在使用しているらしいが、研修生の一人が教授に投与量を減らしたいと提案していたが、教授は論文にそのようなことが書かれているのかと熱い討論になっていた。珍しい動物を診る難しさを感じるやり取りだった。次に来たのは、餌を食べないという主訴で連れてこられたモルモットだった。シリンジでの流動食の給餌を行うと少量であるが食べることができた。右前肢にも膿瘍があったため、洗浄を行った後、ハイドロジェルを塗ってバンテージを巻く作業をしていた。この他、NSAIDsの皮下投与も行っていた。痛みと餌の管理を中心に治療を続けていく予定だと教えてくれた。次に来たのは、体内の卵が多すぎるということで手術を行うことになっているアゴヒゲトカゲである。心拍測定、体重測定、体温測定などの検査を一通り行った。体温測定は表面温度を測る機械を使用していた。検査の中でこのトカゲは左眼

に眼瞼炎も患っていることがわかった。私はこのことに全く気づかなかったのだが、小さな変化も見逃さない教授に驚かされた。血液検査では、血中カルシウム濃度を調べていたのだが、研究室で頻繁に使用されていた **Exotic Animal Formulary** という様々な動物の正常値が記載された本にもアゴヒゲトカゲのカルシウム濃度は載っていなかった。そこで担当していた学生は、アメリカドクトカゲの値を参考にすることにしていた。ちなみに、その値に当てはめると正常値であることがわかった。続いて見たのは、キャンプで子供達に投げられたり、ペインティングされたりひどく傷ついたカメだった。結束バンドを用いて割れた甲羅を綺麗に結合してあった。回復してきたので今日帰るのだと言っていた。カメの心拍測定は、他の動物と同様ドップラーセンサーを用いた機械を使用していたが、プローブはペンシルプローブという細いプローブで行なっていた。プローブを首と前肢の間に当て聞いていた。私も測定をさせてもらった。このような方法で測定しているとは知らずとても貴重な体験ができた。20cm 程であまり大きくないカメであったが、心音はかなり遅く驚いた。この日の午後の最初の患者は、代謝性骨症により歩行できなくなった鶏だった。安楽死させることになり、私たちはその様子を見守った。使用したのはペントバルビタールで、心臓と同時に中枢も抑制する効果があるので使っているとレジデントの一人が教えてくれた。このレジデントの方はとても熱心に教えてくださり、先ほどカメの聴診をさせてくれたのもこの人だった。また、フクロウの死体を使用して、保定、注射、聴診などの方法を技師さんや学生に教えているところも見学させてもらった。この2日間、レジデントの知識量や技術のレベルの高さに圧倒されていた。後日、レジデントになるのはとても難しいことであり、特に優秀な人ばかりだという話を耳にした。病院でのローテーションが終了し、今日は **Scott Brown** 先生の家で最後のパーティーを開いてもらった。先生の家には、牛、羊、ロバ、鶏などが広大な敷地で飼育されていて、とても家とは思えなかった。さらに、家の裏には大きな池もあり、釣りを楽しむこともできた。永田先生や大学の学生さんも遊びに来てくれて、とても楽しいパーティーとなった。

今日は、アトランタまで移動する日である。一旦、宿泊するホテルに向かい荷物を預けてから、コカコーラ・ミュージアムへ。販売当初からの看板や自動販売機の展示や工場の再現、4Dシアターなどコーラ1つでここまで楽しめるとは驚きだった。コカコーラが作っている世界中のジュースを飲めるコーナーもあり、どれもあまり美味しくはないが、初めての味ばかりで面白かった。次に向かったのは、

アトランタ水族館。イルカショーは演出に凝っており、日本とは違う見せ方で面白かった。ジンベエザメが3匹も入った巨大な水槽には本当に感動した。ゆっくり味わいたかったが、あまり時間もないので慌ててCNNへ。中は見られなかったが、ギネスに載っているというエスカレーターは見る事ができた。CNN内にあるお店で食べたステーキは最高だった。ホテルに戻り、アメリカ最後の夜ということで何人かで飲むことになった。鹿児島大学や山口大学の学生さんと仲良くなってきたのに、すぐにお別れとなってしまい寂しい。帰りは機内で救急の患者さんが出たことにより、1日帰国が遅れるなどのハプニングはあったものの、無事に帰ることができた。

研修は2週間という短い時間でしたが、とても充実した内容となりました。忘れられない素晴らしい体験をたくさんさせてもらうことができました。安藤先生、石川先生、永田先生、ジョージア大学の方々、一緒に研修に参加した皆さん、研修に関わってくださった先生方、皆さんに感謝したいと思います。

大場 裕輔 Yusuke OBA

1日目

8月11日(土)の14時に成田空港第1ターミナル集合となっていたため、前日に家を出発し、成田駅周辺のホテルに前泊した。

出発当日は、14時集合の予定であったが、アメリカでのパーティーに持っていくお土産を購入するため、ジョージア大学に行くメンバーで10時に集合し、空港内のショップをまわり、お土産を購入した。その後、私は事前に予約しておいた、アメリカで使用するためのWi-Fiを専用窓口に受け取りに行った。お昼は安藤先生も合流し、空港内の寿司屋で昼食をとった。その後、手荷物検査などの出国手続きを済ませ、待合室で待機し、飛行機に搭乗した。飛行機にはおよそ12時間乗っていた。アトランタ空港に到着すると、入国審査を受けたが、審査官が話す英語が思っていたよりも早口であったため、あらかじめ対応できるように準備しておくべきであった。入国審査が終わると、バスを乗り継ぎ、ホテルへ向かった。バスには2時間以上乗っていたが、みんな飛行機で疲れていたのか、爆睡していた。ホテルでチェックインの際にいろいろ英語で話されたが、聞き取れなかったことが多くあったため、やはりあらかじめ英語を勉強するべきであったと痛感した。ホテルの部屋で軽く荷物整理をしたら、鹿児島大、山口大の人たちと夕食を食べに行った。夕食は

ホテルの近くのおしゃれなファストフード店で食べたが、この店はクレジットカードが使えなかったため、現金で支払いをした。現金しか使えないお店もあるため、少し多めに現金を用意しておくと思安心だと思った。料理の味は最高であった(ただし、結構ボリュームであったため頼む量に注意するべき)。帰り道にサークル K があったため、そこで飲み物などを買った。飲み物やお菓子など全体的にサイズが大きく、アメリカにいるということを強く感じた。帰ってきて、シャワーを浴びたが、お湯を出すレバーが見たことない形であったため、お湯の温度調整などに手間取った。

2 日目

午前中は予定はなかったが、10 時ごろに全員で近くのレストランへ昼食を食べに行った。mama's boy というハンバーガーレストランで私はチーズバーガーを食べた。サイズが大きく、ポテトの量も多く、味も最高においしかったため、大満足であった。また行きたいと思う。最後のお会計の時にレシートが来たのだが、どのタイミングで Tip を払うのか分からなかったため、少し戸惑ったがなんとかお会計を済ませることができた。今後のためにお会計の流れを下記に記しておく。

・お会計の流れ

伝票がくる → 値段を確認し、カード or 現金を出す → 伝票と領収書 2 枚が来る → 領収書 2 枚に Tip、Total の額、自分のサイン(日本語)を記入する。 → 領収書 1 枚だけを残して帰る(customer copy を持って帰る)

昼食を食べて帰ってきたら、近くのスーパーに買い物に行った。行ったスーパーは、ホームセンターのように広く、品揃え豊富であった。食べ物や飲み物は複数個買くと、1 個あたりの値段が割安になるというのが多かったため、食べられる範囲内であれば複数個買うのがおすすめである。雰囲気はコストコに似ていた。セルフレジもあったため、有人レジが混んでいるときはおすすめである。

夕食は鹿児島大、山口大の人たちと一緒に食べに行った。行ったお店はレストランバーでおしゃれな内装であった。そこで BBQ プレートを頼んだが、昼に食べたハンバーガーが重かったのと、BBQ プレートがボリュームだったことにより、すべて食べきるのが大変であった。しかし、味はおいしかった。お酒も頼んだ。ぱっと見でメニューの中で知っているお酒がシャングリラしかなかったため、これを頼んだ。

ホテルに帰ってきたら、北里のメンバーで翌日に

どこに行くのか話し合った。アトランタに観光できるところがいくつかあったため、とりあえずアトランタに行く方法をフロントの方に聞いた。すると貸し切りタクシー (Uber) かメガバスで行けるということだったので、これらをネットで調べたが、メガバスはいい時間の便がなく、運賃もそこまで変わらなかったため、Uber で行くことにした。アトランタでは、昼ごろに到着し、昼食を食べ、動物園と博物館に行くという予定を立てた。

3 日目

今日は 1 日フリーの日であったため、前日に決めた予定通り 9 時にフロントに集合して出かけた。Uber というタクシーでアトランタに行こうとしたが、アプリのエラーでタクシーを呼べないというアクシデントが起こった。しかし、フロントにいた日本人の従業員の方に助けていただいて、なんとか往復分のタクシーを確保できた。

まず、はじめに動物園に向かった。タクシーの運転手の方はとても親切で、動物園に向かう時に 1 人 1 本ミネラルウォーターをくれた。動物園に着いた頃にはお昼になっていたため、園内のレストランで昼食をとった。私はベーコンハンバーガーとビッグクッキーを注文した。アメリカで料理を注文するたびに思うが、ボリュームがものすごい。食べきるのに一苦労だった。

動物の中では、パンダが一番人気で人が多く集まっていた。この日は暑く、ライオンやパンダは横に伸びきって寝ていた。

3 時に動物園を出て、20 分後くらいに自然史博物館に到着した。ここでは博物館内をまわり、4 時から自然に関する 3D movie を観た。シアターは椅子の座り心地がよくて、1 日暑い中歩いて疲れていたのか、少し寝てしまった。

5 時にアトランタの自然史博物館を出て、7 時ごろにホテルに着いた。到着したら、歩いて行ける距離にあるおしゃれな中華料理店で夕食を食べた。久々にハンバーガーや肉といったアメリカンな料理ではないものを食べたため、なんか新鮮な感じがした。

その後ホテルに戻り、ジョージアのメンバーで洗濯をした。洗濯機はクウォーターコインが 5 枚必要なため、コインをためておく必要があると感じた。乾燥機もクウォーターコイン 5 枚必要であるため、ためておいて損はないと思う。

就寝前に鹿児島大の人と飲み会をした。普段なかなか聞くことのできない鹿児島大の話をたくさん聞けて、とても楽しい時間を過ごせた。

4 日目

朝は、一昨日にスーパーで買ってきたインスタントのマカロニパスタを作って食べた。

その後、午前 10 時にフロントに集合し、バス停まで行き、大学のシャトルバスに乗って大学の動物病院まで行った。

到着したらまず大学の先生方にあいさつをした。

その後、大学の先生や事務の方にラウンジで昼食を取った。メニューはハムやチキンのサンドイッチとバーベキューやハラペーニョ味のポテトチップスであった。昼食にポテトチップスは少し驚いたが、とても美味しかった。

その後、大学の学生 2 人に大学内を案内してもらった。大動物、小動物ともに病院がとても大きく、天井も非常に高く、驚いた。また、病院はとても綺麗で、整理整頓されていた。

帰りもシャトルバスに乗ってホテルに帰った。少しホテルで休んでから、近くのジョージア大学グッズが売っているショップに行った。ここでは本も売っており、学生がたくさんおり、レジまで長蛇の列となっていた。私は T シャツとボールペンを記念に買った。

ホテルに帰ったら、永田先生たちとステーキハウスに行った。途中からジョージア大学の学生さんも何人か合流した。大学の学生さんはみんな気さくな人たちで、私の下手な英語も必死に聞き取ろうとしてくれて本当に楽しかった。

料理はステーキとパンとサラダがセットになって来た。ステーキは大きく厚かったため最後の方はかなりきつかった。

ホテルに帰ったら疲れていたのかすぐに寝てしまった。

クリニカルローテーション スタート

クリニカルローテーションは朝 8 時から始まるため、朝 6 時に起床し、朝食を食べ、7 時にフロントに集合し、バス停に向かった。毎日余裕を持って出たためバス停で少し待った。バスに乗り、7 時 40 分くらいに病院に着いた。クリニカルローテーションの日の朝はこのような流れで動いた。

5、6、7 日目 小動物内科

5 日目

私の最初のクリニカルローテーションは小動物内科であった。

内科の部屋に行くと、教員が血液検査についてのレクチャーをしていた。レクチャーは質問形式で進められていき、教員が質問を投げかけ、誰かが答えるというような形だった。あらゆる症例において、起こりえる血液の変化について、内科のメンバー全

員で考えていた。

これが終わると教授が部屋に入ってきて、今日 1 日の診察についての確認と各先生の受け持っている患者の状況報告が行われた。今後の治療方針などについての教授が丁寧に助言をしていた。

次に、教授に挨拶をして、先生方の診察を見学させてもらった。小動物内科の診察はまず基本情報の確認や、いつから異常が起こったのかなどを聞いていた。TPR や体重測定はしていなかった。診察が終わって、内科の部屋に戻ってから、TPR や体重の測定をしていた。そしてリンパ節の検査や神経学的検査などをしていった。そして、他の先生方 3 人くらいと話し合いをして、再び飼い主さんのところに戻り、今後どのように検査をしていくかということと話していた。何人かの先生と話し合いをしてから、行う検査を決めるという点は、日本とは少し違うと思った。

この日の夜は永田先生にベトナム料理店に連れて行ってもらった。ここでは本格的なフォーを食べた。チャーシューのようなものがのっており、初めて食べたが、とても美味しく、今でも印象に残っている。夕食を食べたあと、射撃場に行き、本物の銃を撃った。小さめの銃と普通サイズの銃両方撃ったが、普通サイズでも結構衝撃があって、驚いた。

6 日目

今日は小動物内科 2 日目である。まず、1 人の先生が動物の姿勢についての講義を行っていた。異常のある座り方をしている犬の写真が何枚か出てきて、これはどういう異常が考えられるかなど話し合ったりした。後肢を前の方に伸ばしてお座りしている犬の写真が出てきてなにやら詳しくディスカッションしていたが、詳しいことは聞き取れなかった。やはりここでも英語力のなさが身にしみた。その後は、前日と同じように、教授が来て今日の診察の確認と、各先生の受け持っている患者の状況のチェックを行った。その後、昨日と違う先生の診察を見せてもらった。前日に見た先生の診察と同様に、TPR や身体検査は内科の部屋に戻ってから行っていた。そして、何人かの先生で話し合い、行う検査を決定していた。この一連の流れは決まっているようだった。

夜はテラピンという、ビール工場に隣接したビールバーに行った。ビール工場見学もできたので、ビールの製造過程を 1 つ 1 つ見ることができた。

ビールバーの方には、日本では見たことのないビールがたくさんあった。私はグレープフルーツビールを頼んだ。ビールなのにグレープフルーツの

味がしたので、ビールが苦手な私でもおいしく飲めた。

7 日目

今日は最後の小動物内科であった。まず、大講義室でレジデントの方々の研究発表や症例発表を見た。コイなどの魚類に麻酔をかけ、CTやMRI撮影をし、どのように見えるかという発表をしていた。魚でもCT、MRIがかけられるということや、魚類の治療も試みようとしていることに驚いた。

研究発表が終わったら、いつも通り今日1日の診察についての確認と先生の受け持っている患者の状況報告が行われた。その後、診察はほとんどなく、飼い主さんに電話で動物たちの様子を聞いている先生が何人かいるような状況であった。入院している動物たちの管理もしていた。金曜日はこのようにこの科も診察はほとんど入れないのが普通になっているらしい。

この日の夕食はオイスターバーに行き行って食べた。しかし、ここの店は大人気で、45分待ちと言われたので、向かいにあるカフェに行き、待つことにした。カフェでは、アップルサイダーを頼んだ。冷たいアップルサイダーが出てくると思ったが、温かいアップルサイダーが出てきて驚いた。

オイスターバーでは、様々な味のカキが食べられた。少し値段は高かったが、味は最高だった。他にもサンドイッチや、サラダなども食べることができた。

8 日目

今日は1日休みだったため、永田先生にアトラクタに遊びに連れて行ってもらった。

まず、前も行った射撃場に連れて行ってもらった。今日は前回も撃った銃2種類とマシンガン、マグナムを打たせてもらった。特に印象に残ったのはマグナムで、撃った時の反動がものすごく、銃が上に向くくらいであった。後ろで見てるだけでも、風を感じ、音が凄まじかった。

次に、中国食材店に連れて行ってもらった。ここでは、フードコートにラーメン屋があったので、久々にラーメンを食べた。とても美味しく、extra noodleまで完食したほどであった。

次に、ストーンマウンテンに行った。ストーンマウンテンは世界一大きい花崗岩らしいが、岩というより山だった。人が多く、日本人観光客も何人かいたので、なかなか有名な観光地ようだ。ストーンマウンテンは、なかなか来れないと思うので、生で見るのができてよかった。

次に、ジョージア州で1番大きいというショッ

ピングモールに行った。ここは今まで行ったショッピングモールの中で一番大きかったと思う。自由時間が2時間弱あったが、すべてまわることができず、ショッピングモールの広さに終始圧倒された。

夜は韓国料理店に行った。チヂミ、冷麺、キムチ、ビビンバなど様々なものを頼んでみんなでシェアした。久々の韓国料理だったこともあり、どれもものすごくおいしかった。

9 日目

今日は午後から、大学の先生の家でホームパーティーがあった。先生の家は庭にプール、バレーボールができるスペース、キャンプファイヤースペースがあり、日本にはなかなかないような家でとても驚いた。夕食ができるまでプールに入ったり、バレーボールをしたり、プールサイドで軽食を食べたりといかにもアメリカというような時間を過ごした。

パーティーを開催してくださった先生に日本のお土産として、びわゼリーを渡したが、すぐに開封してくれてとても喜んでくれたので、買っていった甲斐があった。

10、11 日目 麻酔科

麻酔科では、内科と同様に朝は講義から始まった。1つの症例に対して、使える麻酔を全員でディスカッションするという形式だった。これは麻酔科2日目でも行われていた。

麻酔科の部屋は大動物と小動物のオペ室の間にあり、両方の麻酔を担当していた。処置室は小動物用の処置台が8台あり、複数の患者が一度に来ても対応できるようになっていた。大動物の麻酔は、実際には見ていないが、大動物専用の処置部屋があり、そこで行うらしい。

麻酔科で行う処置の予定表は、入り口付近の大型モニターに映し出されており、全員がチェックできるようになっていた。これを見ることで、あらかじめ使用する器具や機械を出しておくことができるようになっていた。火曜日は軟部外科のオペの麻酔、月曜日はそれ以外の科の麻酔が多く入っていた。CT、MRIのためにかける麻酔は曜日に関係なく、頻繁に行われていた。

麻酔科2日目の午後は時間があつたため、大動物の部屋で馬の内視鏡検査を見学させてもらった。検査した馬は喉頭片麻痺の疑いがあるということで検査していた。授業で見た典型的な左側の披裂軟骨の麻痺が起こっていたため、とても分かりやすい症例であった。やはり症例を直接見ると強く印象に残るため、これからたくさんの症例を見ていきたいと思う。

11 日目の夜は、また別の先生の家でパーティーがあった。この先生の家もとても大きく、バレーボールやバドミントンができる大きな庭があり、驚いた。夕食の後に、1 時間ほどバドミントンができたため、とてもいい運動になった。

今回も日本のお土産として、びわゼリーを渡したが、すぐ開封してくれて、喜んでくれて嬉しかった。アメリカでお土産を渡すとほとんど人がすぐに開封してくれたのだが、これはアメリカでの 1 つのマナーらしい。私はこのことを全く知らなかったので、すぐ開封するのは早く中身を知りたいからだと思っていた。これからは私もアメリカで何かもらった時はすぐに開封しようと思う。

12、13 日目 小動物軟部外科

12 日目、13 日目は軟部外科をまわった。軟部外科のオペの日は、火曜日と木曜日であったため、軟部外科 1 日目（水曜日）は診察以外なかった。

小動物軟部外科では PDA の疑いのあるチワワの診察を見させてもらったが、診察の一連の流れは小動物内科と同様であった。

2 日目はオペの日であったため、オペが 6 件ほど入っていた。症例は様々で、PDA、肺癌による肺葉切除、形質細胞性リンパ腫、リポーマ、肛門周囲の腫瘍などであった。私は、PDA、肺葉切除、リポーマのオペを見学した。PDA、肺葉切除の方法は授業で勉強していたため、それを直接見ることで、印象に残すことができてよかった。リポーマのオペの方法は分からなかったが、モノポーラを使ってひたすら切って、腫瘍を切除し、最後に皮膚を縫合していた。

1 日中オペの見学で立ちっぱなしで疲れたが、とてもいい経験をさせてもらうことができ、充実した 1 日となった。

13 日目の夜は副学長の家でパーティーをした。副学長の家はとてつもなく広く、ヤギのいる牧場や釣りができる広い池があるなど、見た事もないような家であった。夕食もちろんおいしかったが、このような家を見て、日本との規模の違いに終始圧倒されていた。日本ではなかなか見ることができないだろうと思う。

クリニカルローテーション 終了

14 日目

今日はアトランタ観光の日であったため、朝早くホテルを出発し、GROOME という乗り合いバスでアトランタへ向かった。最初はワールドオブコカ・コーラというコカ・コーラの博物館に行った。ここ

ではコカ・コーラの歴史を知ったり、3D シアターでムービーを観たりすることができた。最後は、各国のコカ・コーラドリンクを飲みたいだけ試飲することができ、飽きるまで飲むことができた。

次にアトランタ水族館へ行った。ここはたくさんの水槽があり、今まで見たことのない魚もいた。イルカショーも観たが、日本と違い、人がプールに飛び込み、イルカたちと一緒に泳いだり、イルカに乗ったりしてとても感動した。

水族館の後は CNN の本社に行き、買い物をしたり、ステーキ屋で夕食を食べたりした。CNN の本社には世界一長いとされるエスカレーターがあり、これも見るすることができた。

夕食後は、アトランタ空港の近くのホテルで 1 泊した。

15 日目

今日は成田空港へ帰る日であったため、ホテルからのシャトルバスでアトランタ空港へ向かった。空港に到着すると、出国手続きを行い、空港内のショップでお土産を買い、そして無事に飛行機に乗ることができた。しかし、太平洋上空を飛んでいるときに急病人が発生し、アラスカのアンカレッジ空港に引き返し、急遽アラスカで 1 泊しなければならなくなった。ホテルと食事は航空会社が用意してくれたが、Wi-Fi の利用日時の延長と東京で泊まる予定だったホテルをキャンセルしなければならなくなったため、手続きが面倒であった。しかし、空港－ホテル間のバスの中からアラスカの風景を眺めたり、ホテルでお土産を買ったりと、アラスカを 1 日満喫することができたのでこれはこれでよかった。

次の日はお昼過ぎに無事に飛行機も飛び、成田に到着することができた。

この 2 週間を振り返ると、大変なこともあったが、非常に充実した 2 週間であったと思う。

クリニカルローテーションの際には、先生方の言っていることがなかなか聞き取れなかったり、質問しようとしてもなんと聞けばいいのか分からなかったり、聞けたとしてもなんと聞いているのか分からなかったことも多々あった。しかし、特別大変なことといえばこれくらいであったため、英語を話す力がつけば、アメリカで十分生活できるのではないかと正直感じた。アメリカの方々はとても親切で、私のごちない英語も笑顔で聞いてくれて、ほんとに温かさを感じた。これから英語をもっと勉強して、またアメリカの病院で研修をしたいと思う。

最後に、ジョージア大学の方々、同行してくださった先生方、様々なことをレクチャーしてくださった永田先生、2 週間行動をともにしたメンバーの皆さま

ん、貴重な経験をさせていただき、本当にありがとうございました。

川崎 歩 Ayumu KAWASAKI

< 8 月 11 日土曜日 >

当日は港区からバスで成田空港へ向かった。予定より早めに空港に入り、現地の学生や研究室に配るためのお土産を購入した。

その後、無事予定通りに全員集合できた。

出発前、日本最後の昼食として寿司を食べることとなった。ところが、自分は所持金を全てドルに両替してしまったため寿司代の支払いができないのではないかと焦ったが、なんと同行教員の安藤先生が全員分の代金をおごってくれることに。素晴らしい同行教員に恵まれて、非常に助かった。その後、同じく研修に参加する鹿児島大学と山口大学の人たちと合流した。

フライトは 13 時間ほどあったが、飛行機内ではほとんど眠れず、映画を観て過ごした。普段映画をあまり観ないのだが、このフライトで映画の面白さに気づき、完全に映画にはまってしまい、13 時間で 6 作品を観た。機内を映画三昧で過ごしたのだった。特にアベンジャーズ 1、2、3 は最高だった。君の臍臓を食べたいで感動した。

アトランタ空港到着後、バンでジョージア大学のあるアセンズという街へと向かった。2 時間くらいかかったと思う。

宿泊所のジョージアセンターに到着し、ホテルにチェックインした後、鹿児島大と山口大の方々も含めて皆で晩御飯としてメキシコ料理を食べに行った。24 時くらいに就寝。

< 8 月 12 日日曜日 >

8 時ごろに起床。ホテル周辺を散策した。9 時ごろに安藤先生から朝食を食べに行こうと提案があり、ホテルのバンを借りてママーズというレストランでランチを取った。午後からはジョージア大学の学生と初対面し、その後、彼らにクロウガーというスーパーに連れて行ってもらった。店内はイオンスーパーのような感じで食料品や衣料品、日用品等があり、二週間分の食糧や日用品を購入した。午後 3 時 30 分ごろにホテルに戻ってきた後、アセンズのダウンタウンを散策した。夕食は鹿児島大と山口大の皆とダウンタウンのレストランで夕食を取った。

< 8 月 13 日月曜日 >

この日は一日フリーということで、皆で相談し合

い、北里はウーバーを借りて、アトランタの動物園と美術館に行くことになった。

ホテルの日本人スタッフの方がウーバーの運転手に交渉してくれて、非常に安価な運賃で行き帰りまで運転してもらえることになった。行きは助手席に座り運転手の方と軽く会話をしたがアクセントや話すスピードなのか、とても英語が聞きとりずらかった。音楽やアトランタでの食事について話した。2 時間ぐらいで動物園に着き、入場の方法を運転手に尋ねたら、わざわざゲートまで同行して入場の手配をしてくれた。運転手の人柄の良さと温かみを感じた。アトランタ動物園はとても広く、日本では見ないような動物もいて、パンダとゴリラが特に印象的であった。熊のパンティングは見れなかった。昼食は園内のフードコートで七面鳥のサンドウィッチを食べ、2 時間ぐらい動物園に滞在した後、またウーバーに乗って、次は美術館へ。美術館は主に科学、物理学を題材としたもので、さまざまな展示品や体験コーナーがあった。45 分の地球の生命を題材とした 3D シアターがあり、別料金を払って観たが、たいした感動も面白味もなく、先生含め周りは皆寝ていた。シアターが終わるとそのまま帰りの時間になりウーバーでホテルへと帰った。

夕食は学生だけでホテルの近くの中華料理屋で食べた。洋風と中華が合わさったような料理で美味しかった。

< 8 月 14 日火曜日 >

9 時に起床し、11 時 15 分にフロント集合。迎えに来たパーカーさんにこれから研修で病院に行く時に使うことになるバス停に案内してもらった。病院行きのバスに乗り病院へ。運賃は無料だった。

学生のジュリエットと Madison さんの案内で病院内を一通り見学した。基本的にはコの字型をした建物で、小動物側と大動物側に分かれていた。かなりお金がかかっている設備であり、日本では無い様な充実したのを感じた。部屋がいっぱいあり過ぎて迷いそうだ。また、二階は血液検査などを行う検査室と教員たちの個人の部屋となっていた。

病院一階のラウンジのような所で昼食をとり、ジョージアの学生や教員の方々と談笑した後に記念撮影をした。

< 8 月 15 日水曜日 >

6 時半起床。7 時 10 分にホテルのロビーに集合し、歩いて病院行きのバス停に行きバスに乗車。8 時くらいから各科に連れて行ってもらい活動スタート。

自分が配属されたエキゾチック科は先生と学生合わせて 10 人くらい居た。獣医師や看護師、ジョー

ジアの学生たちは手術中だということで麻酔室に案内されると、カメレオンの気管挿管を行っていた。挿管の器具もカメレオン用に作られており、あまり見たことのない光景だったので、軽く衝撃を受けた。症例はカメレオンの卵巣摘出。麻酔のための挿管がなかなかできずに苦戦している様子であった。獣医師が3人ぐらい、学生3-4人、看護師も3-4人いて計10人以上、エキゾチック科は総出で手術を行っていた。麻酔室は他の科も共用でとても広く、麻酔科が存在するほどで、部屋のスクリーンには、患者一覧が映し出されていた。患者の名前、担当の科、担当の学生、先生などが記載されていた。なんとか、麻酔がかけられたようで、その後、手術着を着て手術室に移り、卵巣の摘出を行った。手術中はスマホから音楽が流れており、手術をリラックスして行う工夫がなされているようだった。手術は長く、午後1時近くまでかかった。2症例目はウサギの骨折治療であったが、血圧が上がらず、手術不可能となり、オペは中止、包帯で固定して終了した。エキゾは3日間見学したが、ウサギの症例は一番多かった。アメリカではウサギを飼う人が多いのかと感じた。本日の症例はすべて終わり、エキゾの部屋に戻ると、先生や学生はデスクで作業をしていた。症例の報告書などを作成しているようだ。エキゾのエリアの構成は、診察室、処置室、獣医師や学生の控室があり、入院室が3つでガチョウ、鷹、爬虫類など、動物種に対応して分かれていた。特に見学するものがなく、先生や学生と談笑をしているとローテーション終了時間である16時となり、バスでホテルへと帰った。ホテルをうろついていると、ロビーでジョージア大学の日本人獣医師で放射線科の永田先生と出くわし、談笑した。先生の車でスーパーに連れて行ってもらうことになった。アメリカ大手スーパーであるウォルマート、雑貨屋に連れて行ってもらった。夕食はジョージア大学の職員や学生の招待でロングホーンというステーキ屋に連れて行ってもらった。ステーキはかなりボリュームがあり、美味しかった。

< 8月16日木曜日 >

6時半起床。昨日はかなり疲れたのかよく眠れた。7時10分にホテルのロビーに集合し、皆でバス停へ。8時前にはエキゾチックの部屋に入った。

この日も様々な症例を見た。ウサギの耳介細菌感染、ペースメーカーを取り付けたフィレットの健康診断のためエコーやレントゲン撮影などなど。

昼は永田先生と近く中華料理屋へ行った。バイキング形式で種類も豊富であるにもかかわらず安価で非常に満足した。

食事が終わり、部屋に戻ったがこの日はもうあまり見学するものがなさそうだ。部屋にいた学生と話

した。ジョージアの学生は3年生まで座学で、その後、ローテーションで病院の各科を回って実習を行うそうだ。日本とは異なり、学生でも手術の術者を行えると聞いて驚いた。暇を持て余していると、獣医師の先生が“Exotic Animal Formulary”という書籍を持ってきてもらい、今日の症例についての説明をしてもらった。カメレオンの血液検査を行ったが、ASTとCKが上昇していたらしい。これについて君はどう思う？と問われたりして、しばらく話していた。このエキゾの先生はドイツ出身で以前はアトランタ動物園に勤めていたとのこと。

また、明日の症例で行うインコの低侵襲腹腔内内視鏡手術が載った論文を印刷してくれた。

どうやらこのインコの手術法はエキゾチック科のチーフが編み出した手法らしい。月に一回程度しか行われない手術らしく非常に興味がわいた、明日が楽しみになった。この日のローテーションも終わり、バスでホテルに帰った。夜はジョージアの学生に連れられ、ビール工場に行った。

< 8月17日金曜日 >

6時頃起床。この日も疲れていてよく眠れた。出発はいつも通りの感じで病院へ。

金曜日の午前中は毎週、ゲストや講師によるプレゼンを行っており、この日は二人で1時間ほど発表を行った。エキゾチックアニマルの抗菌剤の感受性試験の研究とコイのマスに対するCTとMRI検査についてだったと思う。この日はエキゾのローテーション最終日。午後は内視鏡室で昨日もらった論文の手術を行い、症例はインコの真菌感染。最後肋骨の下あたりを切開し、そこに内視鏡を挿入し内視鏡による真菌感染部位の臓器のバイオプシーを観察した。内視鏡室は大型のモニターが何個か設置されており、皆がしっかり映像を見ることができるようになっていた。前日の夜にももらった論文を読んでいたので、しっかりと観察し、理解することができた。終了時刻の16時になり、お世話になったエキゾチックの方々にお礼を述べ、バスでホテルに戻った。夜は永田先生の車で射撃場やベトナム料理屋に連れて行ってもらった。射撃は初めての経験で楽しかった。

< 8月18日土曜日 >

この日、午前中はフリーで午後からはジョージアの学生主催のパーティーがあった。午前中は獣医学部の基礎研究が行われている施設に行った。土曜日で休みのようで人は誰もいなかったが館内は開いてい中に入った。館内は病理や実験動物、解剖などの研究室があり、研究を紹介する掲示板や大学のサークルの情報などの掲示板があり、日本の大学とあまり違いはないように感じた。今度アポを取ってもつ

と詳しく見せてもらおうと思った。午後はパーティーはアメリカの学生とあって非常にテンションが高めで若干困惑したがたくさんの学生と会話ができて、楽しかった。ウォルマートで水着を買うつもりが間違えて短パンを買ってしまい、プールに入れなかったのは残念だった。非常に残念。夜はジョージアの学生と二次会に行った。次の日の朝は早かったので荒谷さんと途中で抜け出してバスでホテルに帰った。

< 8月19日 日曜日 >

午前中はジョージアの学生に誘われる形で荒谷さんとキリスト教のミサに行くことになった。てっきり教会に行くのかと思いきや、着いた先は映画館だったので驚いた。アメリカではミサは教会だけで行うというわけではではないようだ。ミサの参加者はジョージアの学生が多く若者が中心で、説教の合間に演奏が入ったり、若者向けのラフなものになっているようだった。ミサ終了後は、昼食をラストリゾートというアセズで一番の人気店で食べて、お土産を買ってホテルに戻った。午後は微生物学研究室の准教授の自宅でホームパーティだった。その家はとても広くプールやバレーボールコートがあり、日本の准教授との暮らしぶりの違いを実感した。

< 8月20日 月曜日 >

6時起床。7時10分にロビーに集まりバスで病院に向かった。ローテーションは2週目に入り、この日は腫瘍科に8時に入った。

エリアの構成は診察室、検査室が二つ、入院室も二つ、控室となっていた。掲示板にはその日の症例がLSA, MCT, PCTなどのように主に略語で書かれていた。控室に入ると先生と学生が朝のゼミを行っていた。リンパ腫についてのゼミであり、リンパ腫の解剖学的分類、診断、治療、ステージについて話していた。専門用語や略語が多い上に話すスピードも速いので理解しにくかったが、授業で習うような基本的な事項が多かったのになんとかついていけた。アメリカの少人数授業のやり方としては先生が一方的にしゃべり続けるという事は基本的に無いと思われる。学生に質問を投げかけながら話を進めていくスタイルであった。例えば、リンパ腫の治療はCHOP + L アスパラキナーゼを用いる多剤併用化学療法であるが、それを一つずつ学生に質問し、答えさせたり、リンパ腫のステージIからVまでの内容を答えさせるといったものだった。9時ごろから診察が始まった。問診や診断の補助は主に学生が行っており、診断や飼い主への説明は獣医師がやっていた。日本の大学病院はどうなのだろうか。最初の症例は警察犬(K9 ドック)の口腔内マス。CT検査が必要ということで、放射線科の永田先生が来

て、状況や治療法を話し合っていた。永田先生いわく、腫瘍科は他の科に比べ忙しいらしい。その後、麻酔後、CT検査が行われ、確かに巨大なマスを確認できた。放射線科の設備は馬用や牛用のCTやMRIがありお金がかかっていたが、北里にはあるPETの設備はなかった。昼食後は症例はなく、控室で学生やチーフと談笑した。自分が日本で行っている虚血再灌流障害の研究を紹介したり、チーフが行っている研究を紹介してもらった。すると、チーフが執筆したという炎症反応時の生理活性物質の生体内動向についての論文を印刷してもらった。NF- κ Bに関する論文だったが、チーフのお気に入りの論文だそうだった。

終了時刻の16時になり、バスでホテルに戻った。夜は永田先生の車で韓国料理屋と納豆など世界中の食材が並ぶスーパー、タピオカのドリンク専門店で連れて行ってもらった。

< 8月21日 火曜日 >

朝はいつも通り。この日も8時からゼミがあり、肥満細胞腫(MCT)についてだった。MCTについてまず、問診の取り方から始まり、症状、CBC所見、診断方法、病理所見、化学療法による反応性などについて、学生たちと意見を交わしながら説明し、教えていた。この日も多くの症例を見学させていただいたが、特に印象に残っているのが、猫のワクチン肉腫だった。ワクチン注射部位にできる肉腫で繊維肉腫が一般的で10万匹に1匹程度の割合で発症する。この猫は非常に肥満体形で日本ではお目にかかれなほど太っていた。治療法としては放射線療法が第一だが、ワクチン肉腫には放射線療法が効きにくく、効果がなければ断脚するしかないらしい。

飼い主はここに来る前に別の病院を訪れ、断脚しなければならぬといわれ、断脚はかわいそうだということで放射線療法の設備のあるこの病院を訪れたようだ。しかし、獣医師による説明の末、結局、この日は放射線治療は行わずに来週あらためて来院することだった。担当の学生はまた来院することはないだろうとぼそっと言っていた。終了時刻の16時になり、バスでホテルに戻った。時間があつたので基礎研究の施設へ行き、そこの図書館で専門書を読み時間を潰した。夜はDr.Hondalus 家でパーティーを行った。

< 8月22日 水曜日 >

6時起床。7時10分にロビー集合し、自分は実験動物施設を見せてもらうため、基礎研究の施設に向かった。ジョージア大学で扱っている実験動物は犬、豚、ラット、マウス、ウサギであるらしい。館内を見学し実験動物研究室での研究内容などを紹介

してもらった。実験動物施設には入れてもらうことはできなかった。その後、バスで病院に向かった。ローテーションも終盤となり、この日から二日間、神経科に入った。神経科のエリアは診察室、検査室、大型と小型で分かれた入院室、人の控室という構成になっており、検査室が他の科に比べ広く、また、神経疾患は動物の歩行様式の観察も不可欠なため、長細い廊下が配置されてあった。前日の午後一度、神経科にあいさつに行き、チーフが行っている研究を紹介してもらった。ここのチーフはバグ脳炎のMRIによる診断法を確立した人物らしく、その診断法が載った論文も印刷してもらった。最初の症例はポメラニアンで水頭症の患者だった。診断はMRIで行った。症状は落ち着きがなく挙動がおかしく人に噛みついたりするといったものだった。治療法は飼い主は内科的な利尿薬による治療を選択したが、獣医師によるとあくまで対症療法でしかなく外科的な治療をしなければ治らないと言っていた。その後、11時ごろに控室でゼミが始まった。ゼミの題材はこの日の午後の症例である椎間板ヘルニアであった。Hansen I型やII型といった病態生理、頸部と腰部の発症部位、頸部ヘルニアと腰部ヘルニアの各ステージにおける症状と治療法、MRIによる診断法、外科的治療法について、先生が質問し、学生が答えるという形で進んでいった。二日間の見学で症例はダックスフンドの椎間板ヘルニアが一番多かった。日本の病院ではどうかかわからないが、やはり神経疾患といえば椎間板ヘルニアが多いのだろうか。その後はジョージア大学のカリフォルニアとプエルトリコの学生に着いて行って様々な症例を見させてもらった。神経疾患は体中の様々な器官と関係しているため、頻繁に他の科でも検査を行っているようだ。

< 8月23日木曜日 >

6時起床。7時10分にロビーへ行き、この日も基礎研究施設を見学した後、バスで病院へ。

最初の症例は凶暴で活発的な症状を示すチワワの診察だった。もしや狂犬病では？と疑った。このことを獣医師に尋ねると狂犬病の疑いがあれば、大学病院ではなく保健所などの他の施設に回されると言われた。チワワはその後MRI検査を行った。11時頃、ゼミが始まった。内容は脊髄反射、下位運動ニューロン (LMN)、上位運動ニューロン (UMN)、脊髄疾患の局所診断とCSF検査について。前日と同じように質問形式で進んでいった。その後は昨日と同じように二人の学生に着いていき、さまざまな症例を見学させてもらった。小脳や脳神経の異常の疑いがあり、眼科で眼検査を行ったり、動物の聴力を検査するオージオメーターのようなものまで授業

で習ったこともないようなことも見学させてもらった。研修を通じて症例数は神経科が一番多かった。

最後にダックスの椎間板ヘルニアのT13-L1の左側片側椎弓切除術を見学させてもらった。手術は術者と助手は学生が行い、隣でチーフが助言するといった形で行われていた。16時になり、皆で大学の方々にお礼を述べた後、バスでホテルへ、その後ジョージア大学獣医学部学部長の自宅でホームパーティを行った。自宅に農場や池があって凄かった。

< 8月24日金曜日 >

6時30分起床。研修も全日程を終え、この日はアトランタに向かいコカ・コーラ博物館、アトランタ水族館、CNN本社を一日かけて観光し、アトランタのホテルに泊まる予定だ。

7時にロビーに集合しバンでアトランタに向かった。2時間ぐらいで到着し、まずはコカ・コーラ博物館へ。コカ・コーラの歴史の紹介や3Dシアター、世界中のコカ・コーラ製品の試飲、お土産ショップがあった。次はアトランタ水族館で、ここの目玉はアメリカー巨大な水槽で、ジンベイザメが3匹泳いでいた。イルカショーも見た。CNN本社は17時閉館で間に合わなかったが、社内の飲食店やお土産屋は開いており、そこで夕食を食べた。その後、ホテルへ向かった。一日とても楽しかった。

< 8月25日土曜日 >

この日のフライトで帰国。アトランタ空港についてお土産探しのため空港内の電車に乗って国内線のエリアに行ったがたいしたことはなく結局、国際線のフロアでお土産購入。買ったお土産は、高額16ドルのトランプ大統領が印刷されたパッケージのチョコレートとモンスターエナジー。その後、機内へ乗り込み、行きと同じくずっと映画三昧、映画5本鑑賞。一睡もせず。しかし、ここで事件発生。機内で糖尿病患者がインスリン注射の誤注入のようで低血糖発作、危機的状況。急遽、アラスカ、アンカレッジ空港へ着陸。

こうしてアラスカのホテルに一晩、滞在することになった。アラスカの気温はジョージアよりもずっと低く、気温差や時差ぼけもあり頭痛を起こし、体調が悪くなったが、ホテル周囲を散策したり、お土産を購入したりしてアラスカを楽しむことはできた。

26日は15時過ぎに飛行機に搭乗して7時間ぐらいのフライトで成田空港に到着し、帰国した。

最後に、僕自身、初の海外ということもあって不安もありましたが、同行教員のお二方、永田先生、共に研修に参加した皆さん、ジョージア大学の方々の助けもあり、非常に充実した意義のある研修にな

りました。

小松 誠高 Masataka KOMATSU

8/11 (土)

前日は東京駅の近くのホテルに泊まり、朝バスに乗って成田空港に向かった。昼に成田空港に集合し、持ち物や Wi-Fi の手続きなどをみんなで確認した。ジョージア大学でお世話になった学生に配れるように、去年行った先輩に教えてもらった外国人に人気のお菓子、カントリーマアム、チロルチョコきなこ味、KitKat 抹茶味、蒟蒻畑を買った。出発前最後に和食を食べようという事になり、安藤先生に寿司をご馳走になった。飛行機に乗ると想像していたより席が狭く、12 時間もここで耐えられるか不安になった。CAさんはほとんどアメリカ人で、注文する時も英語でしなければならず、いよいよアメリカに行くのだという実感がわいてきた。

アメリカに着陸してからは問題もなくスムーズに空港を出る事ができた。そこからは山口大、鹿児島大と合流し、バスに乗ってジョージア大学へ向かった。バスから景色を眺めていると高速道路が 6 車線あったり、家どうしの間隔や庭が広がったりして、テレビや映画で見たアメリカと一緒にだと思って少し感動した。日本のように狭いところに密集しているような雰囲気とは全く違って新鮮だった。ジョージアセンターに到着し、受付でチェックインを済ませた。受付のスタッフはゆっくり話してくれて聞き取りやすかった。

8/12 (日)

朝、ホテルのチャーターバスで Mama's Boy にランチを食べに行った。支払い方が分からず、みんなで周りを見渡しながらか他のお客さんの真似をした。初めは伝票にカードを挟んで渡し、次に来た 2 枚のレシートにチップとサインを書いて、そのままテーブルに置いておけば良いことが分かった。昼はジョージア大学の学生にスーパーへ連れて行ってもらい、水やカップヌードルなど 1 週間分の食料を買った。牛乳が洗濯用洗剤のような容器に入っていて、ここでもアメリカらしさを感じた。夕方はダウントウンにホテルのバスで移動し、夕食の時間まで街を散策した。電信柱に犬の糞を捨てる用のごみ袋が置いてあったり、ところどころに小さな本棚があつて誰でも読めるようになっていたりして、アイディアが楽しかった。夕食は south kitchen + bar で食べ、pulled beef がおいしかった。

8/13 (月)

この日は丸 1 日自由で、アトランタに行くため朝 9 時ロビーに集合した。UVER を配車しようとしたがエラーが出て手配できず、ホテルのスタッフに相談したところ、日本人スタッフが知り合いのドライバーを呼んでくれた。一日中そのドライバーが自分たちのスケジュールに合わせて運転してくれることになり、本当にありがたかった。まずアトランタ動物園を訪れた。驚を間近で見ることができ、迫力があつた。一番奥にはパンダがいて、子供のパンダが動き回っていてかわいかった。次にファーンバンク自然史博物館を訪れた。子供向けのコーナーで展示の説明を読んだがほとんど理解できず、これからの 2 週間が不安になった。19 時頃にホテルに帰り、そのまま夕食を食べに Donna Chang's に歩いていった。アジア系の料理で、ほんとに安心できる味だった。帰り道、広場でパーティーをしていて、月曜日から騒ぐのはアメリカでは普通なのか不思議に思った。

8/14 (火)

朝ホテルからバスに乗って獣医学部へ向かった。昼ごはんを食べながら大学の事務の方と話す機会があり、初めは簡単な自己紹介などを何とかしていたが、話が途切れてしまうと、アメリカ人だけで話さようになってしまった。その後話しかけるタイミングが分からず、何となく聞いているだけになってしまったが、思い切って昼食のおすすめの場所を聞くと親切に教えてくれた。日本のように話しかけるタイミングはあまり考えずに、どんどん話しかけて言った方がいいと感じた。

獣医学部の学生に大学動物病院の案内をしてもらった。小動物の動物病院では、診察室が 40 部屋近くあり、それぞれが専門の検査室も兼ねていた。薬剤室では薬学部(人間用)の人が来ていることを知った。また、放射線治療や、入院食室、手術前の処置室など、全てにおいて北里大学とは比べ物にならないくらい規模が大きく、設備が整っていた。

夜は LongHorn でステーキを食べた。その後永田先生に酒屋に連れて行ってもらった。

8/15 (水)

エキゾチック 1 日目

今日から診療科の見学が始まった。麻酔室に連れていかれると、卵閉塞のカメレオンの気管挿管を行っていた。ボールペンの芯よりも細い気管チューブを挿入しようとしていたが、なかなか上手くいかず、最終的に留置針の外套を使うなど工夫をしていた。カメレオンは胸の動きが分かりづらく、ベンチレーティングされているかの確認が難しい事が分

かった。パルスのとおり方が初めて見た方法だったので聞くと、尾静脈にセンサーを当て、その信号をスピーカーから音として出している事を教えてくれた。オペ室に移動してからは、ジョークが飛び交い、オーケストラをかけながら手術をするなど、アメリカの自由な雰囲気を感じられた。開腹して閉塞していた卵を摘出していた。次の症例はウサギの橈尺骨の横骨折だった。ピンニングとラグスクリューで治す計画だったが、麻酔導入の段階でドパミンを投与しても血圧が上がらず、このままでは危険だということで手術は中止になった。リスクがあるのに無理に麻酔をしないという事を、先生が学生に話していた。ギプスで固定するだけの処置となった。昼食は、個人的に来ていた鹿児島大学の木下君とカレーを食べた。アメリカでは、こちらから話しかけないと、話して欲しくないと思われて、拒絶されてしまうという事を教えてもらった。部屋に戻ると、アマゾン鳥の爪切りを行っていた。学生が投与する薬剤を自ら考え、先生に相談して、自分で投与していた。

8/16 (木)

エキゾチック 2 日目

ペースメーカーを付けたフェレットが定期健診で来院した。鎮静してX線検査、エコー検査を行い、最近食欲がないという事だったが異常は見られなかった。ペースメーカーをフェレットに装着する技術もすごいと思ったが、その判断をする飼い主の愛情も大きいと感じた。虫歯によって頸部に膿瘍ができたウサギには、患部の洗浄後、ゲンタマイシンを染み込ませたガーゼを詰めていた。2 日おきに通って処置を受けていると聞いて、なぜ外科的処置をしないのか聞いたが残念ながら理解できなかった。帰り際、レジデントの先生に論文を渡され、明日行う手術の内容だから読んできたらいいよと言われた。

この日は学生について回ることが多かったが、1 つの症例に 1 人の学生が割り当てられ、学生が主体となって治療を進めていることに感動した。最初の問診も学生 1 人で行い、診断や治療方針も自分で考えてから先生にアドバイスをもらっていた。飼い主さんへの説明は先生が行っていたが、お返しから見送りまでは学生が行い、飼い主さんもしっかりコミュニケーションをとっていた。あまりのレベルの差に自分が情けなく感じるほどだった。

夜はビール工場に行った。ビール 6 杯分のチケットがついたグラスを買い、最近の流行りのサワーエール（すっぱいビール）を試し飲みした。ホテルに帰ってからは眠かったため、渡された論文は要約と図の説明だけ読んで寝た。

8/17 (金)

エキゾチック 3 日目

オウムの内視鏡検査を見学した。留置針を入れようとしたが失敗し、イソフルランで麻酔をかけて気管挿管していた。最後肋骨の尾側を切開し、そこから内視鏡を入れ、MIC 試験のため肝臓のバイオプシーを行っていた。今後の治療方針としてアムホテリシン B の吸入投与を考えていて、ケージの中に薬剤を充満させる吸入器を見せてもらった。最後の数時間は学生や先生と出身地などの話で盛り上がった。夜は永田先生に射撃場に連れて行ってもらった。反動が強くて狙うのが難しかった。

この 1 週間で、アメリカ人は人と人との距離が近いと感じた。診察では飼い主さんが悲しんでいる時に隣に座って肩に手を置いてあげていて、寄り添うやさしさを感じた。日本では礼儀を意識して堅苦しくなってしまうことがあるが、アメリカでは親切さや親しさを大事にしている温かい雰囲気があり、これはアメリカの良いところだと思った。普段の生活でも、すれ違った人と目を合わせてほほ笑むことが多く、日本のように知らない人とは目を合わせないようにしていると、無愛想な人と思われてしまうように感じた。

8/18 (土)

昼に起きて、近くの your pie に歩いて行ってピザを食べた。

午後は獣医学生が集まる Wet'N Wild Party に参加した。中庭ではお酒を飲んでから滑り台を滑って帰ってくる競争をしたり、室内ではピンポン玉を使ったテーブルゲームを教えてもらったりした。普段の英会話では伝え方が難しく打ち解けられなくても、一緒にゲームをすると楽しさを分かち合えて嬉しかった。夜はカラオケとナイトクラブに連れて行ってもらい、学生と歌ったり踊ったりして楽しかった。数十年前の洋楽が流れても若い学生がのりのりで歌って踊っていてびっくりした。

8/19 (日)

朝から永田先生の車に乗って、アトランタの観光地であるストーン・マウンテンに連れて行ってもらった。これは世界最大の花崗岩の一枚岩で、近くでみると迫力があつた。周囲は公園のようになっていて、ジョギングしている人がたくさんいた。アメリカでは午後は教授の家でホームパーティに参加した。プールやバレーボールコートもあり、みんなで泳いだりバレーボールをしたりして楽しんだ。地下室には教授の趣味の鉄道模型があり、部屋いっぱいにめぐらされた線路をミニチュアの鉄道が走っていて見ごたえがあつた。

8/20 (月)

軟部外科 1 日目

朝のミーティングで、先生達と担当の学生が患者の状態、今後の治療方法について話し合っていた。続いて、先生が胃瘻チューブの設置術の説明を始めた。麻酔のかけ方、切開する場所、縫合の仕方、術後管理で気をつけることなどについて先生が質問し、生徒達が自由に発言していた。間違える事を恐れず、生徒達の間でも議論していたのが印象的だった。先生と生徒の距離が近いと感じた。

その後はオペが 2 つ入っていたので手術室に移動した。手術室は 10 部屋ぐらいあり、どの部屋でどんな動物が何の手術をしているのかが一つのモニターでみられるようになっていた。1 つ目は舌にエプーリスのできたミックスの大型犬の、舌の腫瘍除去手術を見学した。腫瘍を剪刀で切除し、縫合した後、頸部を切開して栄養チューブを通していた。2 つ目に見た下顎に口腔内腫瘍のあるボストンテリアは、触診や CT 検査で転移が確認され、バイオブシーを行っていた。

夜は石川先生と数人でダウントウンに行き、クラフトビールのおいしいお店でビールについて教えてもらったり、獣医学教育の将来について話したりした。

8/21 (火)

軟部外科 2 日目

この日は 1 日中オペが入っていたので、オペ室間を自由に歩き回ってオペを見学させてもらった。

まず濾胞性細気管支炎の犬の、肺葉切除を見学した。病変部のある右後肺葉を見つけるのに苦労していて、水を入れて肺を浮かせて取り出していた。切除部の近位は、ステープラーで 1 回挟んでいるだけだった。次に右大動脈弓遺残症の 2 ヶ月のゴールデンレトリバーの手術を見学した。術者の手元が映るモニターを見ていたが、術者が右大動脈弓を見つけ出すまでの手際が良すぎて、あれが大動脈弓だと分かった時には既に結紮が終わろうとしていた。次に上顎骨骨肉腫のブルドッグの上顎骨切除 (partial maxillectomy) を見学した。最後に肛門嚢アポクリン腺癌 (AGASACA) のキャバリアの、肛門嚢摘出術を見学した。どのオペでも和気あいあいとした雰囲気だった。学生が失敗や間違いをしても強く怒られず、大丈夫、もう一回やってみようなどと励まされていて、いい環境だと感じた。

スケジュールでは明日と明後日は腫瘍科を見学する予定だったが、帰る前に腫瘍科と眼科の先生にお願いしに行き、明日は眼科を見学させてもらえる事になった。

夜は教授の家のパーティーに参加した。庭のコー

トでバレーをしたが、永田先生の巧みなサーブと安藤先生の強烈なスパイクにやられて負けてしまった。

8/22 (水)

眼科

診察で行っていた基本的な検査は STT、フルオレセイン染色、眼圧測定、眼底検査、スリット検査などで、日本で行っている事と全く同じだった。スリットランプの脇に立つと先生の見ている像が見えるようになっていて、一緒に見ながら症例の説明をしてもらった。

角膜潰瘍と虹彩嚢胞のある犬、色素性ぶどう膜炎のゴールデンレトリバー、黄斑浮腫の猫

他の動物病院での腫瘍切除術の失敗により来院した犬は、目が閉じられなくなっていた。あまりにも酷いため適用可能な治療方法が少なく、先生達もどうやって治療するか途方に暮れている様子だった。結局その日に結論は出なかった。

馬の眼検査を初めて見た。スリット検査時の瞬きを防ぐため、眼瞼に局所麻酔を筋注していた。角膜に嚢胞ができていたが、原因不明ということだった。

13 歳の犬の、眼のエコー検査画像見せてもらいながら、白内障と硝子体変性の特徴的な所見を教えてもらった。

夜は Blind Pig Tavern で、学生と一緒に食事をした。アメリカ人がよく使っている Absolutely と Exactly の意味と使い方について聞くと、Absolutely は良い意味でも悪い意味でも強調する時に使う言葉で、Exactly は期待していた答えがちょうど帰ってきた時に使う言葉だという事を教えてもらった。

8/23 (木)

腫瘍科

朝は永田先生の放射線治療の講義を受けた。午前中で診療が終わってしまったため、病院内を歩いた。夕方に副学部長の家へホームパーティに行った。家が大きだけでなく、大きな湖やどこまで続いているか分からないほど広い牧場もあった。アメリカの学生もこの広さは普通では有り得ないとびっくりしていた。ご飯を食べながら今まで案内してくれた学生たちと話していて、多くの学生がいろんな国に行っていることが分かった。ヨーロッパ、アジア各国の話の聞いていて、自分もいろんな国に行つて文化の違いを感じてみたいと思った。

ホテルに戻って、永田先生とお別れをした。

8/24（金）

朝からアトランタに移動して観光した。コカ・コーラ博物館にはコカ・コーラ社が世界各国で販売しているご当地ジュースを飲めるコーナーがあった。おいしいのは片手で数えられるぐらいしかなく、あとは変な味ばかりだった。ジョージア水族館はディズニーランドを思わせるような構造で巨大だった。特に、大きい水槽とその中をくぐるトンネルは圧巻だった。最後に CNN を見学した。閉館間近だったため詳しくは見られなかったが、世界一長いエスカレーターがあった。CNN の建物内にあるレストランで、最後はアメリカらしくステーキを食べた。Uber を呼んで空港近くのホテルに向かった。

8/25（土）

アトランタ空港は買い物できるお店が手荷物検査を超えた先にしかなく、まず荷物の預け入れをした。順調に離陸し日本に向かっていたが、機内で急病人が出たためアラスカに引き返した。着陸した後、このまま東京に向かうかは未定のため機内で待機するようにアナウンスされた。それから 1 時間後に、機長の勤務時間が規定を超えるため今日は離陸しないというアナウンスがあり、飛行機を降りた。そこから順番に案内され、バスでホテルに向かった。アラスカは肌寒かったが、自分たちは完全に夏の格好だったためなおさら寒かった。それにもかかわらずバスの中は冷房がついていて、アラスカの人にとってはこれでも夏なのかとびっくりした。ホテルに着いた時にはアラスカに着陸してから 5 時間近く経っていてへとへとだった。預け荷物は返してもらえなかった。着替えを全て預け荷物に入れてしまっていたため着替えられず、手荷物に入れておけばよかった。

8/26（日）

ロビー集合時刻まで、ホテルで朝食を食べ、お土産屋さんを見た。サーモンとヒグマやオーロラのグッズが多かった。マトリョーシカもあり、昔ロシアの領土だった名残を感じた。バスで空港に向かい、離陸まで空港内を見て回った。ホテルでもそうだったが、ヒグマのはく製が飾られていて、獲った人の名前と西暦が書かれていた。一泊だけだったが、良い経験ができた。予定より 1 時間以上遅れて離陸し、やっと成田空港に着いたときは安心した。

藤岡 友星 Yusei FUJIOKA

私が米国三大学夏季研修で訪れたのはジョージア州立ジョージア大学獣医学部である。ジョージ

ア大学はジョージア州の州都であるアトランタから車で約 2 時間かかる、Athens という町に位置する。この研修では主にジョージア大学獣医学部の大学病院（Teaching Hospital）の見学をした。その他にも先生方や student ambassador を中心とした多くの方々に歓迎パーティーなど様々な行事を行っていただいた。この報告書ではジョージア大学の Teaching Hospital や現地の方々との交流について書こうと思う。

成田空港からアトランタ国際空港までの飛行時間は 11 時間であった。私たちはデルタ航空を使った。座席はみんなバラバラだった。しかし私は安藤先生と隣だったので、ビールで乾杯させて頂いた。機内は冷房がかなり効いているため、長袖長ズボンでの搭乗をお勧めする。エコノミーシートなので、ネックピローを持参すれば首を痛めなくて済むと思う。私はアトランタ国際空港での入国審査で泊まる場所を聞かれ、Georgia Center（ジョージア大学内にあるホテル）と答えてしまった。留学で入国すると勘違いされ物凄い疑いの目をかけられた（留学の場合はビザが必要）が、日本語対応の係員を呼んでもらえたため何とかだった。泊まる場所は Athens（町の名前）と答えるべきだった。

アメリカに到着した 8/11（土）から Teaching Hospital での研修が始まる 8/14（火）まで 2 日間の余裕があった。8/12（日）は午後 student ambassador の案内でグロセリーストア（大型スーパー）に連れて行ってもらった。研修中は朝 7 時にホテルを出発して Teaching Hospital に向かうので、ここで朝ごはんになるものを購入しておいた方がいいと思う。私は水を入れてレンジでチンすると出来上がるマカロニチーズと、飲むヨーグルトを買った。お土産にするお菓子類もここで購入すれば、帰りの空港で買うよりも安く済むのでお勧めである。アメリカはクラフトビールの種類が多く日本よりも圧倒的に安かった（6 本で \$6 程度）。しかし全部 6 本 1 セットで売っているため、数人で何種類か買って交換して飲んだ。日本のビールより苦みが少なく私の口に合うものが多かった。8/13（月）は一日フリーだったので、アトランタ動物園とファーンバンク自然史博物館に行った。移動手段がなかったが、ホテルの受付の日本人の方が Uber のドライバーと交渉してくれて一日専属でアトランタを案内してくれることになった。アトランタ動物園は勾配がきつく結構疲れてしまい、次に訪れたファーンバンク自然史博物館で視聴した映画中に寝落ちしたのが悔やまれる。鹿児島大学と山口大学の人たちは MLB の観戦に行っていた。

2 週間の行程のうち、大学病院に行ったのは 8 日間だった。1 日目は Teaching Hospital の見学をし、

残り7日間で3つの診療科を見学するシステムである。私はOncology（腫瘍科）、Large Animal Surgery（大動物外科）、Exotic, Wildlife & Zoo Clinical Medicine（エキゾチックアニマル）を見学した。

8/15（水）～8/17（金）の3日間、Oncologyを見学した。Oncologyでは4年生（日本でいう大学院4年生）と先生が1匹の入院患者を担当し、日々の身体検査や飼い主への問診・説明を行う方針をとっていた。診察室には先生と学生が一緒に入り、問診を行っていた。先生の問診が終わった後、先生は診察室を出て学生は一人で飼い主から話を聞いていた。その後、学生は先生と自分の担当患者の病状や今後の治療方針についてディスカッションをする。治療に関する飼い主への最終同意は先生が行っていた。学生一人ひとりが自分の患者の身体検査・神経学的検査・CBCを行い、飼い主と問診し、先生に説明するため、自分から積極的に勉強しなければいけない環境だった。しかし、臨床の現場で使う知識を集中的に記憶できる環境なので卒業してすぐに即戦力として働けるだろうと感じた。治療方針を決める時は放射線治療専門医である永田先生が時々来て、oncologyの先生とディスカッションしていた。永田先生は他の先生と生徒の会話の内容をワードに打ち込んで私に説明してくれて、大変ありがたかった。内容としては脾臓に腫瘍が転移した可能性があるから追加の検査を実施し、抗がん剤による治療を行うべきかどうかというものだった。学生のうちに臨床獣医師と同じレベルの会話をしていることに驚いた。午後はその日診察した症例について学生が先生に報告し、討論するroundが行われる。変な緊張感はなく、終始リラックスした雰囲気での討論が行われた。時々、先生からクイズのような質問が学生に投げかけられていた。学生はその質問に答えて自分の知識を定着させている印象だった。

2日目は9時ごろからラウンドが始まった。内容は抗がん剤についてだった。ビンアルカロイドや白金錯体などの抗がん剤の適用や副作用について、先生が生徒たちに質問を投げかけながら説明していた。出てくる抗がん剤は北里の講義でも習ったものが多く、ある程度内容は理解できた。日本でのこれまでの勉強が役に立っているんだと実感できた。日本との違いは、先生とのディスカッションの中で自分の知識をアウトプット出来る点だと思った。アウトプットによってより理解が深まるので自分も知識をアウトプット出来るような勉強法をしていきたいと感じた。

Clinical rotation 3日目、金曜日は病院全体として受け入れる症例数が少ないらしい。何をしようか迷っていたら、病院全体のラウンドがあるとVTさ

んに教えてもらった。ラウンドは授業が行われる講義室で行われた。他の科を見学してる北里生や鹿児島、山口大学の人たちもこの講演を見にきていた。今週の講演のトピックはエキゾチックアニマルについてだった。2人の学生が研究発表と症例発表を行った。1人目はイグアナへの抗生物質投与に関する研究発表だった。イグアナに抗生物質（トリメトプリム、スルファメトキサゾール）をIVまたはPOで投与し、薬物動態学・薬力学的解析を行っていた。2人目は魚に外科手術を行った2症例についての発表だった。魚の左背側筋肉内にできた腫瘍を外科的に摘出する症例と、魚の脊椎奇形の症例だった。2人とも発表中に笑いを入れたり、終始明るい雰囲気の発表だった。講演が終わりoncologyに戻った。しかし、診察が少ないのでこれまでの日誌を書くなどの作業を行った。

8/20（月）、8/21（火）の二日間はLarge Animal Surgeryの見学をした。Large Animal Surgeryのround roomが分からず事務の方に教えてもらったが、勘違いされてanesthesia（麻酔科）に連れていかれた。麻酔科では吸入麻酔の講義が行われていた。内容は4年後期の麻酔救急学と被っていたので、ある程度は理解できた。講義終了後、自力でLarge Animal Surgeryのround roomを探したが、間違えてLarge Animal Internal Medicineのround roomに入ってしまった。アメリカは馬が多く、診察に来る動物も馬が多かった。ラマなど日本ではマイナーな動物も入院していた。入院している馬を見ていたら、鼻先を使って器用に草を食べていた。こんなじっくり馬を観察する機会は今までなかったので感動した。馬で多い症例はlameness（跛行）だった。跛行検査では①常歩の観察、②常歩中に尾を左右に引っ張る検査、③渦巻き状に歩かせる、④道路の端にある段差を歩かせる、⑤斜面で頭を下げた状態で歩かせる、など様々な検査をしていた。馬の膣内視鏡の検査の様子も見学させてもらったが、どんな病気かは分からなかった。膣内部には液体が貯留し、陰唇は開閉していた。食道内腔の腫瘍の馬の症例では、内視鏡検査が行われた。喉頭の吻側の腹側面に表面がぼこぼこした腫瘍が確認できた。扁平上皮肉腫の疑いがあったのでbiopsyをしていた。最も印象的だったのは学生も獣医師も女性が多いということだった。特にLarge Animal Internal Medicineは多く、ほとんどが女性で男は私と学生の2名だけだった。妊娠中でかなりお腹が大きくなっている獣医師もいた。日本では大動物は男の仕事というイメージだが、努力次第で女性でも働けるんだと感じた。8/21（火）、もう一度事務にLarge Animal Surgeryのround roomの場所を教えてもらった。鹿児島大学の同行教員である石川先生と見

学することになった。Round room に到着後すぐ、馬の蹄鉄を外す作業を見せてもらった。MRI を午後に撮影するためだった。MRI は全身麻酔下で行う。麻酔は倒馬室で行われ、クレーンで吊るされて隣接する MRI 室に搬送される。Resident（専門医を取得するために Teaching Hospital で働いている獣医師）の先生を中心に VT を含め総勢 10 名程度での手際のよい作業だった。MRI 終了後は倒馬室の隣にある覚醒室で馬が起きるまで待機する。覚醒室の上には部屋があり、上から見下ろせるようになっている。馬にはロープがつけられ、起き上がるときは上の部屋から二人で馬を引っ張り、立ち上がらせる。石川先生によると、鹿児島大学での方法より馬にも人にも安全な方法だと言っていた。二つ目の症例は後肢飛節頭側を負傷した馬の術後管理だった。肉芽が増生した部位をカミソリでデブリードしていた。出血が多く一見これで大丈夫なのかと思ったが、こちらでは一般的な方法らしい。午後は喉頭片麻痺の症例の馬の内視鏡検査を行っていた。

8/22（水）、8/23（木）は Exotic, Wildlife & Zoo Clinical Medicine を見学した。最初は翼を骨折した鷹の術後管理を行っていた。創外固定されており、ハイドロコロイドジェルをピンの刺入部に塗って Vetrap で覆っていた。その後死んだマウスを口に押し込んで給餌していた。次は guineapig に処置をされると言われたが、何の動物かさっぱり分からなかった。連れてこられた動物も毛のないネズミのようだった。調べたらモルモットだとわかり、変貌ぶりに驚いた。普通は毛があると言われた。足を怪我していたが、毛が無くなった理由は分からなかった。メロキシカムを s.c. し、注射器で強制給餌していた。昼食後、round room に戻ると午前中に術後管理をしていたタカに抗生物質を投与するかどうかが Resident と教授が激論していた。Resident の先生は抗生物質の増量を希望していたが、教授は副作用が分からないのでプロトコルで決まった量を投与するべきという議論だった。日本で見たら喧嘩と言ってもいいくらいの議論だったが、Resident も教授も対等に意見をぶつけている様子が日本とは異なると感じた。教授も頭ごなしに自分の考えを押し付けず、論文のデータを挙げて説得しようとしていた。二日目、卵詰まりの bearded dragon（アゴヒゲトカゲ）の身体検査をしていた。口腔内検査で異常が見つかって教授が呼ばれたが、ただの pigmentation（色素沈着）でみんな笑っていた。次に亀の身体検査を行っていたが、心拍測定の方法を覚えてもらった。亀の頭と前肢の間の皮の薄い部分に pencil probe を当てる方法である。このカメラは子供に殻に落書きされ投げられて殻が割れてしまったので、attachment で固定されていた。目の

検査もさせてもらったが、何を観察すればいいのかわからなかった。太りすぎて歩けない鶏が連れてこられて、安楽殺されていた。この鶏は metabolic bone disease だと言われた。安楽殺の際、何を投与したか聞いたらペントバルビタールだと言われた。KCl は血管外に漏出すると痛みがあり心臓を止めるだけだからストレスが大きい。しかしペントバルビタールは中枢抑制作用があるからこちらを用いていると教えてもらった。午後は Resident の先生が VT に exotic animal を扱う手技を教えていた。これは Basic exotic animal procedures として一枚のプリントにまとめられていた。フクロウ、鷹の保定方法から始まり、亀の採血など様々な手技を一对一で教えられていた。Round の最後にドナルドトランプを風刺するスライドがあり、教授にトランプについてどう思うか聞かれたが返答に困ってしまった。

8/24（金）にはアトランタ空港近くのホテルに移動したので、みんなでアトランタ観光をした。コカ・コーラ博物館、アトランタ水族館、CNN 本社が歩いていける距離に密集していたので、そこに行くことになった。コカ・コーラ博物館では世界中の国の限定コーラを試飲できるコーナーがあった。全種類飲もうとしたが、半分くらいでお腹がタプタプになってしまった。半分くらいがゲテモノだった。アトランタ水族館はイルカショーが有名なもので、水族館に行く前にネットから入場券とイルカショーの券のセットを購入して向かった。前売り券だったので中央付近の見やすい位置に座ることが出来た。CNN 本社には世界一長い一直線のエスカレーターがあったが、社内ツアーに参加しないと乗れなかったので断念した。CNN 社内にあるレストランでアメリカ最後の夕食を食べた。最後だから一番うまい肉を食べようと思い、\$ 50 くらいのステーキを食べた。人生初の熟成肉で 500 g くらいあったがあつという間に完食した。ホテルに戻り、何人かでホテルのロビーにある Bar で飲みなおした。Guinness が最高にうまくてはまってしまった。

8/25（木）、遂に日本に戻る日がやってきてしまった。無事荷造りも済み、忘れ物もなくホテルをチェックアウトできた。アトランタ国際空港では国際線ターミナルに残りゆっくり過ごす組と、国内線ターミナルに移動してお土産を購入する組に分かれた。アトランタ国際空港は国内線ターミナルと国際線ターミナルの間に地下鉄が走っており、移動することが出来る。私は国際線ターミナルに残ることにした。軽く朝食を済ませ、お土産屋で物色していると国内線組が戻ってきていた。聞くと、国内線ターミナルにはほとんど店がなかったらしい。国際線ターミナルのお土産屋もそんな種類も多くなく、値段も

高いのでスーパーで買った方が良かったと感じた。

搭乗もスムーズに済み、北里組は横一列で座ることが出来た。後は成田に到着して、実家に帰るだけだと思っていた... が、まさかの急病人によってアラスカのアンカーレッジ国際空港に到着地変更してしまった。更に、操縦士の勤務時間超過によって日本へのフライトは翌日の午後2時になった。初めての事態に戸惑ったが、しばらく経つと落ち着いてきてアラスカを目一杯楽しもうという気持ちになってきた。預けたキャリーケースは飛行機に載せたままにすることが伝えられ、機内に持ち込んだリュックに着替えがない人たちは絶望していた。私は運よく1セット分の着替えをリュックに入れていたので、パンツの替えがあって助かった。ホテルは航空会社が用意してくれて、ビュッフェ形式のディナーも頂くことが出来た。空腹だったのも重なり、ブルーチーズソースのパスタを大量に食べてしまった。長距離飛行の疲れも溜まっていた為、部屋に戻るとすぐに寝てしまった。朝もモーニングバイキングを無料で頂いた。レシートを見て\$40くらいで驚いた。ホテルにあるお土産屋の品揃えが豊富だったので、追加でお土産を買った。観光都市のアンカーレッジと観光に力を入れていないアトランタとの違いがよくわかる場面だった。空港では最後の思い出としてアトランタビールを購入し、無事日本に戻ることが出来た。

この研修で学んだことは多い。最も印象に残ったのは働いている人たちの笑顔と、真剣に議論をする姿だ。見ていただけの感想になってしまうが、みんな楽しそうに仕事をしていた。しかし、ひとたびスイッチが入ると目つきが変わって熱い議論を繰り広げる。治療方針を決める時に学生が教授に食って掛かっていく姿を私はヒヤヒヤしながら見ていた。こういう文化、考え方は日本では少ないと感じる。これだけ獣医師が議論を持てるのは、雑用が少ないからだと思う。掃除員も多く、VTも豊富だから可能なのだ。こういう職場には憧れるが、今の日本では難しいなと感じた。

海外研修の2週間は長いようであつという間に過ぎた2週間でした。毎日が刺激的で、どんなに疲れていても6時に自然と目が覚めてしまいました。是非この研修を来年以降も続けてほしいと思います。最後に、陰ながら私たちの研修をサポートして頂いた国際交流委員会の先生方、UGAでお世話になった皆様、永田先生、同行教員の安藤先生・石川先生、鹿児島・山口大学のメンバー、北里大学のみんな、この研修に関わったすべての人に感謝します。本当にありがとうございました。

2018年ジョージア大学同行教員

獣医病理学研究室

安藤 亮 Ryo ANDO

はじめに、Dr. Hondolus、永田先生、Ms. PenningtonをはじめとするUGAのスタッフおよび学生アンバサダーの方々、鹿児島大、山口大生の同行教員である鹿児島大学の石川真悟先生のサポートにより非常に充実した研修となり、無事終えることができましたことを感謝いたします。研修のため、ご尽力いただいた国際交流委員会の皆様に御礼申し上げます。私個人としましては、お忙しい中、剖検や病理講義、実習等々を快く見学させていただきましたDr. SakamotoをはじめとするPathology Departmentの先生、スタッフの方々にも合わせて感謝申し上げます。

【出国】

フライトの時間が16:30であったため、成田空港への集合時間を14:00としていたが、自身も含め12:00にはすでに全員到着しており、皆で昼食をとった。ジョージア大の研修には鹿児島・山口大のグループも参加するが、事前のやりとりにより今回は同じ便にしたとのことで、成田空港にて石川先生たちと合流してLINEを交換し、現地到着後はホテルまで行動をともにした。フライト自体はアトランタまでの直行便のため、乗り継ぎがなく楽であった。昨年度の石野先生から情報をいただき、アトランタ空港(Atlanta)から宿泊先のジョージアセンター(Athens)へは事前に予約していた乗り合いのシャトルバス(Groom transportation)にて移動した。この際、シャトルバスの乗車場は国内線側にあり、国際線側から空港のシャトルバスで移動する必要があるため注意が必要である。実際、到着直後はそのことに気づかず移動が遅れ、乗車予定時間ギリギリとなってしまった。それ以外は大きな混乱もなく、ジョージアセンターにチェックインできた。

【交通手段】

ジョージア大学構内は無料バスが走行しており、研修先の動物病院へはこのバスを利用した。バスの経路を理解すれば構内の移動やダウンタウンへの行き来にも利用でき、非常に便利である。UGAの専用アプリがあり、近くのバス停やバスの到着時刻などもわかるため、ダウンロードをしておくといよい。

近距離(2マイル以内)であればホテルのシャトルバスも利用可能で、通常は10:00まで、金、土であれば深夜まで送迎可能である。フロントで予約し、帰りのピックアップ時間は基本的に電話での連絡となるが、ホテルの日本人スタッフの方がLINE

ID を教えてくださり、初回利用の時は LINE で帰りのシャトルをお願いすることができた。

アトランタ方面へ移動する場合は移動手段がほとんどなく、観光なども考えると不便である。自家用車以外では、空港への行き帰りに利用したシャトルバス（Groom Transportation）か、Uber がある。Uber はアプリから配車予約する一般車両によるタクシーサービスのようなもので、事前に金額がわかり、比較的低価格で利用可能である。アプリのエラーによりうまく使えなかったが、ホテル日本人スタッフがドライバーと直接交渉してくださったことで、最初の休みの際に利用できたのは幸運であった。学生の行動力にも感謝である。

また、永田先生のご厚意により、学生共々、アトランタ方面での食事や観光に連れて行っていただいた点は大変ありがたかった。

【通信環境】

ホテル内および大学構内の大部分は Wi-Fi が利用可能である。しかし、大学構内の Guest 用 Wi-Fi を利用するには、所定のメールアドレスに送られる認証コードが必要で、認証コード確認の際、結局、別の通信手段が必要となる。学生や石川先生、永田先生との連絡は LINE を利用したが、いずれにしても連絡するにはポケット Wi-Fi や各携帯キャリアの海外利用設定などの何らかの通信手段が必要ということもあり、自身はドコモのポケットパック海外オプションを利用した。

【研修、滞在等】

研修初日は、学部長、準学長との写真撮影、スタッフや UGA の学生を含めた会食の後、UGA の学生の案内で病院施設を見学した。動物の種類や数、勤務する先生やスタッフも非常に多く、設備もかなり充実しているようであった。日本と比べてスタッフが多いにもかかわらず、なぜ成立するのが気になり、別の機会に永田先生に聞いてみたところ、アメリカでは学費が非常に高く、また大学への寄付も日本と比べて多いとのことで、文化的な面での日本との大きな違いが感じられた。

Clinical rotation の期間中は各学生が事前に希望したローテーションに参加していたが、研修中の学生の話や表情から、非常に充実したものである様子が伺えた。自分自身は、初日に少し見せてはいただいたが、その後は先方をお願いして、学生の研修の間、獣医学部の建物にある病理の施設や病理解剖、獣医学部の学生の実習、病理のレジデントへのレクチャーの様子などを見学させていただいた。病理解剖は学生が解剖し、レジデントが所見を確認するスタイルで、動物が多岐にわたり解剖数も多く、病理

解剖前のカンファレンスなど、やり方として非常に参考になる点も多かった。実習も学生に積極的に意見を言わせ考えさせるような形式で、大変興味深いものであった。

研修期間中、UGA の教員宅でのパーティが 3 回ほど、学生アンバサダーの案内によるディナーが数回あった。お土産として、裂織りのコースター（十和田）や西陣織の写真立て（成田空港）、扇子など、細々したものを含め日本らしいものを複数準備し、ある程度の体裁は保たれたものと思われる。

研修期間中は大学の敷地内にある UGA ジョージアセンターに宿泊したが、一部屋あたり 1 泊で 100 ドルちょっと、13 泊分で 1400 ドルくらいになる。学生は 2 人一部屋で、チェックアウト時に 1 人ずつ合計金額を支払うこととなったため、3 部屋分を帰国後に頭割りし、過不足分を学生間で清算することとした。帰国前日のアトランタ空港近くのホテルでの宿泊は、旅行会社を通して航空券とともに清算済みであった。

【帰国】

帰国前日はアトランタ観光であったが、鹿児島・山口大グループと一緒に行動し、ジョージアセンターからアトランタ空港への行きに利用したシャトルバスで移動、空港から宿泊予定のホテルのシャトルバスでホテルへ移動、荷物を預けて、石川先生たちが予約してくださった Ubar で目的地へ移動といった流れであった。

帰国当日のフライトは、チェックインがそれなりに早かったためか、学生共々、座席は最後尾の席に横一列に固まって配置された。成田空港まであと 3 ～ 4 時間に到着といったところで機内に急病人が出たことにより、アラスカ州のアンカレッジ空港へ引き返し、緊急着陸することとなり、さらに機長の飛行時間制限により、その日のフライトはキャンセルでアラスカに 1 日滞在することとなった。空港から用意されたシャトルバスで滞在先のホテルまで案内され、航空会社の都合による遅延にあたるため、宿泊代、食事代を含む滞在費は全て航空会社の負担であった。さらに遅延のお詫びとして、デルタ航空のアメニティセットまで配布された。翌日の便のチェックイン方法がわからなかったが、実際は普通にチェックインするだけであった。その後、成田まで何の問題もなく到着し、帰国後は荷物の遅延もなく、大学へ連絡した後、現地解散とした。

以上、自身としては前職時、2010 年にシカゴを訪問して以来の米国滞在であった。同行教員として至らない点も多々あったとは思いますが、北里の学

生の行動力とサポートにより、滞在期間を無事に過ごし、研修を終えることができました。米国での非常に貴重な体験を共有できたことを感謝いたします。

Acknoeledgements

Dear everyone in UGA

I would like to thank everyone at the University of Georgia. Thanks to all of you, I had many wonderful experiences. I really enjoyed my stay for two weeks, so I wanted to stay there longer. It was a fast two weeks, but I learned many things that I can't learn in Japan. I will be trying to turn this experience into something positive. I hope that I will be able to meet everyone again!

Momoko Aratani

Dear everyone in UGA

Thank you very much for taking the training for two weeks. These two weeks have become very precious to me. Although I could not speak English very well, I enjoyed talking with the people of UGA. I will make use of the time spent at the UGA for my life in the future.

I am planning to go to the United States again, so I hope to see you at that time again.

Yusuke Oba

Dear everyone in UGA

Through my training at the University of Georgia, I was able to learn about the differences between the American and Japan University Hospitals by visiting various cases in the Department of exotic, Oncology and neurology, and it was a very fulfilling training.

I am deeply grateful to the people at the University of Georgia who have welcomed the training and planned the Tour.

Ayumu Kawasaki

Dear everyone in UGA

I had a good time and wonderful experiences

for two weeks. Before coming to America I was nervous, but I was able to live a fulfilling life with your cooperation. Everyone at UGA was kind. I am not good at English, but teachers and students explained many times until I understood. Thanks to them I could enjoy studying. Dr. Nagata and student ambassadors took us various sightseeing spots and shops, so I could feel american culture.

I never forget this experience. Thank you very much for everyone at UGA.

Masataka Komatsu

Dear everyone in UGA

I thank for your kindness and support during our stay. I enjoyed staying in UGA ,and had a lot of wonderful experience. I observed the oncology, large animal surgery, exotic, and wildlife & zoo clinical medicine. Everyone was working fun. I'd like to work in such a workplace in the future. Once again, thank you very much for everything.

Yusei Fujioka

Dear all the members of UGA

Thank you so much for all the members of UGA. We appreciate being able to have such a valuable experience with our two-week stay in UGA. I wish these experience will be very meaningful for our students in the future.

I am very grateful to everyone who provided valuable opportunities. I hope that these exchange program will continue in the future.

Ryo Ando, DVM, PhD



The University of Georgia®



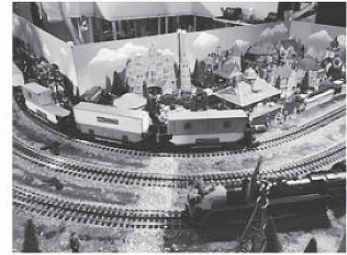


The University of Georgia®



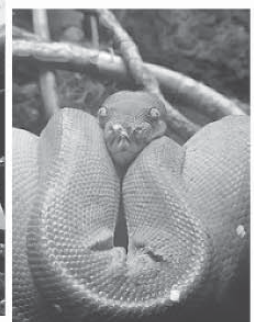
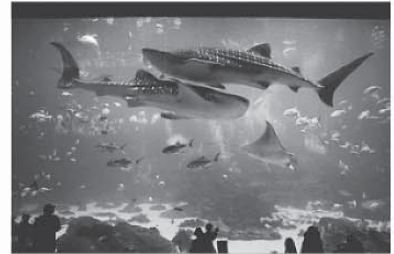
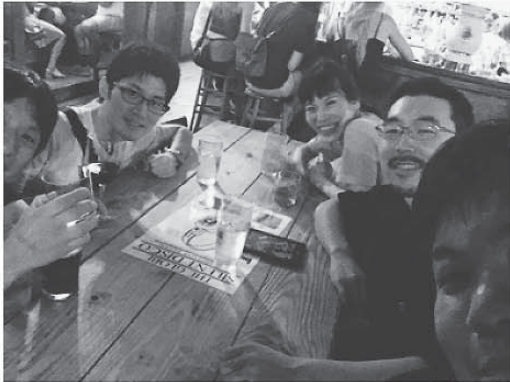


The University of Georgia®





The University of Georgia®





The University of Georgia®



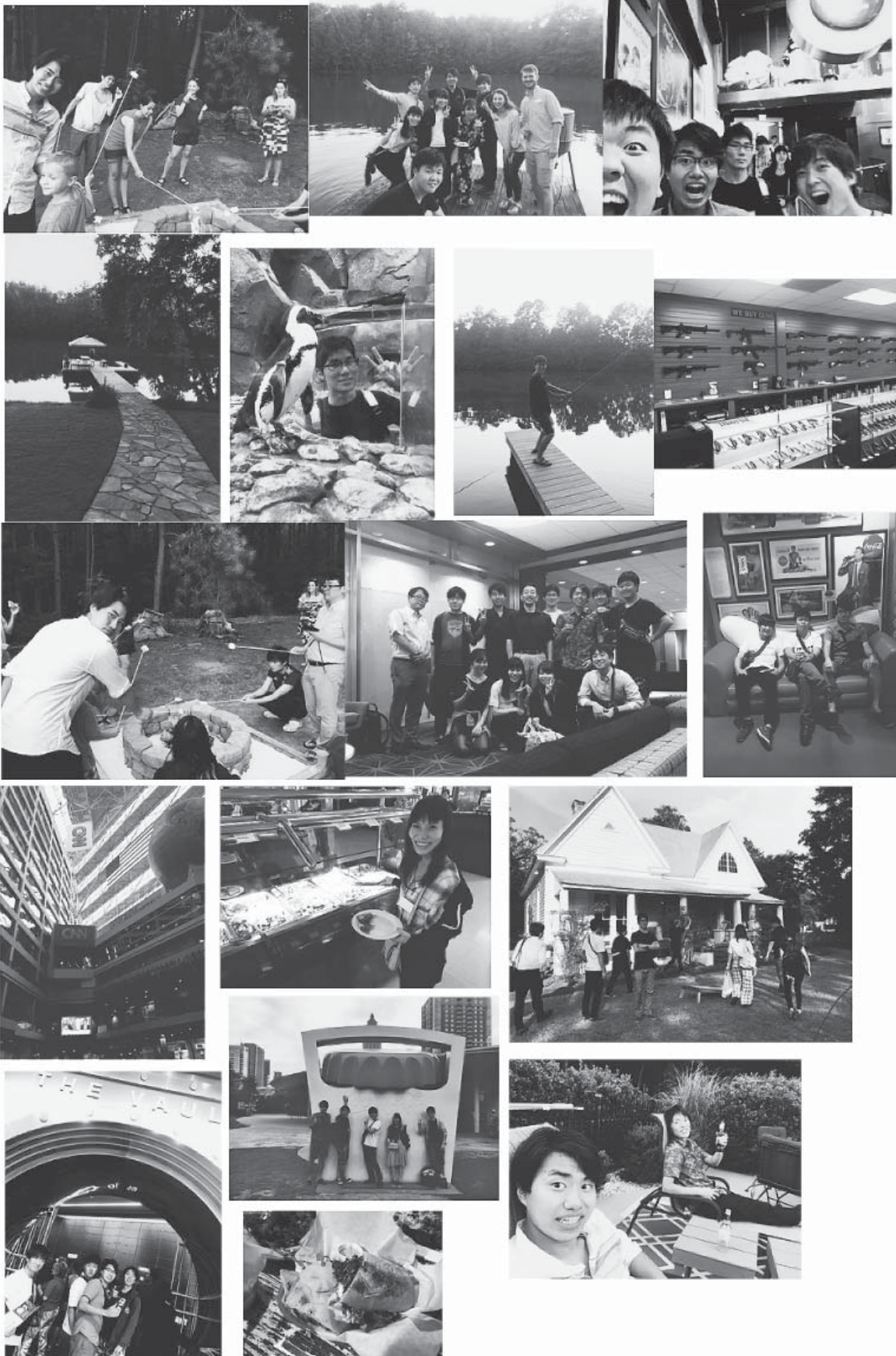


The University of Georgia®





The University of Georgia®



The University of Tennessee
College of Veterinary Medicine
August 25th – September 9th, 2018



Dr. Claudia A. Kirk (Associate Dean and Professor, UTCVM), Ms. Moemi Egawa, Ms. Chisato Hayakawa, Ms. Jun Hakozaiki, Ms. Yurina Fukuda, Ms. Maina Kaisho, Dr. Kazuichi Nakamura (Professor), Dr. James Thompson (Dean and Professor, UTCVM)

参加者一覧

同行教員：中村 和市 Kazuichi NAKAMURA

氏名	Name	所属研究室
江川 萌美	Moemi EGAWA	獣医病理学
改正茉侑奈	Maina KAISHO	獣医薬理学
箱崎 純	Jun HAKOZAKI	獣医寄生虫学
早川 知里	Chisato HAYAKAWA	小動物第2外科学
福田友理奈	Yurina FUKUDA	獣医微生物学

Pathology

Pathology には 1 番最初のローテーションで訪れました。私たちはだいたい 8 時には大学に到着していましたが、他の科では既に業務を開始しているのに対して、Pathology は 9 時や 10 時から始まるが多かったです。基本的な業務内容は剖検のみで、病理切片の作成は行いませんでした。後日聞いた話によると、検査専門の科があるらしく、そこで病理切片の作成・観察が行われているのかもしれませんが。1 日の流れとして、まずミーティングルームでその日に解剖する症例の紹介およびディスカッションを行ったあと、剖検室に移動して剖検を行います。ディスカッションでは、教授が症例の畜種や臨床症状などを提示した上で、考えられる病名や原因を学生に問いかけていました。思いついた学生が自由に発言し、先生や学生同士で活発に話し合っていました。

北里大学では、基本的に剖検する時は、多くても一度に 2 症例までしかしませんが、テネシー大学では、多数の症例を同時に剖検していました。大学全体の診療の規模が大きいと、その分、剖検にまわされる数も多いのではないかと感じました。また、私は直接見ることはできませんでしたが、クマなどの野生動物の解剖も行うということに驚きました。

私が一番驚いたことは、学生が主体となって剖検をおこなっていたことです。学生達は、畜種別のプロトコルの紙を見ながら、数組に分かれて自分たちで解剖を進めていました。先生達は、順番に各組を回りながら所見の確認や指導を行っていました。先生達のお手伝いしきれない北里での剖検との違いに衝撃を受けました。今回の研修で、いつも以上に剖検に関わることができました。

見た症例としては、子宮水腫 (Uterine edema) や高カルシウム血症 (Hypercalcemia) などがありました。どれも日本で解剖したことはなく、興味深かったです。

Farm Animal Medicine

このローテーションでは、人生で初めて直接ラクダを見ることができました。ペットとして飼われている子で、食欲がないため来院していました。原因としては、寄生虫の可能性は低く、ローソニア感染が疑われるそうです。普通にエサを置いておくだけでは食べてくれないため、できるだけ餌を食べてもらえるように、餌を食べやすい位置に常にぶらさげておいたり、手で餌を与えていたりしました。

蹄病の牛は、治療のために暴れないように保定枠

に縄などで固定されていましたが、この保定枠は電動で牛を横倒しにすることができ、処置が楽にできていました。女性や体格が小さい人でも、保定を無理せず出来るので、処置に集中することができていました。私は削蹄実習で牛が暴れて怖い思いをしたので、北里大学にもあったらいいなとうらやましく思いました。

1 日目の最後には、牛の安楽殺を見ました。先生が鎮静をかけたあとに、安楽殺用の銃で牛の額を撃って昏倒させた場面が、印象に残っています。安楽殺の方法は他にもあるのに、なぜその方法が選ばれているのか疑問に思いました。

Equine Surgery

この日は、手術らしい手術はありませんでしたが、馬の去勢を見ることが出来ました。牛などの去勢は鎮静のみで行うこともありますが、馬はきちんと麻酔をかけていたことが印象的でした。また、馬は本交配をすることが多く、去勢はあまりしないものなのと思っていたので、去勢することに驚きました。

また、嵌頓を起こしている馬に鍼灸治療を行っている様子を見学することが出来ました。刺した針に電気を流すことによって、筋肉深部や神経を刺激することで、運動を改善させるための治療でした。動物に対して鍼灸治療を行っているところを見るのは初めてだったので、とても興味深かったです。

他に、斜歯のために餌の食べ方がおかしくなっていた馬に対する、歯を削って斜歯を矯正する処置なども見学しました。

Exotics

このローテーションでは普段見ないような動物の診察を見ることが出来ました。動物園でしか見ないような大きなリクガメや、フクロウ、リス、カメレオン、アヒルなど、たくさんの種類の動物を見ることができました。テネシー大学では、野生動物の診察も受け付けているということで、その診察も見ることが出来ました。病院にいたリスの大方は野生の赤ちゃんリスで、栄養や水分補給を行ったあとはリハビリセンターへ送られていました。また、交通事故で甲羅の割れた野生のリクガメは、フックを甲羅につけてそれらをワイヤーで固定することで、甲羅を修復しようとしていました。

Exotics では、安楽殺することが多いように感じました。私が見ただけでも、両手を骨折したカメレオンや、翼をケガして飛べない小鳥、目が全く見えていないフクロウなどが安楽殺されていました。野生動物を診察する分、野生に戻せないと判断した場合に安楽殺するため、安楽殺が多いのではないかと思いました。

Small Animal Rehabilitation

リハビリテーションは北里大学にはない科なので、とても興味深く、楽しく過ごすことが出来ました。患者がこの科に来る理由や疾患は様々でしたが、使えていなかったまたは使っていなかった筋肉や関節を使えるようになるために、リハビリテーションを行っていました。例えば、肥満のために関節に炎症があるダックスフントは、**Water trade mill**を歩くことやプールで泳ぐことによって、減量と炎症の軽減を行っていました。

リハビリテーションの内容は、患者が飽きないよう工夫されたものも多く、簡単な器具で行えそうな物もあったので、ぜひ大学にも導入してみたいと思いました。

Orthopedics

最後のローテーションでした。見学した手術は3件で、TPLOの手術と下顎骨折の手術でした。TPLOは前十字靭帯断裂の手術方法で、大学の授業で術式は習っていましたが、見るのは初めてでした。2日間で2回見る事が出来ましたが、どちらも手術時間は短く、プレートの設置もレントゲン上はとてもきれいでした。また、下顎骨折の手術は、患者はネコだったのですが、顎が小さいため、使用するプレートもスクリューもそれに合わせてとても小さいことに驚きました。また、この骨折した下顎を3Dプリンターで作ったものをいただくことができたので、お土産にしました。

Holiday

平日とはうってかわって、休日は様々なアクティビティで楽しみました。具体的には動物園、野球観戦、ハイキング、ラフティング、ダウントウン散策などです。特に楽しかったのは動物園で、日本の動物園とは違った、広々として遊び心のある展示の仕方に感動しました。また、ラクダに乗ることができたのも嬉しかったです。ラフティングは思っていたよりも激流で乗っている時間も長かったので大満足でした。ラフティングに行く途中に食べたマックが、日本の物よりずっとおいしくて驚きました。日本よりもライブル店が多いからではないかと感じました。

Finally

今回の研修で、たくさんの方にお世話になって、充実した研修を行うことができました。研修を支えてくれた北里大学とテネシー大学の先生の方々、カーク先生、中村先生、同行したメンバー達に感謝したいと思います。本当にありがとうございました。

改正 茉侑奈 Maina KAISHO

8月25日に私たちテネシー組は成田空港に集合しました。日本円からアメリカドルに両替した後に集合場所に向かうと、前日に度数の高いお酒と激辛料理を食べたせいでお腹を壊している私と対照的に、中村和市先生はすでにサングラスをかけてはしゃいでいらっしゃいました。座席は残念ながらかたまってはいなかったのですが、私は腹痛のため席を通路側と代わってもらったため隣は**Moemi**でした。経由地のダラスまでの14時間のフライトでは映画を4本観ました。日本語の字幕がなかったため音声も字幕も英語だったので話はふんわりとしか理解できなかったし、あまり英語が聞き取れずアメリカに着いてからどうなることかととても不安になりました。飛行機での私のお気に入りのエピソードとして、機内サービスの時に客室乗務員のお兄さんが、**Salmon or French toast?**と聞くところを間違えて**Salmon or fish?**と聞いてしまったことです。すごくむくんだ足がそろそろ限界を迎える頃によりやくダラスに着きました。ダラスの空港は三沢空港からは考えられないほど広く、搭乗口を移動するのにモノレールのような乗り物に乗りました。ダラスから最終目的地のノックスビルまでは3時間のフライトでした。この飛行機の中で私は勇気を振り絞って隣のおじいさんにノックスビルの美味しいお店を聞いたのですが、伝わらなかったのか聖書のお話をされました。とても親切に話してくれているのはわかるのですが半分以上何を言っているのかわからず申し訳なかったです。しかし、彼はとても親切なことはわかりました。ノックスビルについた時点で日本は26日でしたが、時差的にアメリカはまだ昼でした。なんだか得をした気分です。しかし、ここでハプニングが起これ、**Jun**の荷物がダラスに残ったままで届いていない事態が発生してしまいました。先行きは不安でしたが、私たちはアメリカに浮かれています。荷物はホテルへ届けてくれるということで、これからお世話になる**Kirk**先生に挨拶をした後、とりあえずウォールマートという日本という西友的なスーパーに行き買い物をしてから、ホテル近くのメキシコ料理のお店でブリトーを食べました。この日、中村先生が天然を炸裂し、腕時計を上下逆さまにみて待ち合わせ時間に来ないという事件が起きました。

次の日はホテルで朝食をとったあと、**Kirk**先生に大学内を案内してもらった予定だったので、ホテルのロビーでお迎えの車を待っている間にまた中村先生が天然を炸裂しました。今回は、ロビーのソファに座っている私たちを取ろうとカメラを構えシャッターを切ろうとした時に自動ドアが閉まるという珍

事でした。ホテルの方にも他のお客さんにも笑われました。**Kirk** 先生に案内してもらった大学の設備は日本とは全く違いました。一番私が羨ましかったのはシュミレーションルームという部屋です。ここは獣医学科の学生ならいつでも好きな時に入れる場所で、中には気管挿管を練習できる模型や留置針の模型、麻酔器、縫合の練習台など様々なものがありました。また、他に日本との違いを感じたのは、大動物が馬とそれ以外の大動物に分けられていて、それぞれがとても広い設備だったことです。また、小動物もたくさんの科に分かれていました。大学をみて回ったあとは、大学のキャンパス内にあるピザ屋さんでお昼を食べました。もともとのサイズが大きかったことと私のお腹の調子がまたしてもよくなかったためお持ち帰りしました。ただ、とても美味しかったです。その後、私が父と弟にお土産として頼まれたスポーツチームの T シャツを探すため、大学内のスポーツショップに行ったのですが、そこは大学のアメフトチームのグッズしか置いていませんでした。そこで、みんなで色違いのパーカーを買い、イケメンの店員さんと写真を撮ってもらいました。その後、もう一度ウォールマートへ行き、先生のおごりで鶏の丸焼きとアイスを買ひ、先生が買ったビールで乾杯し学生の部屋で先生を含めた全員でパーティをしました。中村先生、ごちそうさまです。

アメリカ時間での 8 月 27 日から病院見学が始まりました。病院見学は 8 月 27 日から 31 日、9 月 4 日から 9 月 7 日の午前中まででした。7 日の午後は自分が見た症例の発表でした。ここからは回った科ごとに書いていこうと思います。

Rehabilitation

私は初日にリハビリを見学しました。日本では軽くりハビリについて授業で触れただけだったのでとても楽しみにしていました。どこの科もそうでしたが、その日くる予定の患者の名前とする予定の処置がホワイトボードに書いていました。少しすると続々と犬たちがやってきて、それぞれの症状に合わせて組まれたリハビリをしていました。例えば、**Under Water Tread Mill** という犬の肩あたりまで水を張り、水の中をルームランナーのような機械の上を歩くというものや、**Cavaletti** という犬のショーで見るようなカラーコーンの間を歩いたり足を上げるために棒の上を歩いたりという運動をするものなど色々なものがありました。**UWUM** では、普通にしていると介助なしでは歩けない犬が歩けているのを見て効果を実感しました。また、ある犬のリハビリのお手伝いとして、**Circuit** というバランスボールや台などを置いたコースを歩かせるためにその子が大好きなニンジンで誘導するという役目をもらい

ました。その後、新規患者の方が来たので診察を見せてもらいました。私は基礎研に所属しているので日本と違うのかはわかりませんが、最高学年である 4 年生の学生が 1 人で問診や触診などをしていました。その犬は左後肢に跛行がみられ、ドロワーサインや神経学的な検査など 5 年前期に習ったばかりの内容が多く面白かったです。その後ドクターも交えて治療方針の話し合いが始まりました。アメリカの飼い主の方はとても気さくで、出身や、私の持っていたカバンを気に入ったらしくそのメーカーなど色々なことを聞いてくれましたが、あまり聞き取れずとても残念でした。その後全ての処置が終わったのちに、ドクターに呼ばれアメリカの学生 2 人と超音波装置について講義を聞いたのですが、時差もあり起きているのが精一杯でした。その後ホテルに戻る時間が来たのでリハビリの方々にお礼を言って集合場所に戻ると、中村先生がどなたかとお話していました。その方は **Exotic** のドクターでこの日の昼にあった **Eagle Fly** に連れていってくれた先生だそうです。**Eagle Fly** とはアメフトの試合の前座として飛ばす驚の訓練です。私はその時間に診察を見ていたため参加できなかったことを残念がっていると中村先生とそのドクターに落ちていてと何度も言われてしまいました。しかし、そのおかげか後日にわざわざみんなの見学している科まで呼びに来てくれました。とても優しい先生でした。

Pathology

本当はこの日私はもう一日リハビリを見学する予定だったのですが、去年の先輩方に **Pathology** が面白いと聞いたので、直接 **Pathology** のドクターにお願いして急遽見学させてもらいました。勇気が大事だと思った瞬間です。この日は鶏が 3 匹、馬が 1 頭、ヤギが 1 匹でした。まずミーティングでその日に病理解剖の予定がある患者について症状から考えられる病気を話し合い、その後剖検しました。病理研究室に所属する **Moemi** に北里との違いを聞きつつ作業を行いました。テネシー大学では生徒がプロトコルに従って自分たちで剖検しそれぞれの組織を採材していました。また、使う作業着も北里とは違い汚れにくいエプロンがありました。**Moemi** はこのエプロンにいたく感激しているようでした。**Pathology** には日本語が上手な女の子がいてその子と男子学生と **Moemi** の 4 人でヤギを剖検しました。やろうと思っていたのに専門英語を復習しなかったため臓器の名前が全くわからずドクターや学生に何度も聞いて教えてもらいました。みなさん本当に優しい方々です。解剖実習ぶりに剖検をしたため全くやり方がわからなかったのですが、みんなにとっても助けられすごく楽しく作業することができたし、すご

く面白かったです。私たち剖検したヤギの大動脈や肺動脈など心臓に近い大血管の内壁は石壁のようになっていて、ドクターも見ることがなかったため、剖検後に行う症例の紹介でみんなに見せていました。この制度が私にはとても魅力的で、シアターと呼ばれる場所で、真ん中にある台を囲むように3つ段差がありそこで紹介をするのですが、興味があれば誰でも見にこられるようになっていました。

Exotic

私が到着すると、消化不良のリクガメに注射、採血、浣腸などの処置が行われていました。リクガメの処置を見たのは初めてで、注射は鱗の間に針を刺していたり、採血は首のしわから針を刺していたりなど習っていないことが見られてよかったです。また、鳩の雛に餌をやっていたり、呼吸困難（dyspnea）のオウムに注射をしていました。鳥の筋肉注射や皮下注射を見ることができとても興味深かったです。途中、外来種で凶暴な性格のアヒルや交通事故（Hit By Car）にあったオポッサムの安楽殺などもありました。この地域ではオポッサムやスカンクなど日本ではあまり見ない野生動物の交通事故は多いそうです。また、ウサギの避妊はタイミングが合わず見られませんでした。去勢手術は見ることができました。詳しい理由はわかりませんでしたが、前日に見学していた Yurina によるとガン（cancer）だったようです。手術は学生がやっていて、犬の去勢と手技は一緒でした。その後、予定の処置が全て終わったため、最終日の症例発表のためにオウムのカルテを見せてもらったのですが、書かれたアルファベットが読めず黒人の女の子に読んでもらいました。Exotic の方もみなさんととても優しく私が理解できるまで何度も教えてくれました。また、時間があつたらいつでも来てもいいとお許しいただき、その後何度か見学に行くと、時期的に多いのか、リスの赤ちゃんがたくさんいました。また、呼吸困難のオウムは、一時期は餌をたべられたのですが、私が見に行くと気嚢にカニューレを入れる手術（Air Sac Cannulation）が行われていました。その後どうなったのかは見に行けなかったのですが、最終日に Chisato が見学に行くとオウムはおらず、羽をみんなにともらいました。元気に飼い主さんのところへ帰っていて嬉しいです。

Equine Medicine

まずは大動物臨床のミーティングへ参加しました。そこでは、生徒たちが患者について報告していました。ミーティングが終わってから、Equine Med のミーティングルームへ行き少し話をしてから患者のところへ行きました。この日は退院する

3頭しかいませんでした。そのうちの2頭は疝痛（colic）で入院していたようでしたが、元気になってオーナーさんの元へ帰るそうでした。聞くと、馬もオーナーさんと会えて嬉しいそうで、1頭はオーナーさんのことがすごく好きだそうです。その子のワクチン接種するときに無口をもたせてもらいました。ワクチン接種が終わると処置がもうなかったため、外のベンチにて馬の感染症についての講義がありました。あまり内容は理解できなかったのですが、アメリカは発生があるポトマック馬熱（Potomac Horse Fever）という感染症があることを知り、国ごとに勉強する病気が違うことを実感しました。その後、健康診断のため馬が1頭来院したり、オーナーさんのところへ帰るためにネブライザーのやり方を担当の学生が教えていたりしましたが、平和な1日でした。後日、馬の模型で直腸検査の練習をさせていただきました。大学の実習では、牛の卵巣、子宮を触るだけだったのですが、模型では腎臓（Kidney）や脾臓（spleen）、脈拍を触ることができました。

Farm Animal Medicine

私が一番長い時間いたのがこの FA Med です。本当は2日だけの予定だったのですが、私は最初の3日間以外ずっと大動物の病院にいたため時間が空くと歩き回っており、大抵この FA Med にいました。FA Med 初日は中村先生と一緒に見て回りました。先生を通訳に使おうとしたのに、私がいまいちわからないという彼は英語で説明してきました。先生、そうじゃないんです。それは置いて、まず、入院患者の紹介をしてもらいました。患者は3頭いて、2頭は蹄病でもう1頭は陰茎に癒着が見られる種牛でした。この日は種牛の精液検査を行い、後日、癒着組織を取り除く手術を見学しました。また、マイコプラズマ疑いの角結膜炎がある山羊が来院し、エコーで肺に異常がないか確認したのち、眼科の検査が行われました。スリットランプや眼圧検査など前期に習った検査だったので、理解しやすかったです。また、牛の削蹄も見ることができました。前期の実習で削蹄を見学、体験したのですが、アメリカでは蹄底は電動のやすりで削っていたり、機械で牛を横に寝かせたりと日本との違いを体感しました。また、大動物臨床のドクターが削蹄を行うそうで、未熟な私の英語力では日本の削蹄師のような、削蹄を主な仕事にする職業があるかどうかはわかりませんでした。また、豚の麻酔、気管挿管、避妊手術も見学させていただきました。他にも、雌牛のエコーによる妊娠検査、潜在精巣の豚の CT 検査、屈腱炎の馬の MRI、左後肢を骨折したアルパカの赤ちゃんの整形外科の手術とレントゲン撮影、歩行に異常のあるラマの脊髄液採取など様々な処置、症例を見学する

ことができました。ドクターもレジデントの方も学生も本当に優しく、すぐに理解できない私のために何度も説明してくれたり、簡単な単語に直してくれたり、ネットで単語を調べてくれたりと本当に親切にしてくれました。

Equine Surgery

閑古鳥すぎて、3日間見学に行ったのですが、当初は手術が1つもないとドクターに言われていました。しかし、馬の歯の手術と類上皮細胞肉芽腫（Sarcoidosis）のラバの化学療法や子馬の蹄病の装蹄を見学することができました。また、真菌性の呼吸器病に罹患していた馬の内視鏡による処置も見ることができました。具体的には、処置器用チャンネルからカテーテルを入れ、隆起した粘膜に抗生物質を注射している様子を見ることができました。授業で内視鏡については勉強し、模型に内視鏡を入れる実習はありましたが、実際に内視鏡に処置をしているところを見たのは初めてだったので貴重な体験でした。また、馬を全身洗っているところを見せてもらったのですが、洗い終わった後にすぐ乾くようにヒーターと送風ができる装置が天井についていました。私が通っていた乗馬スクールではそんなものはなかったので、アメリカは機械化がすごく発達していて羨ましかったです。しかし、その馬の高圧酸素療法は時間が合わず見学できず残念でした。

その他に色々 Kirk 先生に連れて行っていただきました。全ては書ききれないので、一部のみ紹介しようと思います。省いたイベントもとても楽しかったです。

ハンバーガー屋さん：ここで私は“sassy”というスラングを学びました。あと、中村先生がとてもおうちまで面白かったです。彼が頼んだハンバーガーは目玉焼きが乗っていたのですが、卵嫌いということで私のハンバーガーとかわえてあげました。

動物園：ラクダに乗ったり、テネシー大学の動物園担当の先生が大好きなサルがいたり、キリンにおやつをあげたりとても楽しかったです。

ショッピングモール：私の家族へのお土産の T シャツを買うために連れてきていただきました。無事、頼まれていたお土産を買えて一安心でした。ただ、中村先生はお疲れだったようでモール内のソファで無防備に寝ちゃったそうです。

野球：テネシーの球団であるスモーキーズの試合を見ました。天然を炸裂しボールのディスプレイのみを買ってしまった先生もスモーキーズが驚異の追い上げを見せる試合もとても面白かったです。

ハイキング：アメリカ流のハイキングを楽しめました。レジャーシートなんか敷かず石や木に腰掛け

てサンドイッチをいただきました。ここではお土産屋さんでマグカップを買ったのですが、かくかくしかじかあり、Kirks 先生の優しさに泣きそうになりました。実際泣きました。そのマグカップは大切に日本に持ち帰りました。

ラフティング：お昼に食べたマクドは日本よりもはるかに美味しかったです。また、初体験のラフティングもとても楽しかったです。クルーのお兄さんがうまくとてもエキサイティングでした。途中、Chisato がボートから落ちてしまいましたが、それもいい思い出です。帰り道では、みんなの名前の漢字の意味を Kirk 先生に教えました。彼女のお気に入り、福田 = Happy Rice-field でした。

Student Party：色んな学年の生徒たちが集まるパーティで、旦那さんを連れた 1 年生のクールな女性から結婚が決まった 3 年生までいろんな人がいました。アメリカの獣医の学生は、学生結婚する人や、1 度社会に出てから獣医学を学ぶ人も多いそうです。実際、ローテーションで回った科の学生の中にも、左手の薬指に光るものをつけている人が何人かいました。また、初挑戦のジェンガはボロボロでした。

Party at Dean's House：学部長の豪邸でパーティだったのですが、その豪華さに圧倒されました。どうしてベツトルームが 5 つぐらいあるのでしょうか。また、大学でお世話になったドクターたちや前日の Student Party で会った人たちも話しかけてきてくれて嬉しかったです。Equine Med のドクターが私の名前だけ覚えてくれていた時はすごく舞い上がりました。

他にも高級ステーキ店でとても美味しいヒレステーキを中村先生が殆んどお金を出してくださったり、夜にホテルのプールに入ったり、私の一押しのドクターが私との 2 ショットを自分のケータイで撮ってくれたり、中村先生が私たちの症例発表を聞いた時と私たちからのメッセージムービーを見て泣きそうになったりとここには書ききれないほど楽しく、素敵な時間を過ごすことができました。もし叶うならもう一度同じメンバーでテネシーへ行きたいです。そう思うことができたのも、Kirk 先生をはじめとするテネシー大学の方々の優しさのおかげです。また、ノリがよくかわいい中村先生を含め、気の合うこのメンバーだったからこそだと思います。このメンバーでなければこんなに楽しくなかったでしょう。お金を出して快く研修にいかせてくれた両親を含め、私のこのアメリカ研修に関わってくださった全ての方に感謝してこの体験記を締めくくらせていただきます。みなさん本当にありがとうございました。

この夏、私はたくさんの方々のおかげで念願の米国夏期研修に参加することができた。

入学前から北里大学が米国三大学夏期研修を実施していることは知っていて、初めて説明会を聞いた2年生のときから、私はテネシー大学 (UTCVM) への研修をつよく希望していた。毎年報告会を聴きに行き、研修レポートのテネシーのページは全部読んでいた。(しかし、なぜテネシー大学にそんなに惹かれていたのかと言われると、ラフティングを試みたかったから、英語で症例発表をするというこの先の人生であまりなさそうなことを経験してみたかったから、などの漠然とした理由しかなかったのだが……。)

実際に研修を終えた今振り返ると、やはり私はテネシー大学に研修に行き良かった、と心から思っている。UTCVM で関わってくれた人々、UTCVM であった出来事、すべてに出会えてよかった。2週間という限られた時間のなかで精一杯、より多くのことを学び、考え、感じ取ってきた。大学内でも休日でも、一生忘れられない楽しい思い出がたくさんできた。

大学で学んだことによって、私は残りの獣医学生としての生活をどう過ごすべきか自分なりに考えることができた。それが一番の収穫であったと思う。

2週間の滞在期間のうち8日間で、Small animal medicine (SA med), Equine surgery, Equine medicine, Small animal community practice, Exotic, Pathology, Farm animal medicine (FA med) の7つの科を訪問した。UTCVM の最終学年の学生は、1年かけてローテーションで様々な科をまわる。学生でも実際に症例を受け持ち、一つの科につき2週間または4週間学ぶ。一人の学生に教員が2、3人ついて指導している科もあると聞いた。

私は自分が訪問したどの科でも本当に多くのことを学び、すべての診療科を通してとったメモは約2冊にのぼる。その中でもここでは、初めて経験したこと、知ったことが多かった科について述べる。

Equine surgery/medicine

馬をペットとして飼っているアメリカだからこそこの科であった。そして、私の一番のおすすめの科である。手術を見学させてもらった症例は3つあった。なかでも特に、競走馬が門に数年間ぶつかり続けてできた下顎の Osteoma (骨種) のオペは、全身麻酔で行っていたこともあり一番印象に残っている。Hematoma (血腫) から段階をおって Osteoma に

変化していった経緯を先生からゆっくり分かり易く説明してもらい、X線写真も見せてもらった。吸入麻酔の器具も、馬用のサイズですべてが大きかったのが印象的だった。他には Paraphimosis (嵌頓) の馬に、日本の獣医療ではなかなか見られない鍼灸の処置をしていたことが興味深かった。馬の歯科処置を2回も見ることができ、模型ではあったが初めて馬の直腸検査の練習をすることができた。この科では3日間の見学で、かなり濃密かつ多くのことを学べた。

Exotic

Exotic もおすすめである。動物園で、3年かけて行うすべての動物の健康診断の見学をさせてもらえて、そこで初めてヘビの保定を経験できた。大学内では野生のクマのオペ、カモの処置を見ることができた。そして、大学近くのアメリカンフットボールの会場で eagle fly の練習を見学させてもらった。eagle fly は、今回が初めての北里生へのお披露目だったそう。見学していて一番わくわくしたのは、実は Exotic であった。

Farm animal medicine

ペットとして飼われているラクダやラマ、アルパカが入院していることに驚いた。骨折で入院していたアルパカの赤ちゃんにミルクをあげたことはもちろん初めてだったし、本当に嬉しくて貴重な体験だった。

SA med, SA community practice

これらの科では、学生以外にアメリカの veterinary technician, veterinary assistant の方々とお話しする時間が結構あった。そのときに、アメリカは VT になるためにヒトの病院とおなじく、4年間勉強しなければならないと聞いた。また、4年間のうち2年間は理数系の科目を中心に勉強すると聞き、すごく驚いた。一方、veterinary assistant は学校に通わなくてもなれるらしい。ただし、VT と比べるとやっていいことはかなり制限されるようだ。VT が注射をしたり採血をしたりしていて、その手技の素早さと日本の VT との違いにも驚いた。

どの科でも感じたことは、UTCVM の学生のローテーション学習が羨ましいということである。日本では参加型臨床実習を経験するが、臨床系の研究室以外で学生が一人で症例をうけもつことはない。学生が実際に現場で問診をとって治療方針を提案して毎日処置をするということは、すごく責任重大なことだろうし、UTCVM は一学年の人数が85人程であるからできることだと思う。だからこそこのような経験は、物事をより考えて行動できる獣医師にな

るために大いに役に立つのではないかと私は思った。私は将来臨床に進むかどうかはまだ決めていないが、どんな道に進むとしても UTCVM のようなローテーション学習を経験してみたいと思った。また、大学での診療科訪問の前日に見せてもらった採血や挿管、除角の練習ができる器具が、北里大学にもあったらいいのに……と思った。

しかし、帰国してこの文章を作成する頃になって、ただ羨ましいだけでなく別なことも考えられるようになった。私が所属している研究室の先生は、「日本の獣医学生が経験する、計画を立てて実験しその後には考察をして自分の言葉で卒論を仕上げるということは、将来どんな分野に進んでも役に立つことだ。」と普段から仰っている。日本で学ぶ私は、アメリカの獣医学生が経験しない卒業論文作成を通して、物事を考える力を身につけられるのではないだろうか。そう考えられるようになったのだ。以前から先生が仰っていた言葉の意味を、UTCVM に行つて学んだことで実感できた。この秋から 5 年生は本格的に卒論作成に取り掛かり、参加型臨床実習も経験する。アメリカのローテーション学習を羨ましいと思って過ごすだけでなく、これまでよりも一層実験に力を入れ、研究を通して考える力と表現する力を身につけたい。そして参加型臨床実習では、より多くのことを学べるように積極的に行動したい。そんな決意をすることができた。

英語を話して生活してみたことから考えたこともいくつかあった。

UTCVM のたくさん学生が私たち北里大学の学生に携わってくれたが、その中でもプエルトリコ出身の女子学生には特にお世話になった。彼女は日本語を学んでおり、簡単な日本語での会話はできていた。来年の夏には東京大学に勉強にくるのだそう。母国語はスペイン語なのに、彼女の英語はまるで英語が母国語であるといっても違和感はない感じだった。理由を尋ねたところ、プエルトリコは小学 1 年生から英語教育があり、話すことに重点をおいて勉強するらしい。中高の 6 年間で、主に受験のための英語教育を受けてきた私は、英語の文章を読むことはまだできたが、話されている英語を聞き取って理解し、自分の言いたいことを英語で話すということにとっても苦労した。そして最初の 2 日間は、単語を並べ身振り手振りを加えて言いたいことを伝えるのがやっとだった。自分で言いたいことが言えるようになってきてからも、相手の言っていることを聞き取って理解することのほうが大変であった。(恥ずかしい話だが文字にしたら簡単な radiography という単語が聞き取れなかったときは、しばらく落ち込んでしまった。) だから、もっと英語に耳を慣ら

しておけばよかった、あのときもっと質問したかった、という気持ちは今も残っている。特に、米国研修に参加するための試験範囲となっていた獣医専門用語の単語をまとめた冊子をもっと覚えていけばよかった、と今でも思っている。

同時に、そんな経験から学んだこともある。訪問した科の学生、先生は皆、私が何度も質問をしてしまったりわからなくて困った顔をしたりしたとき、とても親切に対応してくれた。症例について言葉だけでなく写真や図で説明してくれたり、日常会話でも聞き取れるようにゆっくりと話してくれたりした。私が特に有難かったのは、Exotic の日の昼食時に、イタリア出身の先生がわかりやすく言葉を変えながら丁寧に話しかけてくれて、私が辞書を引きながら話すのを待っていてくれたことである。先に述べた悔しさもあったがそういった優しさ全てのおかげで、滞在 7 日を過ぎたころには失敗しながらも自信をもって会話ができるようになった。そして滞在 12 日目には、向こうの先生から英語が上達したと褒められるようになった。自分でも英語の面で成長を感じられたことはとても嬉しかった。

このことから、いつか外国人が日本語で話すのに苦労していたら(近い将来だと来る 2020 年の東京オリンピックなどで)、どのようにしてあげるべきか学べた。そして、たとえ一発でうまく伝えられなくても、後で後悔するくらいなら何回か質問してみたほうがいいのかということも学べた。読解や単語を覚えるのはもちろんであるが、もっと会話を上達させたい。来年以降米国研修に参加する学生には、失敗をおそれずに積極的に英語を話すこと、会話の練習の機会があるなら大いに活用したほうが良いこと、例の冊子をきちんと覚えておくことをすすめたい。

真面目に学んだ時間はとても多くてそれも充実していたが、同じくらい休日など楽しく過ごした時間も多かった。

スーパーやショッピングモール、ダウンタウンの雑貨屋さん、本屋に買い物に行った。食料品はまさに「アメリカンサイズ」という感じでなにもかも大容量だった。ショッピングモールには、日本でもみたことのある店舗がいくつかあったが、値段は日本のよりも安かったようだ。ダウンタウンは、私にとって仙台の定禅寺通りに似ているように見えて、緑がいっぱいきれいな街並みだった。ダウンタウンにあった現地の人がおすすめのレストランには、なんと滞在中に 2 回も行けた。焼いた豆腐が入ったサラダをはじめ食べたが、その味は忘れられないくらいおいしかった。本屋へはプエルトリコ出身の学生さんに連れて行ってもらったが、そこで彼女が子供のころに好きだったという絵本を教えてもら

い、わたしは記念にそれを購入した。

Exotic の授業以外でも、休日に動物園に行った。大学の先生で、動物園でも仕事をしている方が特別に内部も見せてくれた。その先生から turtle と tortoise の違いについて教わったことが一番印象に残っている。先生が歩いた方向について来たサルのほか、トラ、レッサーパンダ（英語で red panda ということを知った）、ゴリラもかわいかった。キリンにえさをあげたりラクダに乗ったり、初めて経験することもあって本当に楽しかった。

マイナーリーグの野球の試合を観戦したこともすごく楽しかった。ビールを飲みながら、みんなでお揃いの帽子を被って、周りにあわせて歌をうたって応援して... と、かなり盛り上がった。試合はもちろん面白かったが、ボールだと思ってボールケースだけを買ってしまったとある先生が実は一番面白かったかもしれない。

ハイキングでは Smoky mountain に行った。到着するまでに車酔いをしてしまったが、山のおいしい空気を吸ったらそれも吹っ飛んでしまった。そのくらい素晴らしい景色だった。北里の学生、先生はハイキングと聞いて長袖、長ズボンだったが、案内してくれたテネシー大学の先生と学生は袖も丈も短い装いであった。私たちはハイキングと聞いて山登りを想像していたが、あちらのハイキングとは車のスライドドアを開けて走らせ、景色や野生動物を観察しながら山を目指し、山歩きは1時間弱というものだったのだ。なるほど、軽装なわけである。ここでは伝統的な家のづくりを見たり、野生のシカや七面鳥を見られたりしたことが心に残っている。

そして何よりも、私が一番楽しみにしていて実際に楽しかったのがラフティングである。テネシーから1時間半ほどかけて車で向かった。着いてから注意点などを英語で説明してもらい（ラフティングに行ったのは滞在10日目であったから、説明もなんとか理解できていたはずだ）、その後バスで20分ほど山道を移動して着いた先からラフティングがスタートした。天気が良かったため景色もよく、川を泳いでみたときにはすごく気持ちよかった。ラフティングについては文章よりも写真頁を見てもらったほうが、楽しさが伝わるのではないだろうか。川に落ちこちた人がいたりいなかったり... ほかにもなかなか楽しい思い出がいっぱいである。

毎日少しずつ教わった面白くてためになるスラングも、みんなで食べたピザ、ハンバーガー、ステーキ、メキシカンフードも忘れられない大切な思い出である。

こんなにも研修が充実したものだったのは、本当にたくさんの人のおかげであることを忘れてはなら

ない。

この米国研修に携わってくださった、すべての人に心から感謝している。訪問したすべての科でお世話になった先生と学生みなさん、むこうで毎日私たちをサポートしてくれた Kirk 先生、去年に引き続き私たち北里生をたくさん助けてくれた Hana さん、英語を日本語に訳してくれて、症例が来なくて時間があつたときに車で色々なところに連れて行ってくれたプエルトリコ出身のダニエラ、学生同士のパーティーに私たちを混ぜてくれた3年生の学生たち、毎日笑顔であいさつをしてくれて最終日の発表を聞きながら真剣に聞いてくれた秘書さん、最後の夜に自宅に招いてくださった学部長の先生...。もちろん、この旅行で直接私たちと関わっていても、テネシーへ行くまでにむこうの先生や旅行会社さん、三沢の英語の先生と連絡をとってくださった北里大学の先生方にも感謝している。米国研修に参加するための後押しをしてくれた家族にもお礼を言いたい。

そしてなかでも、同行教員の中村和市先生にはなんとお礼を言ったらいいのかわからないくらいお世話になったと思う。中村先生は、出発前から英語に慣れさせてくれる環境を作ってくれたり、海外に行くための心得を教えてくれたりした。英語がべらべら話せる先生のおかげで、会話が原因のトラブルは起こらなかった。私たちと一緒に買い物に行ってくれて、すべての出来事を私たちと一緒に楽しんでくれていた。何よりも、和市先生は毎日少しの時間でも私たちの診療科見学に顔を出してくれて、私たちが学んでいる様子を立派な一眼カメラにおさめてくれた。車の中でテネシー大学の先生がこっそり、「こんなに一生懸命な同行教員の先生は初めてだ。」と話してくれたとき、なんだか嬉しかったことはここではじめて明かす。同行教員が Dr. NAKAMURA で本当に良かった。

そんなお世話になった方々へ私ができることは、この研修で学んだことを一つも無駄にしないことだと思う。米国研修によって、これから残りの獣医学生としての日々、そしてこれからの人生をどう過ごしたいかの目標を持てたから、それを大事にしていきたい。そして米国研修の良さをひとりでも多くの北里生、北里の先生方に伝えたい。自分の後輩にあたる学年の学生たちには、少しでも米国研修に興味があるならばぜひ参加してほしい。人それぞれ得るものは違うと思うが、旅行ではなく研修という目的で外国に2週間も滞在できるチャンスはなかなかないと思うし、絶対になにか収穫があると思う。私のこの文から、その思いが少しでも伝われば幸いである。

長くたくさんのかたのことをこの文で述べたが、最後に

一言で気持ちを表そうと思う。やっぱり私はテネシー大学に研修に行ってよかった。

早川 知里 Chisato HAYAKAWA

前日に成田空港近くのホテルに宿泊し、朝ホテルのシャトルバスで成田空港第二ターミナルに8時頃到着。日本のお金をアメリカのお金に換えて、友達と足りないものがないか最終確認しました。その日は混んでいたのでも早めに並び搭乗手続きをし、いざ出発という時に同行教員の中村先生が分からない英語をメモできるようにとメモ帳をみんなにプレゼントしてくれました。感動して英語頑張るぞと思って出発しました。約12時間のフライトで乗り換え地点のダラス空港に到着。入国手続きをして無事に乗り換えをしました。14時頃ノックスビル空港に到着。カーク先生が出迎えてくださいました。ただ、一人のキャリーケースがダラス空港から運ばれていないという問題が発生。ダラス空港と連絡が取れ、最終便で運びホテルに届けるということになりました。アメリカでは良くあることだそうです。カーク先生がホテルまで連れて行ってくださり、荷物を降ろして休憩を取り、必要な買い物をオールマートにしにいきました。その時、16時にロビーで待ち合わせしたのですが、中村先生がなかなか来ません。呼びにいったら時計を逆にみていたそうで、中村先生が天然なお方だということが発覚しました。水や食料など必要なものを買ひ、夜はホテルの近くのメキシコ料理のお店に行きました。とても美味しかったです。ホテルはキングベッド、クイーンベッド、ソファベッドがあり、毎日ローテーションで寝る場所を決めました。お風呂も2つあったので毎日入る順番を決めて公平に過ごしました。時差ぼけがあったためなかなか寝付けませんでしたが、一日目が終了しました。

翌朝の11時まではフリータイムだったので、ゆっくり起きて、朝食をとりました。ホテルでは毎日朝食がついており、平日は軽い夕食もありました。ホテルの朝食は豪華で、感動しました。平日は学校に昼食を持って行く必要があったので、朝食のパンをキープして昼食にしていました。カーク先生が来るのを待っている時間、中村先生がみんなをロビーで写真を撮ってくれようとしてくれたのですが、入り口を跨いでカメラを構えていたので、取る瞬間に自動ドアが閉まるという中村先生の天然が出ました。11時からカーク先生がテネシー大学を案内してくださり、見学しました。小動物から大動物まで迷ってしまうほど施設が広く、設備が充実していました。採血や縫合、挿管等の練習施設もあり、北里大学に

もぜひ導入してほしいと思いました。お昼は大学近くのメローマッシュルームピザというお店に連れて行ってくださり、ピザをごちそうになりました。その後、テネシー大学のグッズが売っているVolshopに連れて行ってもらい、みんなで揃いのテネシーパーカーを買いました。そのショップの店員の一人がかっこよくてみんなで写真を撮ってもらったのですが、周りでみていた人はみんな笑っていて恥ずかしかったです。この次にダウンタウンに行く予定でしたが、カーク先生のご都合が悪く、そのままホテルに帰りました。この日はオールマートで夕食にチキンの丸焼きやサラダ、お酒等中村先生が奢ってくださり、夜はホテルの中でパーティーしました。次の日からの学校への活力になりました。翌日からローテーションです。それぞれの診療科目について以下に報告します。

Small Animal Soft Tissue Surgery

わたしの最初の3日間のローテーションは軟部外科でした。そのうち2日間は新患の受け入れや診察、処置を見せてもらいました。全外耳道切除術を過去に受けた患者の耳に感染が起きてしまった例が2件、左肘の肉腫や会陰ヘルニア、門脈体循環シャント等様々な症例を見ました。耳に感染が起きた子はドレーンを設置したり、洗浄したりするところを見せてもらいました。会陰ヘルニアはレントゲン写真や手術の仕方を生徒から教えてもらいました。門脈体循環シャントの子を見ていた生徒から分かりやすいように説明が載った書類を印刷してくれました。ほんとに皆さん優しく、感謝しかない毎日でした。わたしは北里の研究室で第二外科（軟部外科）に入っており、北里との違いを感じました。学生が問診をとりどのような処置や手術を施せば良いか考えて先生に報告しており、勉強している量の違いを感じました。受け身ではなく主体的に治療に参加しており感動しました。3日目は手術の日で門脈体循環シャント、左肘の肉腫、頸部腫瘍、軟口蓋過長、股関節異常の5件の手術を見せてもらいました。患者を担当している学生が器具出しに入っていました。門脈体循環シャントではシャント血管を見せてくださりアミロイドリングで結紮していました。肘の肉腫摘出後は皮弁を作り縫合したり、頸部腫瘍では卵大の腫瘍を摘出したり、軟口蓋過長の手術も初めて見てとても楽しかったです。手術室導入室が分かれており、手術は同時に6件、導入は同時に4件できる台と広さがあり、1件手術している間にもう1件の導入をして1件目終わり次第すぐ2件目するというように効率的に進めていました。施設が充実しているもすごいなと思いました。いろいろなことを学びましたが、日本に帰ったらまずもっと主

体的に病院業務をしていきたいと思いました。

Dermatology

次のローテーションは2日間皮膚科でした。皮膚科でも今まで実際に目にしたことのない症例を見ることが出来ました。蚊に刺されてアレルギー症状が出た猫や、皮膚から黄色ブドウ球菌が採取されたおそらく膿皮症の犬、落葉天疱瘡の犬など見ました。落葉天疱瘡の症例を詳しく見せてもらいました。免疫介在性の病気なので免疫抑制量のステロイドを投薬していました。この日は尿を採取し培養をしていました。ステロイドを投与していると尿糖になったり易感染性になるため、感染していないかなど確認するためだそうです。テープ標本やスタンプ標本をDiff Quick 染色し鏡検した映像も見せてもらいどれがどんな菌等教えてくださいました。皮膚科の症例はあまり見たことがなかったのでとても興味深かったです。

Small Animal Orthopedic Surgery

整形外科のローテーションでは、手術が1件入っており、TPLO という前十字靭帯断裂のときにされる脛骨高平部水平化骨切り術を見ました。骨だから硬く扱いも大変なのに繊細な作業で1時間半くらいで終わりました。その後術後のレントゲンを見せてもらい、この日は終わりました。整形外科の手術を間近で見たことがなかったので見る事が出来て良かったです。

Small Animal Physical Rehabilitation

リハビリテーションのローテーションでは、たくさん症例の子を見せてもらいました。昨日 TPLO で手術をした子がこの日リハビリをしにきていて、よたよたですが自分で歩けるようになっていました。手術後調子が良くなっている姿を見られて良かったです。この子は超音波、レーザー、アイシングをして血行をよくしたり、筋肉が硬直しないように、脚を回したりしていました。その他に椎間板ヘルニアで後肢が動きにくい子が来ていて、水中のトレッドミル走行や水泳をさせることで浮力を使ったリハビリをしていました。その他にもたくさん症例を見ましたがどの症例の子にも言えるのが、リハビリを終えた後は体の動きが良くなるということです。リハビリの大切さを感じた一日でした。この日の夕方、学生のイベントがあり、参加させてもらいました。皆本当に良い人たちで、学校の話等お話をしたり一緒に遊んだりしてくれました。3年生の方が多く、違う学年の人と交流するのも良い機会になりました。

Ophthalmology

眼科のローテーションでは、手術の日にあたり3件見せてもらいました。最初の2件は白内障の子で水晶体摘出術をしていました。眼の中をいじっているのはとても難しそうで痛そうでした。手術前後の眼の輝きが全然違いとても神秘的でした。3件目の子は瞼に腫瘍があったので、レーザーで焼いていました。一歩間違えれば眼球を焼いてしまうので、とても細かい作業だと思いました。最後に手術ではないですが、馬の診察をしてスリットランプ検査で角膜潰瘍という診断をしていました。小動物だけでなく馬も見えてすごかったです。眼科の手術も実際に見てみたかったので良い経験になりました。この日の夜、明日はホームパーティなので皆で最後の晚餐にホテルの近くにあるステーキのお店に行きました。

Exotic

最終日、エキゾチックを見ました。消化管不良のうさぎや、腹部腫瘍摘出後のラットが入院しておりその子のお世話を見ました。その他新患のオカリナや細菌感染疑いのカメが来ました。オカリナとカメに触らせてもらえました。オカリナは肩の上まで乗ってきてくれてかわいかったです。カメの雌は爪と尾が長く、雄は短いことを教えてくださいました。午後は症例発表だったので午前で全てのローテーションが終わりました。

最終日の午後は写真撮影の後症例発表でした。まず中村先生が毒性学のことについて発表しました。中村先生は英語が上手で内容が濃かったのが改めてすごいなと感動しました。次に学生が発表しました。みんな自分とは違う症例を見てきていたのでとても興味深かったです。あつという間のローテーションでした。迷惑ばかりでしたが皆温かく対応してくれて感謝しかありません。テネシー大学の人の温かさや勉強への主体的な姿勢など学んだことを見習って実践していきたいです。今回の旅では事情がありシューマッハ先生におあい出来なかったと思っていてところ、最後の症例発表を見に来てくださっていました。シューマッハ先生にもお会いできて良かったです。発表の後、カーク先生がご飯に連れて行ってくださり、その後学校長が招いてくださったホームパーティに行きました。家が広くてお城みたいでした。テネシー大学の2、3年生も一部参加しており、皆大きな家の中を見学したり、交流したりしました。最初から最後まで経験したことがないことだらけで、2週間経っても夢のなかにいるみたいでした。

週末での話ですが、1日は Zoo Knoxville に連れ

て行ってくださいました。クマや虎、サル、ゴリラ等いろんな動物を見ましたが、わたしの Best3 は 1. ジョージという名前の懐いているテナガザル、2. ポージングをするゴリラ、3. キリンでした。ジョージは人についてきてとてもかわいかったです。ゴリラはサービス精神なのかずっとポーズをとってくれました。キリンには 5\$ 払って皆で餌をあげました。舌が長かったです。また、ラクダにも乗りました。動物園の診療の裏側も見せてもらいました。貴重な体験でした。この日の夕方は野球観戦でした。テネシースモークーズとどこかのローカルチームとの対戦でした。良い試合で 9 回で同点延長となりましたが時間の都合でここで帰りました。ホテルに帰り試合速報を見ると負けていましたが、わたしの中では同点だったということにしています。2 日は、カーク先生とはなさんと一緒にハイキングでした。スモークーマウンテンに連れて行ってもらいました。川があるところで昼食をとってからハイキングでした。野生動物は鹿や鳥がいて、植物は苺やいろんなアメリカの植物等もありました。ポプラの葉やメープルの葉、樫の木葉の違いをはなさんが教えてくれました。先住民が住んでいた跡を巡ったりコーンミールを作っているところも見ました。ロバと馬のミックスにも会いました。最後にカーク先生おすすめのソフトクリームも頂きました。スモークーマウンテンはとても素敵なお店でした。夜にははなさんがダウンタウンに連れて行ってくださいました。遅い時間だったので開いているお店が少なかったですが、雑貨屋を見ることができました。最後に The Tomato Head という、はなさんおすすめの店で夕食をとりました。中村先生が気を遣って違うお店で食べたので、女子会になりました。とてもおしゃれで美味しく、いろんな話ができて楽しかったです。3 日は Labor Day という祝日で、ラフティングに連れて行ってもらいました。カーク先生の旦那さんも一緒でした。本当に楽しかったです。一度岩に当たった衝撃でボートから落ちてしまい一瞬何が起こったか分かりませんでしたが、すぐに近くのボートの人が助けてくれました。一瞬怖かったですがボートから落ちたのも良い体験でした。

朝 4 時に出発。搭乗手続きで時間をとられ、荷物も少し問題があったのですが無事に出発できました。カーク先生は朝早くから出発までずっと待っていてくださり、最初から最後まで本当にお世話になり感謝の言葉しかありません。夜中にみんなで作ったプレゼントを最後にカーク先生に渡し、出発しました。帰りはずっと中村先生がお隣の席でした。最後まで良い思い出です。日本に無事に帰り着き、最後の最後に皆から中村先生へのサプライズのお手紙とビデオレターを渡しました。ビデオレターを見て

うるうるしていた先生の顔は忘れません。

最後に、テネシー大学に行かせてくれた家族、支えてくださった北里の先生方、一緒に旅をしたメンバー、同行してくれた中村先生、温かく接してくれたテネシー大学の皆様、ずっとお世話をしてくださったカーク先生、その他にも支えてくださったすべての人たちに感謝の言葉が言い尽くせないです。この経験が無駄にはしません。ありがとうございました。

福田 友理奈 Yurina FUKUDA

Exotic

2 日間 Exotic のローテーションに参加した。テネシー大学の 4 年生も各専門のローテーションをしており、この日はテネシーの学生と一緒に各部屋の使用用途やカルテや器具の保管場所などの説明を受けた。

便秘 constipation とそれにより歩行時に痛みを示す Turtle の身体検査を見たり、ペットの蛇が呼吸器疾患で来院したため、身体検査のあと X 線の撮影を行なっているところを見せてもらった。ほかにも、飼い犬がくわえて持って来ると言ってウサギの赤ちゃんが連れてこられ、その赤ちゃんにはご飯を与え、注射をした。さらに以前車に轢かれ手術をしたキツネの抜糸、体重減少、下痢、鼻汁が見られる Toodrat を酸素ケージに入れるなどの処置をしていた。

蛇の体重測定をさせてもらったりウサギの赤ちゃんに注射をする際に保定を手伝ったりさせてもらった。蛇の X 線撮影では蛇がとぐろを巻いてしまい、なかなか撮影をすることができず、板を使って挟んだり、体を引っ張ったりしながらとぐろをまかないように試行錯誤していた。蛇の解剖図を知っていたらもっと面白かったと思う。エキゾチックに詳しくない人はあらかじめ簡単に知識を仕入れてから、参加することをお勧めしたい。

翌日のエキゾチック診療は忙しかった。胸腔にマスのあるフェレットの CT や超音波、去勢手術をするために来たウサギの検査、骨折していたリスのリチェック、それと unable to coo な鳩の予約もあった。その予約の傍、wild life が緊急で運ばれて来るなどバタバタしていた。午後になるとひどく消瘦し吐出をするという体調不良の虎が麻酔をされた状態で動物園から運び込まれた。採血や吸入麻酔の導入をした後、X 線と超音波の診断をおこなった。この虎は、検査の結果腸管の肥厚が見られた。診断は X 線の検査の結果待ちであるが、IBD や細菌感染かなと生徒さんは予想していた。後日動物園に連れて

いってもらった際に虎はどうしているか聞いたところ、体調を保つために抗生剤の投与をし、万全ではないが元気に歩き回れるようになっているとのことだった。

さて、カメの **physical exam** を行うために虎の X 線撮影を抜け、診療室に戻ったところで、**emergency** の画面に **Bear** と表示されていた。野生の子熊が山から落ちてきてネットに捕まっていたところを保護団体が保護して連れてきたようだ。左肩のところに瘻が出来ていたため麻酔をかけて処置を開始したところ、ハエウジが摘出された。結局このクマは麻酔下での処置の最中に死んでしまった。もともと来院した時から貧血を呈し危険な状態で、そこでハエウジが原因による炎症反応を起こし呼吸が止まってしまったと疑われた。この熊は病理解剖にまわされた。

Pathology

午前中はカンファレンスを行い、病理に送られてくる情報を元にその日に剖検を行う動物の病歴の確認や、その病気に関する知識の復習をした。そのあと病理解剖棟に行きその日にきた複数の動物それぞれ 1 頭に対し生徒 2、3 人で剖検をした。わたしも実際に参加させてもらい剖検を行った。

1 日目は子熊、馬、ヤギで子熊は 1 日前に **Exotic** で亡くなった熊だった。病理解剖の結果でも特別な大きな異常は見られず、原因はハエウジの有害作用によると考えられた。

2 日目はバグ、ヘレフォード牛、ヤギ、小鳥 2 羽、後から猫もきた。バグは 6 ヶ月も下痢が続いていたとのことだった。高血圧、高タンパク血症、を示していたらしい。剖検の結果、腸壁の肥厚、肝臓に **mass**、胃潰瘍、心臓には黄色化、線維化が見られた。腸壁は特に肥厚した部分があり、筋層の肥厚も見られた。この部位はさらに病理検査をするために切片を回収していた。剖検の結果、消化管悪性リンパ腫と診断された。剖検で腎臓のサンプル回収を手伝ったのだが、そのときに腎盂部分に **2mm** ほどの緑色のゴミのようなものを見つけ、教授に聞いてみたところ **good find!** といわれ、腎結石だった。ずっと剖検をしていたため疲労でパッと喜びを表現できなかったが先生の優しさに感謝した。

3 日目は、三連休前日の金曜日であるためか、病理へ依頼された動物はウサギしかいなかった。さらにこのウサギは先生たちだけで剖検をしたいので、生徒はやらないでということだった。見るだけなら可能だという。そのため当日に依頼されることが無ければ今日はオフ、13 時までに連絡が無ければ、もう来なくて良いという。

ところで、今回病理学のローテーションで一緒

だった生徒さんのうちの 1 人で、日本語を勉強しているという女の子がいたのだが、その子は、私たちに気さくに話しかけてくれ 1 日目も 2 日目も親切に話してくれていた。その子と友達が、うちに遊びに来る？と誘ってくれたので、3 日目はその子と遊んだりお喋りしたりすることができた。！私はこれまで日本国外に出たことがなく、アメリカの海外研修に来たのは、アメリカの獣医学事情について知りたいということに加え、アメリカや外国の文化に触れられることと、英語に触れられることに大きな期待を寄せたからだ。

そのため生徒さんと友達になれたこと、遊びに行きお喋り出来たことは、私にとって念願叶った嬉しい思い出で、楽しい幸せな時間だった。来年日本に来ることがあると言っていたので、そこでまたみんなで会う約束をしている。何よりみんな優しく可愛くて面白い素敵な生徒さんたちだった。

Equine Medicine

2 日間ローテーションに参加したが、どちらの日程も入院患者は疝痛で治療をした馬 1 頭しかおらず、急患を待つ以外は特別な処置がなかった。朝のミーティングの後、先生に **slow day** だよと言われ、**student room** に帰った。生徒のみんなに今からどうするのか聞いたところ、分からないけど、勉強しようかなといていた。なのでこれはチャンスと思い様子を見ながら話しかけてみると、みんな雑談に付き合ってくれた。これまで複数人の外国人と話したことはなかったのでアメリカで人はみんな明るいという偏見を持っていたが、アメリカでもひとりとなりは様々で、色んな性格の人がいるんだなとインドア派の男の子の話を聞いて思った。パーティはあまり好きじゃないと話しており親近感を感じた。処置が無かった時間には、先生と生徒さんがみんな集まってパソコンとプロジェクターを使って馬の品種当てゲームをした。難易度に応じて金額が設定されており、間違えればその金額を失い、あつていればその金額をゲットできる設定の早押しゲームであった。日本ではほとんど学ばない馬の品種ばかりで、全く分からなかった。分かったのはサラブレッドくらいだった。しかし一昨年北里大学に来ていた **Hana** さんを含めた生徒さんは皆そこそこの種類を知っていた。聞いて見たところ一年生の時に一応授業はあったとのこと。もうほとんど覚えていないとは言っていたが、日本以上に馬の勉強が出来そうだなと思った。そのインドア派の男の子は、早押しで勢いよくアピールしながらも、答える時にだけ声が小さく自信なさげにみんなを伺いながら発言する動作をしていてみんなからからかわれていた。面白いキャラクターを持っていて印象的だった。

この2日間では跛行を示す馬（潰瘍ができていた）と角膜炎の馬が急患で来院し、検査、施術をみた。跛行を示す馬では、原因がどこにあるかを調べるために麻酔をかけて部位の特定を調べる検査を行った。ある程度の部位が分かったところでX-rayをとるために馬蹄を外したところ潰瘍が見つかり、原因は潰瘍だったと分かった。角膜炎の馬は、大学近くの馬場で診察をした。フルオルセイン染色で潰瘍を確認できた。この馬には軟膏をつけた他、神経ブロックのためアトロピンを処置し、次の日に来院してもらうこととなった。

Farm animal

ここでは、歩行困難を示すラマ、妊娠しているラマの経過観察、口腔内に mass が出来ているラマの診察と、腹部に mass がある豚の診察、子ヤギのワクチン接種、牛の蹄疾患の治療を見た。歩行困難を示すラマでは神経学的検査、血液検査、脳脊髄液の検査など様々な診断方法を見た。寄生虫の感染が確認されたため寄生虫疾患、神経性の疾患と考えていた。口腔内に mass がみられるラマは、片方の外側の歯が伸びすぎてしまったために口腔粘膜を傷つけ粘膜に潰瘍ができ、肥厚してしまったために mass が出来たと考えられた。治療では、歯鑷と歯鉗を用いて、歯を短くする処置をした。処置後に触らせてもらったところ、刺激を受け続けて mass ができてしまった頬を触らせてもらい、左右の頬の差から腫れを確認できた。妊娠しているラマは妊娠4ヶ月目で超音波で診断をした。胎児の鼓動が見えた時は感動して、みんな笑みが溢れていた。超音波もテネシー大学の学生さんが先生に教えてもらいながら診断を行っていた。ここまでやらせてもらえる環境であれば獣医師の質も上がるだろうし、それに合わせて信頼度もあがるのではと思った。

Others

休日には Kirk 先生にラフティング、ショッピングモール、動物園、Smoky Mountains National Park、Baseball game の観戦に連れて行ってもらった。Hana さんも大学のバンを運転してダウントウンまで連れて行ってくれ、ご飯を一緒に食べたりお買い物をしたりした。ご飯では、チップを置いて行くアメリカの文化を教えてもらい同時に keep the change を使えるようになった。お礼にダウントウンの雑貨屋さんで可愛い石鹸のプレゼントをしたら喜んでくれた。Tennessee の学生さんである Daniela にも幸運にも連れて行ってもらえる機会があったダウントウンだが (!)、建物がアメリカンゴシックな自体で CINEMA、ICE CREAM などの看板があったり、教会がたくさんあったり、自分がアメリカ

にいた実感が湧いてワクワクした。日本食のお店もいくつかあり、居酒屋、などの漢字を見る機会もあった。居酒屋は昼間だったが流行っており、思ったよりも日本の食べ物や文化がアメリカで馴染んでいるとは言い難いが、普通にあるのだなと、嬉しくなった。洋服屋さんは個人的には日本よりも可愛かった。柄物や色物が多く、値段は安くは無いが高くない手頃な金額で、雑貨も面白いものが色々売っていた。ここでも日本のガチャガチャにある、猫用のかぶりものが、8ドルくらいで売られていた。

ラフティングは北海道で一度夏に体験したことがあったが、アメリカでのラフティングの最初の10分もたたないくらいで、北海道の40分を超える、エキサイティングものだった。ガイドさんと、一緒に乗り合わせた女の子ともお話ししながら盛り上がっていたが、私がフッ！という、その言い方が面白かったらしく真似をしていた。その方は色々な場所のラフティングを経験しているが、このラフティングは激流で楽しいよ、と言っていた。その通り一緒に乗り合わせたちさともラフティングの途中で川に落ちるほどだった。この出来事で団結力も増した。

ショッピングモールではお昼ご飯にアメリカ的日本食を味わった。寿司ボウルを頼んだが、醤油ではなくテリヤキソース、ご飯多めでオニオンフライがふりかかっており、アメリカン寿司だった。一緒に渡された箸もパンダが描かれた袋に入っており、アメリカでは中国と日本のイメージは同じなのだろう。買い物は1時間半ほどだったため、早足でみんなのお土産を探した。日本のビレバンのようなお店があり、日本語が書かれたドラゴンボールのTシャツが不自然な日本語で面白かった。

全てが楽しかったのは言うまでもなく、一つ一つの小さな出来事まで大事な時間である。学部長先生、カーク先生はじめ、カーク先生の秘書さん、ハナさん、各ローテーションでお世話になった先生方、生徒さんたちとの、会話、診察での検査、ハプニングまでもが私にとって心に残る思い出であり、勉強であり、未来に活かすべき経験となりました。詳細は是非研修に参加して、体験して欲しいと思います。参加するときには、特に目的を明確にして、現地で聞きたいことを具体的にメモしておき積極的に聞いていくことをお勧めします。やりたいことを逃さないように、この最大のチャンスを活かして下さい！

Lastly...

2週間一緒に過ごした、Maina、Moemi、Chisato、Jun、長い時間一緒にいたにも関わらず、見捨てず、仲良くしてくれてありがとう。みんなの過ごし方が私と似ていてすごく居心地がよく、協力し合

えて大きな問題なく、最高のアメリカ研修になりました。素直に、本当に楽しかった！面白くて心優しく適度に厳しく、最高のメンバーです。

同時に裏でテネシー大学とのやりとりで、私たちのアメリカ研修を支えてくださった前田先生、何より、同行してカメラマン、トランスレーター、お父さん、としても支えてくれた中村先生には、いつも笑いを提供して下さり、安全を常に考えていただいて、安心してアメリカ研修を謳歌できました。ローテーションで中村先生がいると安心感がありました。英語の語学の面でも本当にお世話になりました。最高のサポーター、最高の先生です！

他にも、海外研修に参加させてくれた両親と、見えないところで働いてくれた関係者の方々に感謝を述べたいと思います。本当にありがとうございました！！

テネシー大学獣医学部同行教員

中村 和市 Kazuichi NAKAMURA

私の場合、獣医学教育に携わるようになってから4年間しか経っていない。これまで獣医医療に携わったこともない。しかも獣医学教育から直に去ろうという人間である。しかし、現在獣医学教育に身を置くものとして、国内外の獣医学教育について考えることは当然ではないか。このような機会を与えられ、学内の支援体制に感謝しつつ、現地ではできる限りの多くのことを吸収したいと考えていた。過去に同行教員として参加された先生方や長年獣医学教育に関わってこられた先生には何を今更と思われることばかりのレポートであろうが、私なりの切り口や新たな見方も少しは示せるのではないかと思います。浅学ゆえの理解不足はご容赦願いたい。

テネシー大学の獣医学部は、Biomedical and Diagnostic Services、Large Animal Clinical Sciences、Small Animal Clinical Sciences の3つの研究科に分かれている。Biomedical and Diagnostic Services 研究科には基礎系の研究室が置かれている。本研修をコーディネートいただいた同学部の副学部長であられる Kirk 先生のご配慮で Clinical Endocrinology 研究室の先生方と1時間ほど意見交換させていただく場を設けていただいた。私の研究に一番近いと判断されたのであろう。Clinical Endocrinology 研究室では、エキゾチックアニマルも含む様々な動物種における動物薬の PK 試験を行い適切な用量の検討を行っていた。私の場合、研究室ではヒト用医薬品の開発を目指しているのだが、おそらく Biomedical and Diagnostic

Services 研究科の他の研究室においても獣医バイオマーカーの開発などの獣医医療に向けた基礎研究を行っているのであろう。米国の獣医学部の臨床を支える層の厚さを感じ、私自身忸怩たる思いもよぎった。一方で、この違いは日本では産業構造や政策に依存した獣医師の需要が多方面にわたっているが所以なのかもしれないとも思った。2014年に文科省での「獣医学教育の改善・充実に関する調査研究協力者会議」に呼ばれて、医薬品の研究開発に関わる獣医師に役割について報告したことがある。そのときには、国際獣疫事務局（OIE）アジア太平洋地域事務所や動物用医薬品薬開発に関わる人も呼ばれ報告されていた。未だに日本の獣医学教育のあり方というのは模索が続けられているということであろうか。

さて、北里大学からは毎年5年生の学生は臨床教育を体験する。そのため研修では現地獣医学部4年生の臨床ローテーションに参加するように組まれている。テネシー大学の学生は、以下の科目について、それぞれ2週間ずつかけて学ぶ。北里大学の研修学生の場合は、事前に選択した科目についてそれぞれ1日から数日かけて回る。

- Equine Surgery**、Equine Medicine、Equine Performance/Rehabilitation
- Farm Animal Medicine*
- Small Animal Medicine*、Small Animal Soft Tissue Surgery**、Small Animal Orthopedic Surgery、Small Animal Community Practice*、Small Animal Physical Rehabilitation*
- Exotics (Avian and Zoological Medicine and Surgery)*
- Dermatology、Ophthalmology
- Radiology
- Pathology

私も研修参加学生とともに*印で示した科目を回った。**印で示した科目では、研修参加学生からスクラブを借りて見学した。大学卒業後、マウス、ラット、モルモットなどしか扱ってこなかった私にとっては、あらためて獣医師の本流を見たように思った。いずれの診療科でも朝は通常何となくゆっくり始まる。教官は午前9時ごろ診療科に入り日々の打合せ rounds を開く場合もある。時には診療や手術がないこともある。手術室では、教官や研修医が各自好みの音楽をかけている獣医師もいた。

大動物臨床関係では、ウマの全身麻酔下の骨腫の摘出、ウシの化膿性関節炎治療のためのギプス装着なども見学させていただいた。各担当教授からは研修参加学生とともに別途呼ばれ、前者に関しては、X線写真画像を示され骨腫が年月を経て当初の打撲による血腫から移行したものであること、後者に関

してはギプスの実物のパーツをもとに説明いただいた。また現地の学生からウシの蹄に見られる白帯病については、蹄の神経分布がウマよりも密であることからウシではより痛みを伴うことなども教わった。小動物臨床関係では、門脈体循環シャントの手術を見学させていただいた。学生は壁際に直立して教官やレジデントによる手術風景を見ていたことが印象的であった。時に術者から呼ばれて術野を見せてもらう。我々も同様にさせていただいた。その周囲では看護師が術者をタイミングよくサポートしていた。また Small Animal Physical Rehabilitation や Small Animal Community Practice 診療科では、それぞれ歩行プールでのリハビリテーションや保護シェルターから引き取られた小動物のケアを見学することができた。エキゾチックアニマル診療科では、保護された野生のクロクマからのハエの幼虫の摘出手術、動物園から持ち込まれ衰弱したトラの健診なども見学した。他の獣医系大学でもなかなか見ることができないものではなかろうか。また猛禽類診療のつながりでアメリカンフットボールのスタジアムでの鷹狩りの練習も見せていただいた。臨床ローテーションには含まれていないが、大学病院内の薬局も見せていただいた。専属の薬剤師が常駐し、医薬品が薬効ごとに整理され各診療科の獣医師が受け取りに来る。

様々な面でいつも笑顔で親切に対応してくださった Kirk 先生であったが、まさに一度だけ苛立ちを見せたことがあった。それは、現地で事前に選択をした科目の翌週分のローテーションの変更を希望したときのことであった。各科目の先生方とも十分に打ち合わせたうえ設定されたローテーションであったに違いない。

テネシー大学に限定されるが、米国での獣医学教育の実際を見ることができ、臨床経験もないのに獣医師であることが誇らしく、毒性学の講義を通して学生をしっかり教えなければいけないと思った。また今年度から就職委員を拝命しているが、その業務に役立つことも間違いない。設備やスタッフを羨むことは当然で、たやすいが、その背景には各国・地域の実情あるいは需要があるのであろう。日本では、競走馬以外のウマの診療の需要は多いとは言えないのではなかろうか。産業動物の獣医医療などは、産業構造などの観点からも議論されるであろう。前述したように、米国大学の獣医学部は基礎研究も含めて臨床指向である。日本では、防疫、公衆衛生、果てはかつての私のように製薬企業などで働く獣医師も多い。日本の獣医師の進路は多彩である。グローバル化の時代、海外のやり方を学びつつも、それをそのまま取り込むことは適当ではないと考える。研修中にある参加学生に北里でも卒論をなくしてもよ

いのではないかと言われた。私は、自身の思うところの研究を学生に行ってほしいとの思惑もあったが、一理あるとも思った。しかし、日本では学生の進路が多様であることを考えても、やはり卒論はあったほうが良いと思う。

研修参加学生にとって、診断名や症状名などについては北里の講義・実習で習っていたものもあり、しっかり現地で吸収できていた。私のほうが学生から教わることになった。一方で、病態機序などの説明があると、私のほうから学生に伝えた。学生からは、毒性以外のことも分かるのかとお褒めをいただいたりもした。私は、原則遠巻きに診療風景を見ていたが、それでも多くの様子を写真に収めることができ、毒性学研究室の4年生を中心に紹介することができ役立っている。毒性学の授業でも披露しようと思っている。昨年、北里大学も訪問した Hana-san もちょうど最終4年生で馬の外科実習に参加しており、いろいろ面倒みていただいた。研修参加学生たちも心強かったであろう。

一方で、米国人も様々である。一般的には親切であるが、特にあまり海外に出たことのない人、わが道をひた走る人などは、おうおうにして外国人には無関心で時に冷淡でさえある。北里の学生たちも、そのような人に遭遇したかもしれないが、結局人それぞれだとの理解につながる。研修期間中、国立公園など様々な場所に連れて行っていただいたり、ラフティングや学生同士のパーティーにも誘っていただいた。学生同士パーティーには慣れないことから、当初行くのを渋っていた北里の学生であったが、学生同士ですぐに打ち解けむしろ私のほうが取り残されていた。このような自然、文化や生活に触れることは大切なことで、研修参加学生も積極的に参加し楽しんでた。

私も何か発信したいと思っていたが、“Translation of the historical Insights of Toxicology into Current Risk Assessment” and “Functional Anatomy in Immunotoxicology”と題する特別セミナー(1時間)を開かせていただいた。事前には、2年生への講義という聞き及んでいたもので、北里での大学院講義英文資料を焼き直して準備していたのだが、10名ほどで少ないながら教官が集まった。テネシー大学でセミナーを開かせていただけるのであるから、こんな名誉なことはない。冒頭、北里大学の紹介、北里柴三郎先生が第1回ノーベル医学生理学賞にノミネートされながら受賞できなかったこと、大村 智先生がそのリベンジを果たしたことなどにも触れた。

日本国内では、英語などを使う必要もない。話さなくて当然ではないか。しかし、英語で意思の疎通ができれば何より楽しい。研修に参加した学生は、

2週間の研修を終えるころには Kirk 先生も素直に驚かれたほど話せるようになっていた。最初は単語を並べるだけだったのに、文章になっていた。そのことを Kirk 先生も思われたに違いない。最終日には、期間中学んだことについてプレゼンテーションの時間が設けられている。全員、英語の面でも内容の面でも、私の想像を超えるプレゼンテーションを行った。皆、本当に頑張ったのだと思い、目頭が熱くなった。そして、何より秘書の方、プロジェクターをセットしてくださった方なども含めてすべてのスタッフに感謝の気持ちを表していたことも付け加えたい。

リーダーとしていつも明るく皆をさりげなくチームをまとめていた Jun、Kirk 先生の親切に感極まり泣いた Maina、困ったときにふと救われる言葉でチームを前に進めた Yurina、冷静な解析でプレゼンテーションを行った Moemi、そして人が見ていないところでも頑張る Chisato。若い君たちにとっては、この研修がこれからの人生に大きな糧になるであることは間違いない。そして、皆のおかげで、私はいろいろなことを学ぶことができ、楽しい時間が過ごすことができた。感謝の気持ちでいっぱいである。本当にありがとう。

For University of Tennessee

Two weeks at Tennessee University was a lot of fun. I could learn what I could not learn in Japan. At first, I could not speak or listen to English, so I was worried about how much I could study. However, a lot of people cared about me and I could know a lot of things even if I do not know English perfectly. What I learned at the University of Tennessee is a great wealth in my life. I'm really thankful to you.

Moemi Egawa

Dear Dr. Kirk , Hana and all members of UTCVM,

I spent great two weeks thanks to you. In Tennessee, I gained a lot of experiences, which were very fresh and wonderful for me. I will never forget them. I want to return to the days. It is because you were so kind that I thought like this. I really appreciate you. I'm sorry I couldn't speak English well and understand soon what you said, so I will study English more. Thank you

very much!!!

Maina Kaisho

Dear UTCVM members

I deeply appreciate everyone who had done with me. Thanks to you, I had a great time! I'm so glad to meet you. Thank you for talking slowly for me and answering my question over and over. The slang that Dr. Kirk taught us was a great learning.

I wish I will meet you someday again. I shall make the most of what I've learned in the UTCVM, and I never forget two weeks in the UTCVM.

Thank you very much.

Jun Hakozaki

Dear Dr. Kirk and all of UTCVM

Thank you for your hospitality out of your busy schedule. I have learned and experienced so much for two weeks, thanks to you. I want to take advantage of this experience. I will never forget you and this experience. I want to go to Tennessee and see you again. Thank you very much!

Chisato Hayakawa

Dear Dr. Kirk and all of UTCVM

Almost one month have passed since we left Tennessee. First of all , I want to say thank you so much for everything two weeks. Your support makes our stay comfortable, fun, amazing! I was reassured with you when we arrived at airport, hotel and went out to eat, and left Knoxville Airport. And I had a lot of fun with you, Dr. Kirk, Hana, Daniela, all of UTCVM. I became interested in Pathology and Exotic animal while studying at Tennessee University. So I'm going to go to Exotic animal hospital for practice in this winter. I could find new interest at Tennessee University. I appreciate it! I will be back to Tennessee some time. Thank you.

Yurina Fukuda

Dear the University of Tennessee, School of Veterinary Medicine (UTCVM)

Please accept our sincere appreciation for your kindness and hospitality. As our visit to UTCVM was perfectly organized, the students effectively absorbed clinical knowledge through the clinical rotation. The students this year are lively and sturdy, and were keen to study various clinical practices. They soon mingled with the UTCVM students there. Three month would suffice for them to become real UTCVM students. Dr. Kirk pointed out on the last day of our visit that our students had improved their English well. Actually they were a bit hesitant to go to the student party at Beer Market, but once there they enjoyed a lot while I was remote from young students just watching them play games. Luckily we met Hana-san again who is a fourth grade student this year. She was taking the equine surgery and medicine at that time. She is a wonderful person taking care of us during the clinical rotation. She also went to Great Smoky Mountains National Park with us. We were stunned by the beautifully preserved nature of the Park and traced the trait of old settlers in Cades Cove. Hana-san knew well about plants there. She took botanic sciences at the college before. The students were thrilled with spine-tingling rafting on Ocoee River. I will never forget their smiling faces on the boat. We enjoyed a baseball game Pensacola Blue Wahoos vs Tennessee Smokies very much even though Shohei Ohtani was not there. To our regrets Smokies lost that game in the end. Dr. Jones invited us to eagle fly at Neyland Stadium where I touched down on the arena literally. Dr. Ramsay, who brought in a tiger to the University Hospital, guided us at Zoo Knoxville. Since then some of our students have been considering working at zoo in Japan. We were generously invited by Dr. Thompson, the Dean of UTCVM, to the party for the second year grade students. His mansion (enormous house) is absolutely gorgeous. I met Dr. Mulon from France talking about how to be qualified as a vet in the United States. I also asked the students there about what they will be in future. I would also like to thank the two secretary ladies at the administration. They were always thinking of and supporting us whenever we needed helping hands. The people are all kind!

It was only four years ago when I started my career in vet education. Although I am a vet, I mostly deal with mice and rats. So before I visited UTCVM, I had determined to learn about vet clinical practices and education in the United States. You kindly allowed me to go round each clinical unit with our students. I saw many staff, students and residents diligently working and attentively studying at UTCVM. Our students and I were overwhelmed by the number of patients coming to the hospital as well as its facilities and equipment. I was also given a chance to talk with Drs. Cox, Fecteau and Giori from Clinical Endocrinology Laboratory for about one hour. They estimates the dose of several drugs in some animal species through PK studies. The meeting with them showed me a new area of subject Japanese vet scientists should tackle. It was a great honor to give a special seminar about "Translation of the historical Insights of Toxicology into Current Risk Assessment" and "Functional Anatomy in Immunotoxicology" at UTCVM. At the beginning of my talk, I briefly touched on the history of Kitasato University. Did you know about it?

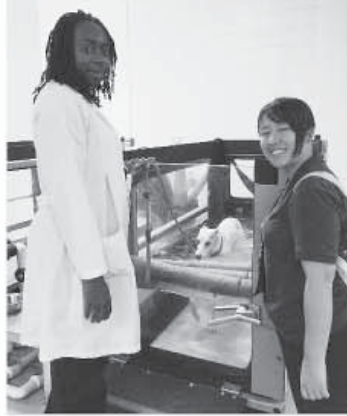
I am very proud of the Kitasato students because they strenuously participated in the clinical rotation and finally gave excellent presentations. I was so impressed by what they had achieved through their visit. There is no room for doubt that the students will never ever forget the two weeks at UTCVM. Those were the days!

Finally but most importantly, I must say that Dr. Kirk made tremendous efforts and works for our visit. She was always with us and seeking the best way for us. Without her our visit would have been absolutely in vain. She should be the asset of UTCVM. What she brought to the five students, Moemi, Maina, Jun, Chisato and Yurina, will be their treasures all through their lives. THANK YOU VERY MUCH!!

We left our hearts in Knoxville!

Kazuichi Nakamura, DVM, PhD





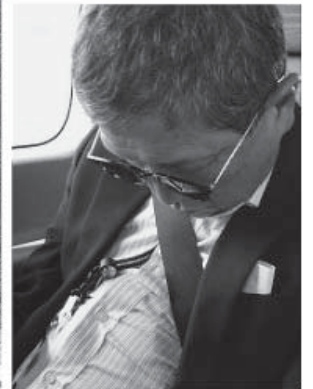
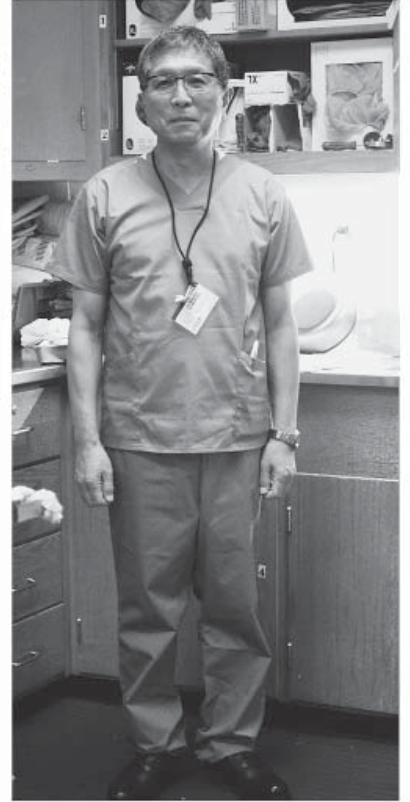


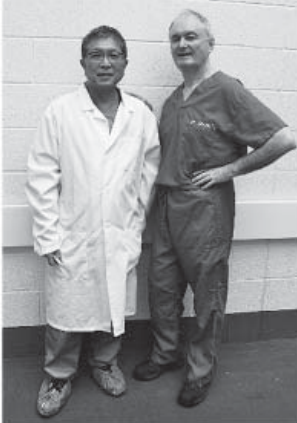




Shibas

- Shibasal Robert I and cho 1914 or especial
- In 1962 Univers Univers





北里大学 獣医学部 獣医学科 米国三大学夏期研修 2018

インディアナ州立 パデュー大学 獣医学部

Purdue University, College of Veterinary Medicine

West Lafayette, Indiana, <http://www.vet.purdue.edu>

出国 : 8/11 (土) 成田 17:45 発 UA 882

帰国 : 8/26 (日) 成田 15:55 着 UA 881

ジョージア州立 ジョージア大学 獣医学部

The University of Georgia, College of Veterinary Medicine

Athens, Georgia, <http://www.vet.uga.edu>

出国 : 8/11 (土) 成田 16:30 発 DL 296

帰国 : 8/26 (日) 成田 14:35 着 DL 295

テネシー州立 テネシー大学 獣医学部

The University of Tennessee, College of Veterinary Medicine

Knoxville, Tennessee, <http://www.vet.utk.edu>

出国 : 8/25 (土) 成田 10:55 発 AA176

帰国 : 9/9 (日) 成田 14:00 着 AA175

学籍番号 : _____ 氏名 _____

Passport No. _____

Schedule 1 Purdue University



<http://www.vet.purdue.edu>

研修先の担当の先生：Dr. Tomohito Inoue

Purdue University, College of Veterinary Medicine,
West Lafayette, IN 47907-1240, USA

Tel : +1-765-494-1107 Fax : +1-765-496-1108



Director of Global Engagement: William Smith II

Purdue University College of Veterinary Medicine

Email: wsmithi@purdue.edu Tel: +1-765- 494-5780

研修期間の宿泊先：

1710 Northwestern Ave, West Lafayette IN 47906, USA

Tel : +1-765-404-5034 (Nadine)

出国：8/11（土） 成田 17:45 発 UA 882、帰国：8/26（日） 成田 15:55 着 UA 881

参加者名簿（6名）

学生番号	氏 名	Name	所属研究室
14052	兒山 千歌	CHIKA KOYAMA	獣医解剖学
14097	新倉 勇貴	YUUKI NIIKURA	実験動物学
14114	福井 あみ	AMI FUKUI	小動物第1外科学
14118	平島 達也	TATSUYA HEISHIMA	小動物第2外科学
14138	山本 親一郎	SHINICHIRO YAMAMOTO	小動物第2内科学
14140	若山 夢歩	YUMEHO WAKAYAMA	獣医伝染病学

同行教員：筏井 宏実 HIROMI IKADAI

携帯：

Flight Information

Date	Flight	Flight No
8/11（土）	成田 17:45 → シカゴ・オヘア 15:45	UA 882
	シカゴ・オヘア 18:30 → インディアナポリス 20:39	UA 3939
8/25（土）	インディアナポリス 10:30 → シカゴ・オヘア 10:40	UA 5999
	シカゴ・オヘア 12:45 → 成田 15:55 <8/26（日）着>	UA 881

出国時の集合日時と場所：8/11（土）15:30

成田空港第1ターミナル／南ウイング4F ユナイテッド航空チェックインカウンターDEZ 付近

https://www.narita-airport.jp/jp/t_info/UAL

(Tel : 03-6732-5011 <https://www.united.com/ual/ja/jp/>)

Schedule 2 The University of Georgia

<http://www.vet.uga.edu>



研修先の担当の先生 : Dr. Mary Hondalus (Associate Professor)

The University of Georgia, College of Veterinary Medicine, Athens, GA 30602, USA

Tel : +1-706-542-8076 Fax : +1-706-542-5771 E-mail: hondalus@uga.edu

研修期間の宿泊先 :

The University of Georgia Center for Continuing Education (Georgia Center)

1197 South Lumpkin Street, Athens, GA 30602-3603

Tel : +1-706-542-2654 Fax: +1-706-542-2635

最終日 8/24 (金) -25(土) : Westin Atlanta Airport

4736 Best Road, Atlanta, GA, 30337, United States

Hotel Front Desk: +1-404-762-7676 / Fax: +1-404-559-3996

<http://www.westinatlantaairport.com>

出国 : 8/11 (土) 成田 16:30 発 DL 296、帰国 : 8/26 (日) 成田 14:35 着 DL 295

参加者名簿 (5名)

学生番号	氏 名	Name	所属研究室
14002	荒谷 桃子	MOMOKO ARATANI	獣医薬理学
14019	大場 裕輔	YUSUKE OBA	獣医寄生虫学
14037	川崎 歩	AYUMU KAWASAKI	実験動物学
14050	小松 誠高	MASATAKA KOMATSU	小動物第2内科学
14116	藤岡 友星	YUSEI FUJIOKA	獣医薬理学

同行教員 : 安藤 亮 RYO ANDO

携帯 :

Flight Information

Date	Flight	Flight No
8/11 (土)	成田 16:30 → アトランタ 16:11	DL 296
8/25 (土)	アトランタ 11:44 → 成田 14:35 <8/26 (日) 着>	DL 295

出国時の集合日時と場所 : 8/11 (土) 14:00

成田空港第1ターミナル/北ウイング4F デルタ航空チェックインカウンターABC 付近

https://www.narita-airport.jp/jp/t_info/DAL

(デルタ航空 Tel : 0570-07-7733/050-3850-8388 <http://www.delta.com/>)

Schedule 3 The University of Tennessee

<http://www.vet.utk.edu>



研修先の担当の先生：Dr. Claudia A. Kirk
University of Tennessee, College of Veterinary Medicine, A102,
2407 River Drive, Knoxville, Tennessee 37996, USA
TEL: +1-865-974-7263, E-mail: ckirk4@utk.edu

研修期間の宿泊先：
Homewood Suites by Hilton Knoxville West at Turkey Creek
10935 Turkey Drive, Knoxville, Tennessee, 37934, USA
TEL: +1-865-777-0375, FAX: +1-865-777-0381

<http://homewoodsuites3.hilton.com/en/hotels/tennessee/homewood-suites-by-hilton-knoxville-west-at-turkey-creek-TYSHWHW/index.html>

出国：8/25（土）成田 10:55 発 AA 176、帰国：9/9（日）成田 14:00 着 AA 175

参加者名簿（5名）

学生番号	氏 名	Name	所属研究室
14013	江川 萌美	MOEMI EGAWA	獣医病理学
14029	改正 茉侑奈	MAINA KAISHO	獣医薬理学
14102	箱崎 純	JUN HAKOZAKI	獣医寄生虫学
14109	早川 千里	CHISATO HAYAKAWA	小動物第2外科学
14115	福田 友理奈	YURINA FUKUDA	獣医微生物学

同行教員：中村 和市 KAZUICHI NAKAMURA
携帯：

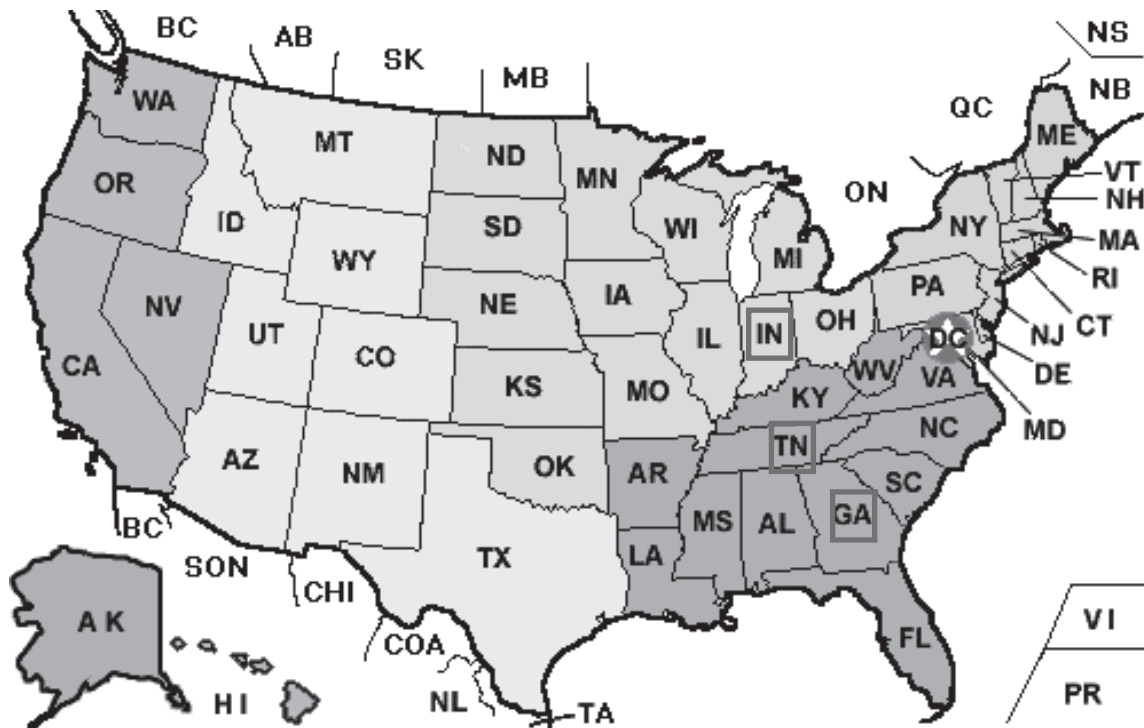
Flight Information

Date	Flight	Flight No
8/25（土）	成田 10:55 → ダラス 8:35	AA 176
	ダラス 10:35 → ノックスビル 13:47	AA 3005
9/8（土）	ノックスビル 6:40 → ダラス 8:05	AA 3259
	ダラス 10:35 → 成田 14:00 <9/9（日）着>	AA 175

出国時の集合日時と場所：8/25（土）9:00
成田空港第2旅客ターミナルビル／北ウイング3F アメリカン航空チェックインカウンター D E
https://www.narita-airport.jp/jp/t_info/AAL

Tel：03-4333-7675（月 - 金 9:00～17:30）<http://www.americanairlines.jp>

アメリカ合衆国地図：赤色の囲みが各大学のある州



注意事項

注意事項に関しては、以下の成田空港の HP でも確認しておください。

<https://www.narita-airport.jp/jp>

1) 成田空港までの交通機関

JR、京成電鉄およびリムジンバスが成田空港に乗り入れています。いずれも本数が限られていますので、余裕をもって乗車しましょう。

<https://www.narita-airport.jp/jp/access>

JR：総武線と成田線の快速で東京駅から 80 分。

成田エクスプレス（座席指定が必要）は、各地（東京、横浜等）からあります。

京成電鉄：

京成上野駅からスカイライナー（座席指定が必要）で約 45 分、料金は約 2500 円。

特急約 75 分、料金は 1250 円程度。

その他の快速や急行などでは、乗り換えがあり、時間がかかりかかります。

JR、京成電鉄：	
第 2 ターミナル利用	→ 空港第 2 ビル駅
第 1 ターミナル利用	→ 成田空港駅（終点）

高速バス：

各地（東京、大宮等）からありますが、道路事情で所要時間が大きく左右されますので利用は控えた方がよいでしょう。

2) 飛行機へのチェックイン

- 各航空会社の成田空港チェックインカウンターで行います。
- 旅行代理店から渡された e-ticket とパスポートを航空会社のカウンターに提示します。搭乗券 boarding pass を受け取り、パスポートの返却を受けてください。アメリカ乗り継ぎ便がある場合には、その便の搭乗券ももらえますので、なくさないようにしましょう。ただし、乗り継ぎ空港での搭乗口 gate の番号は記載されていません。現地空港の案内モニターで確認します。
- 大きなスーツケースを預けます。搭乗券の裏面に手荷物引換証が貼られます。荷物はアメリカ入国時に戻ってきますが、乗り継ぎ便がある場合、税関手続き後に再度預けます。貴重品や空港内・機内で必要なものは機内手荷物に入れましょう。
- これから海外旅行を繰り返す可能性のある人は、マイレージサービスなどの手続きをするのも良いでしょう。

3) 日本出国手続き

- ESTA への登録は、出国の 2 週間前には済ませておきましょう。
- 出国前に、航空会社の HP から以下の情報を申告することが義務付けられています。
米国滞在先住所：ホテルの ZIP コード、州名、都市名、番地、ストリート
- 日本出国に際しては、搭乗券とパスポートを審査官に提示してください。

4) 米国入国手続き

- ESTA への登録を行っていれば、入国審査カードへの記載は必要ありません。
- 入国審査後に税関で米国税関申告書を提出する必要があります。米国税関申告書は機内で配られますので、必ず受け取って記載しておいてください。その際には旅券番号や宿泊先情報が必要です。パスポートをなくさないためにも、パスポートを取り出さなくてよいように予めメモしておくといいでしょう。
- アメリカ入国の際、乗って来た航空機の便名、訪問理由、訪問先、滞在期間などを聞かれます。指紋（指の名称を英語で言えますか？）や顔写真も取られます。2008 年以降、現在のパスポートで米国入国歴のある人は、APC (Automated Passport Control) KIOSK という自動入国審査端末機で迅速に手続きができ、審査官による審査を受ける必要はありません。APC KIOSK では、日本語ガイダンスによる入力もできます。
- 税関では、全員ではありませんが、スーツケースを開けて検査される場合もありますので、指示に従ってください。

5) 荷物チェックリスト

機内持ち込み荷物

- パスポート（紛失・盗難に備えてコピーと写真 2 枚も準備しておく）
- 航空券（e-ticket：コピーをとり、別にしておく）
- 現金、クレジットカード、海外旅行傷害保険証
- 筆記用具、ノートパソコン、デジカメ
- スリッパ（機内と宿舎内で便利）
- 1 泊分の衣服（スーツケースと一緒に到着しなかった場合に備えて）
- その他（安眠枕、耳栓、アイマスク、ウェットティッシュ、コンタクトレンズ）

預け入れ荷物

- 常備薬（解熱薬、胃腸薬等）、防虫薬（スプレー缶は避ける）
- 洗面用具（洗顔石鹸、歯磨きセット、ブラシ、タオル）、ひげ剃り、ハンカチ、ティッシュペーパー、爪切りなど
- 洗濯用具（洗剤、洗濯バサミ、洗濯ロープなど）
- パジャマ/ジャージ（ホテルには置かれていません）
- その他の衣類（圧縮袋を使うと便利）、ビニール袋（いろいろ便利）
- デイパックなど（ちょっと出かける際に便利）
- 目覚まし時計（遅刻しないように）
- 眼鏡を使用している人は、予備の眼鏡を持って行くのが望ましい

注意！！

- 航空会社によって多少異なりますが、AA の場合、預け入れ（受託）荷物は基本的に 2 個まで無料（1 個にまとめましょう）。ただし、23 kg/個を超えないこと。それぞれの手荷物の 3 辺（縦・横・高さ）の和が 158 cm を超えないこと。
- 米国内空港で預け入れ荷物が戻って来ない場合には、その場（到着ロビーに出る前）に baggage claim のカウンターがあるので、宿泊先の住所を届けておく。当日あるいは翌日に無料で届けられます。
- スーツケースに鍵をかけると、中身のチェックのために鍵を壊されます。鍵をかけないか、TSA ロックと呼ばれる鍵の付いたスーツケースやバンドを使用した方がよいでしょう。
- 刃物や飲料水は機内持ち込みが制限され、液体物は 100 mL/容器以下で複数ある場合はジッパー付き透明袋（縦横：計 40 cm 以下）に入れます。引火性のあるものやライター、マッチは預け入れも制限されています。詳しくは HP 等で確認してください。

<https://www.narita-airport.jp/jp/security>

- 貴重品、カメラ・ビデオ・パソコンは、必ず機内持ち込み荷物に入れましょう。

6) 日本再入国手続き

- 日本での税関に「携帯品・別送品申告書」を提出します。機内で配られるので、必ず受け取って予め記載しておきましょう。
- 下痢や発熱など、体調に異常のある人は、検疫官または健康相談室まで申し出てください。
- 植物(果物、種子、野菜など)や動物(ハム、ソーセージなどの肉製品を含む)を日本に持ち帰る場合は、植物・動物検疫カウンターで、所定の証明書類や検査が必要となります。

https://www.narita-airport.jp/jp/step/inter_t1_arr/#section-4

- 日本人の再入国審査には時間を要しないので、飛行機から降りたあと急いで審査に向かう必要はありません。

7) 海外旅行保険

アメリカでは病気や怪我の治療には、保険がないため大変高額な医療費を要求されます。そこで、皆さんには予め海外旅行用の損害保険に加入してもらいました。保険証書といっしょに、推奨の医療機関や日本語の通じる医者などのリストが渡されたはずですので、この資料を各自が忘れずに携帯してください。

米国での歯科治療費は保険でカバーできません。渡航前に歯の治療を済ませておきましょう。

8) 現地で

電話

- 海外から日本へ通話するには、オペレーターを通すよりもクレジットカードがあれば安くて簡単です。かけ方は概ね以下の通りです。
受話器を取り、カードを通して、0081（日本の国番号）を押し、その後にかけた相手先の電話番号から最初の0をとったものを押します。
- 出国前に自分の携帯電話をアメリカでも使用できるものに交換できるサービスを利用するのも良いでしょう。ただし料金は割高です。

お金など

- 現金は100～200ドル程度準備します。これを小銭1、5、20ドル札に分けて持っておけば何かと小用の買い物に便利です。土・日は銀行が休みだったり、朝早く、また夜遅くに飛行機が着いて両替できないことがあります。100ドル札（特に未使用札）の使用は嫌がられることもあります。帰国後、ドル札は日本円に換金できますが、コインは換金できません。帰国直前までに（空港等で）コインを最優先で使い切るようにすればムダがありません。
- チップについては、レストラン（ファーストフード店では不要）では15%、タクシーでは10%、ホテルではピローチップを毎朝1ドルぐらい、重いバッグを持ってもらっても1ドルで十分です。
- 大学内でも不用意に財布を置かないように！カバンと一緒に置き忘れると盗難に遭う可能性は高いので、注意しましょう。

その他

- アメリカはサマータイム中のため時差より1時間早いことに注意しましょう。
- 室内は禁煙が原則です。ホテルの部屋でも禁煙の所も多いので、喫煙可能な場所を確かめましょう。
- 帰りの飛行機のリコンファーム（予約再確認）は不要です。
- 水着を持って行っておくと、キャンパスにあるプールに入れるかも。
- 免税店は最後に搭乗する空港でだけ利用できます。チェックイン後、搭乗までが買い物時間。

9) 報告書の提出

帰国後、研修の報告書を作成してもらいます。6000-8000 字程度の体験記をまとめ、各同行教員に WORD 文書の電子ファイルを提出してもらいます。実習中に日々の研修活動やレクリエーションについて、こまめに記録をしておきましょう。お世話になった現地の先生方へも報告書を送るので、英語でまとめの文章も必ず書いてください。
報告書提出締切： 9 月 28 日（金）

10) 国内連絡先

北里大学獣医学部獣医生化学研究室

青森県十和田市東 23 番町 35-1

折野 宏一 教授

電話：0176-23-4371（内線 454）、E-mail：orino@vmas.kitasato-u.ac.jp

Prof. Koichi Orino

Kitasato University, School of Veterinary Medicine,

Higashi 23-35-1, Towada, Aomori 034-8628, JAPAN

Tel: +81-176-23-4371, Fax: +81-176-23-8703

E-mail: orino@vmas.kitasato-u.ac.jp

